

都市計画道路揖屋馬瀬線整備事業予定地内発掘調査報告書

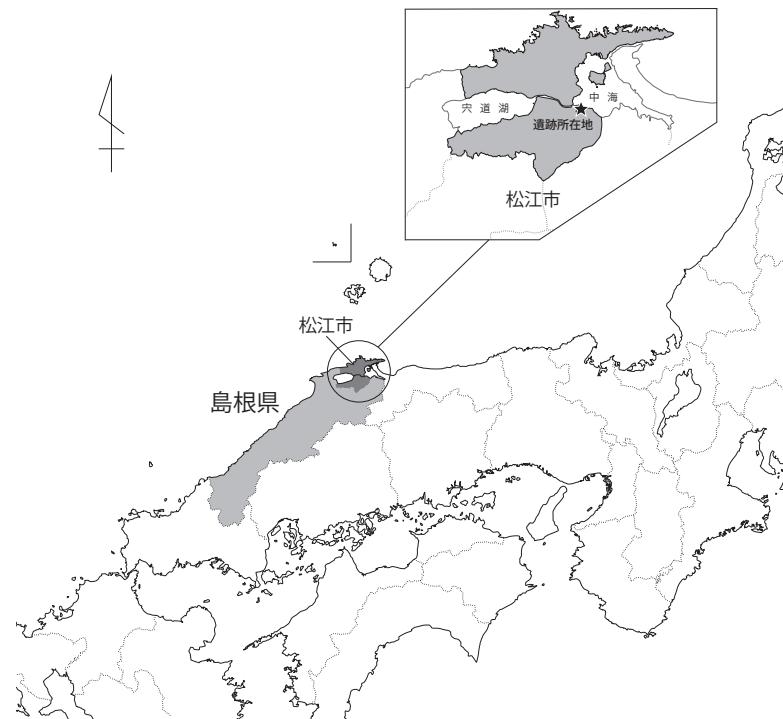
崎田遺跡・種前遺跡

令和6（2024）年 3月

島根県松江市

都市計画道路揖屋馬瀬線整備事業予定地内発掘調査報告書

さきだ たねまえ
崎田遺跡・種前遺跡



令和6（2024）年3月

島根県松江市

例　言

- 本書は、令和3年度に実施した都市計画道路揖屋馬渕線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
- 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部道路課から松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課（現・松江市文化スポーツ部埋蔵文化財調査課）が依頼を受けて実施した。
- 本遺跡の名称および所在地は下記のとおりである。

名　称　崎田遺跡・種前遺跡

所在地　島根県松江市東出雲町揖屋 3419-5、3422-15、2536、2538-1

- 発掘調査業務および報告書作成業務の事業年度

発掘調査業務 令和3（2021）年8月1日～令和4（2022）年1月10日

報告書作成業務 令和5（2023）年4月3日～令和6（2024）年3月29日

- 調査面積

崎田遺跡 395.16m²、種前遺跡 270.65m²

- 調査組織

主　体　者　松江市

市　　長　上定　昭仁

調査指導　島根県教育庁

文化財課

企　画　員　稻田　陽介

【令和3年度】　現地調査業務

松江市歴史まちづくり部	部　　長	須山　敏之（～5月31日）
〃	〃	松尾　純一（6月1日～）
〃	次　　長	松尾　純一（～5月31日）
〃	〃	井上　雅雄（6月1日～）
〃　　まちづくり文化財課	課　　長	尾添　和人
〃　　〃　　文化財総合コーディネーター		丹羽野　裕
〃　　〃　　埋蔵文化財調査室	室　　長	川上　昭一
〃　　〃　　〃　　調査係	係　　長	川西　学
〃　　〃　　〃　　〃　　主　　任		徳永　隆（担当者）
〃　　〃　　〃　　〃　　会計年度任用職員		関　あかり

【令和5年度】　報告書作成業務

松江市文化スポーツ部	部　　長	松尾　純一
〃　　埋蔵文化財調査課	課　　長	川上　昭一
〃　　〃　　文化財総合コーディネーター		丹羽野　裕
〃　　〃　　発掘調査係	係　　長	徳永　隆
〃　　〃　　〃　　文化財主事		森山　優花（担当者）
〃　　〃　　〃　　会計年度任用職員		木村　由希江

7. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量など）については、以下の機関に委託した。

株式会社 祥好建設（松江市下東川津町）

8. 本書に掲載した遺物の復元、遺物実測図の作成・浄書、遺構図の浄書は以下の職員が担当した。

角 優佳（会計年度任用職員）

9. 本書に掲載した遺構写真は徳永が撮影し、遺物写真は森山が撮影した。

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた。記して謝意を表する。

（敬称略・五十音順）

赤澤 秀則（松江市立鹿島歴史民俗資料館 館長）

西尾 克己（松江市史松江城部会長）

間野 大丞（島根県教育庁文化財課世界遺産室 高速道路調査推進スタッフ）

米田 克彦（岡山県古代吉備文化財センター 総括副参事）

11. 本書に掲載した測量データ・遺物および実測図・写真等の資料は、松江市にて保管している。

12. 本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用した。

13. 本書で使用する遺跡番号は現地調査時の遺跡番号を下記のとおり再整理したものである。

崎田遺跡

調査時	報告書
崎田遺跡 D 区	崎田遺跡 C 区
SI01	SI01
SD02	-
-	P1
-	P2
-	P3
-	P4
-	SK05
SB03	SB02・03
P1	P11
P2	P12
P7	P13
P3	P6
P4	P7
P5	P8
P6	P9
P9	P10
SB04	SB04・05・06
P17	P14
P6	P15
P7	P16
P8	P17
P9	P18
P5	P19
P1	P20
P2	P21
P3	P22
P4	P23
P13	P24
P15	P25
P18	P26
SK05	SK27
SK06	SK28
SK07	SK29

種前遺跡

調査時	報告書
SI80	SI01
SI80-P1	P1
SI80-P3	P2
SI80-P4	P3
-	P4
SI80-P5	P5
SI80-D3	SD06
SI80-D1	-
-	加工段 1
-	SB02
-	SB03
SP07	P7
SP27	P8
SP21	P9
SP08	P10
SP05	P11
SP09	P12
SX03	SX13
SX04	SX14
-	加工段 2
-	SB04
SK12	SK15
SP19	P16
SP35	P17
SP15	P18
SD14	SD19
SD17	SD20
SX20	SD21
SD18	SD22

調査時	報告書
SK56	SK23
SX02	SX24
-	加工段 3
-	SB05
-	SB06
-	SB07
-	SB08
-	SB09
SP26	P25
SP25	P26
SK31	SK27
SK27	P28
SK33	SK29
SK34	P30
SP41	P31
SX39	SK32
SP109	P33
SK40	P34
SP44	P35
SP49	P36
-	加工段 4
SD54	SD37
SK63	SK38
SD60	SD39
SD61	SD40
SK01	SK10
NR108	NR11
-	SA12

凡 例

1. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴建物跡 SD：溝 P：ピット SK：土坑 NR：自然流路
SX：性格不明遺構
2. 本書で示す方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値に基づく。
3. 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）値を使用した。
4. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に従って記載した。
5. 本書で用いた土器の編年と器種名については以下の論文・報告書に依拠している。

[土師器]

鹿島町教育委員会 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』

松山智弘 2015 「山陰」『前期古墳編年を再考するⅡ—古墳出土土器をめぐって—』中国四国前方後円墳研究会 第18回研究集会実行委員会（香川大会）

[須恵器]

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡－9 総括編－』

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

[陶磁器]

日本中世土器研究会 2022 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』

日本貿易陶磁研究会 1985 『貿易陶磁研究』

山陰中世土器検討会 2013 『山陰地方における東播系須恵器』

6. 註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。引用・参考文献は文末に記載した。
7. 本書に掲載した遺構平面図および土層断面図は各図に縮尺とスケールを配置した。遺物実測図の縮尺は1/3を原則としたが、これに従えないものにはその都度縮尺を配置した。須恵器と磁器の断面は黒塗りで、そのほかの断面は白ヌキで示している。
8. 本書に掲載した弥生土器・土師器・須恵器については、出雲地域における土器編年および畿内との併行関係を捉えるために、次頁の各編年で設けられている時期区分を年代の指標とした。

時代		松本編年	草田編年	松山編年 (土師器) 松山 2021	大谷編年 (須恵器) 大谷 1994、大谷 1997、 大谷 2001、大谷 2003 ※出雲 1期の細分は松山 2021 を参照	出雲国府編年	畿内編年
弥生時代	前期	I-1 様式					
		I-2 様式					
		I-3 様式					
		I-4 様式					
	中期	II-1 様式					
		III-1 様式					
		III-2 様式					
		IV-1 様式					
	後期	IV-2 様式					
		V-1 様式	草田 1期				
		V-2 様式	草田 2期				
		V-3 様式	草田 3期				
古墳時代	前期	草田 4期	草田 5期				
		草田 6期	I 期	小谷 1式			
		草田 7期		小谷 2式			
				小谷 3式			
	中期		II 期	小谷 4式			
				大東 1			
				大東 2			
			III 期	大東 3	出雲 1期	古相	
	後期					中相	
						新相	
			IV 期	大東 4		出雲 2期	
				大東 5		出雲 3期	
古代	古代						
						出雲 4期	
						出雲 5期	
						出雲 6a～c 期	
						出雲 6d 期	国府第 1型式
							国府第 2型式
							国府第 3型式
							国府第 4型式
							国府第 5型式
							国府第 6型式
							国府第 7型式
							国府第 8型式
							TK209・飛鳥 I 古
							飛鳥 I 新
							飛鳥 II
							飛鳥 III～IV

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

出雲の横穴墓 - その型式・変遷・地域性 - 山陰横穴墓研究会

大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

大谷晃二 2003 「古墳群と古墳の時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター

出雲地域における弥生土器・土師器・須恵器編年および畿内編年併行関係対照表

目 次

例 言

凡 例

第 1 章 調査に至る経緯と経過 1

第 2 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3

第 3 章 崎田遺跡

第 1 節 調査の経過と概要	6
第 2 節 壇穴建物跡	8
第 3 節 掘立柱建物跡	11
第 4 節 古墓	18
第 5 節 小結	21
遺物観察表	22

第 4 章 種前遺跡

第 1 節 調査の経過と概要	24
第 2 節 壇穴建物跡	28
第 1 項 S101	28
第 3 節 加工段	29
第 1 項 加工段 1	30
第 2 項 加工段 2	31
第 3 項 加工段 3	33
第 4 項 加工段 4	35
第 4 節 土坑	37
第 5 節 自然流路 NR11	38
第 1 項 杭列	38
第 2 項 NR11	39
第 6 節 遺構外出土遺物	40
第 7 節 小結	49
遺物観察表	51

第 5 章 総括

第 1 節 遺構と遺物の様相	56
第 2 節 生業に関する遺物について	58
第 3 節 結語	59

写 真 図 版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	調査位置図	1
第 2 図	崎田遺跡・種前遺跡位置図	2
第 3 図	崎田・種前遺跡周辺の遺跡分布図	5
第 4 図	事業予定地と調査区位置図（崎田遺跡）	6
第 5 図	崎田遺跡 遺構配置図	7
第 6 図	崎田遺跡 SI01 平面・断面図	9
第 7 図	崎田遺跡 SI01 出土遺物実測図	10
第 8 図	崎田遺跡 SB02～03 平面・断面図	12
第 9 図	崎田遺跡 SB03 出土遺物実測図	13
第 10 図	崎田遺跡 SB04～06 平面・断面図	14
第 11 図	崎田遺跡 SB04 出土遺物実測図	16
第 12 図	崎田遺跡 SB05 出土遺物実測図	16
第 13 図	崎田遺跡 C 区遺構外出土遺物実測図	17
第 14 図	崎田遺跡 A 区遺構・五輪塔出土状況図	18
第 15 図	崎田遺跡 A 区遺構外・試掘 T-2 出土遺物 実測図	19
第 16 図	崎田遺跡 A 区出土五輪塔実測図	20
第 17 図	事業予定地と調査区位置図（種前遺跡）	24
第 18 図	種前遺跡 調査グリッド図	25
第 19 図	種前遺跡 遺構配置図	26
第 20 図	種前遺跡 A-A' 土層断面図	27
第 21 図	種前遺跡 SI01 平面・断面図	28
第 22 図	種前遺跡 SI01 出土遺物実測図	29
第 23 図	種前遺跡加工段 1 平面図	30
第 24 図	種前遺跡 SB02・SB03 土層断面図	30
第 25 図	種前遺跡加工段 2 平面図	32
第 26 図	種前遺跡 SB04 土層断面図	32
第 27 図	種前遺跡遺構内出土遺物実測図	33
第 28 図	種前遺跡加工段 3 平面図	34
第 29 図	種前遺跡 SB05～09 土層断面図	34
第 30 図	種前遺跡遺構内出土遺物実測図	35
第 31 図	種前遺跡加工段 4 平面図	36
第 32 図	種前遺跡遺構内出土遺物実測図	36
第 33 図	種前遺跡 SK10 土層断面図	37
第 34 図	種前遺跡 SK10 出土遺物実測図	37
第 35 図	種前遺跡 NR11 平面・断面図	38
第 36 図	種前遺跡 NR11 出土遺物実測図	39
第 37 図	種前遺跡遺構外出土遺物（弥生土器）実測図	42
第 38 図	種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図 1	42
第 39 図	種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図 2	43
第 40 図	種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図 3	44
第 41 図	種前遺跡遺構外出土遺物（焼土塊）実測図	44
第 42 図	種前遺跡遺構外出土遺物（土製品）実測図	45
第 43 図	種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）実測図 1	46
第 44 図	種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）実測図 2	47
第 45 図	種前遺跡遺構外出土遺物（陶磁器）実測図	47
第 46 図	種前遺跡遺構外出土遺物（石製品）実測図	48
第 47 図	遺構変遷図	56
第 48 図	土錘の長さ・幅分布図	59

図版目次

本文中写真

写真 1 現地説明会 2

写真図版

図版 1 調査地遠景（手前：種前遺跡、奥：崎田遺跡）
(南西から)

崎田遺跡 A 区調査前近景（北西から）

図版 2 崎田遺跡 B 区調査前近景（北西から）

種前遺跡調査前近景（北東から）

図版 3 崎田遺跡 B 区完掘状況（北西から）

崎田遺跡 B 区 SI01 完掘状況（南東から）

図版 4 崎田遺跡 B 区 SI01 a-a' 土層断面（北から）

崎田遺跡 B 区 SI01 P3 土層断面（南東から）

崎田遺跡 B 区 SI01 遺物出土状況（東から）

崎田遺跡 B 区 SI01 遺物出土状況（東から）

崎田遺跡 B 区 SI01 f-f' 土層断面（南西から）

図版 5 崎田遺跡 C 区完掘状況（南東から）

崎田遺跡 C 区 SB02、SB03 完掘状況（南西から）

図版 6 崎田遺跡 C 区 SB04、SB05、SB06 完掘状況
(北から)

崎田遺跡 C 区 SB02、SB03 a-a' 土層断面（西から）

崎田遺跡 C 区 SB05 遺物出土状況（南西から）

崎田遺跡 C 区 遺物出土状況（西から）

図版 7 崎田遺跡 A 区五輪塔石材散布状況（南東から）

崎田遺跡 A 区完掘状況（東から）

図版 8 崎田遺跡 A 区 SK29 完掘状況（東から）

崎田遺跡 A 区 SK27、SK28 完掘状況（東から）

図版 9 ~ 11 崎田遺跡出土遺物

図版 12 種前遺跡完掘後全景（南西から）

図版 13 種前遺跡完掘状況（北東から）

種前遺跡 A-A' 土層断面（北西から）

図版 14 種前遺跡 A-A' 土層断面東側（北西から）

種前遺跡 SI01 完掘状況（南から）

図版 15 種前遺跡 SI01 a-a' 土層断面（南東から）

種前遺跡 SI01 西側柱穴土層断面（南東から）

種前遺跡 SI01 壁際溝西端土層断面（南東から）

種前遺跡 SI01 遺物出土状況（南から）

種前遺跡 SI01 遺物出土状況（北から）

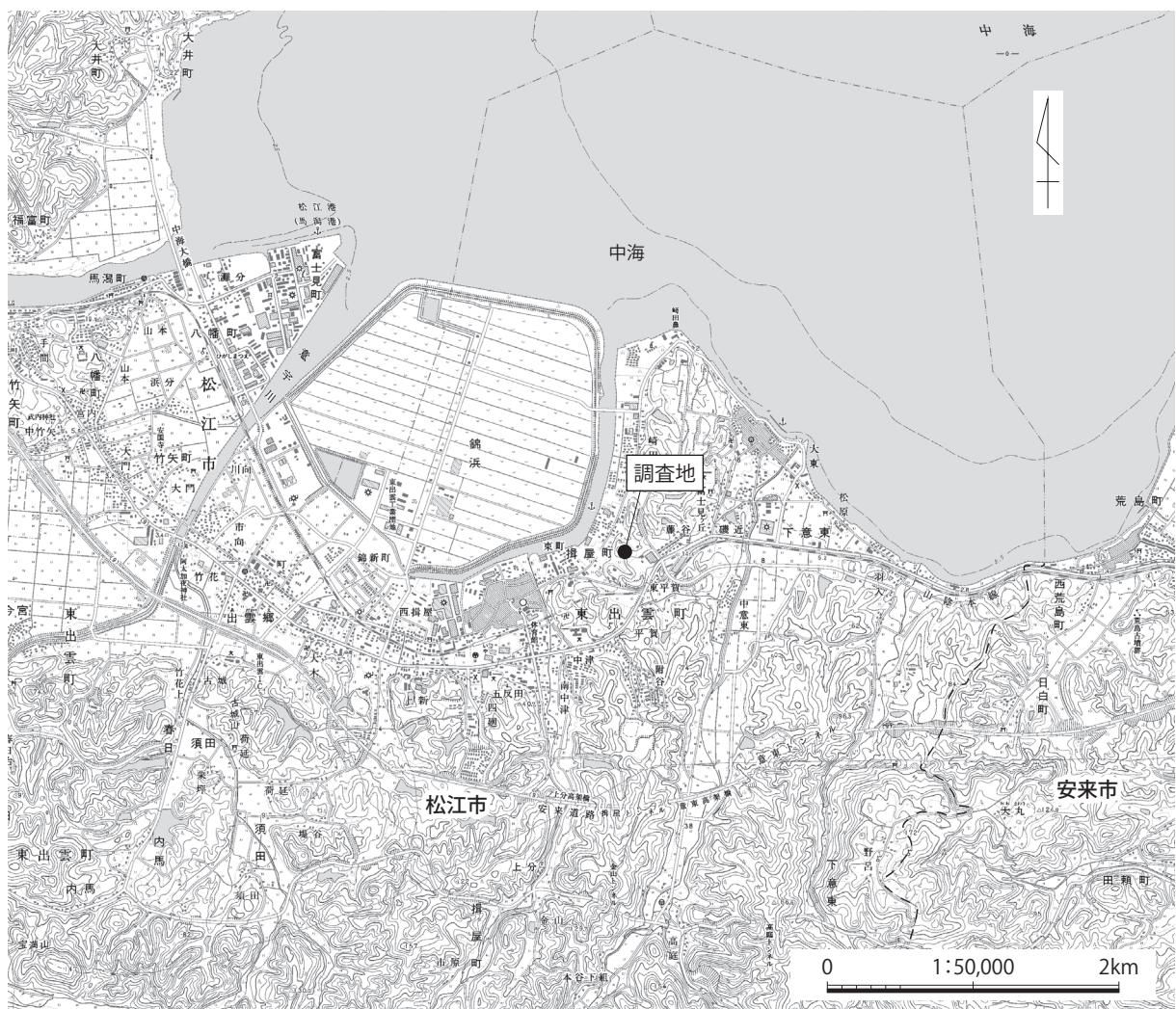
図版 16 種前遺跡加工段 1 (SB02 他) 完掘状況（北西から）

図版 17	種前遺跡 SX13 検出状況（西から） 種前遺跡 SX14 検出状況（西から） 種前遺跡 P9 土層断面（北西から） 種前遺跡 SK15 検出状況（北西から） 種前遺跡加工段 2 (SB04 他) 完掘状況（北西から） 種前遺跡 左から SD19、SD20、SD22 土層断面（北西から） 種前遺跡 P16 土層断面（北西から） 種前遺跡 SD22 完掘状況（南西から） 種前遺跡 SD22 遺物出土状況（南西から）
図版 18	種前遺跡加工段 3 (SB05 他) 完掘状況（北西から） 種前遺跡 SK29 土層断面（北西から） 種前遺跡 SK32、P28 完掘状況（北から） 種前遺跡 SK27 完掘状況（北から） 種前遺跡 P28 柱材出土状況（北から）
図版 19	種前遺跡加工段 4 完掘状況①（西から） 種前遺跡加工段 4 完掘状況②（北西から）
図版 20	種前遺跡中央部完掘状況①（北西から） 種前遺跡中央部完掘状況②（西から）
図版 21	種前遺跡 SK10 一部完掘状況（北から）
図版 22	種前遺跡 SK10 周辺 a-a' 土層断面（南西から） 種前遺跡 NR11 完掘状況（北西から）
図版 23	種前遺跡 NR11 a-a' 土層断面（西から） 種前遺跡 NR11 古銭出土状況（西から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南西から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南東から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から）
図版 24	種前遺跡遺構外遺物出土状況（北から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北西から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南東から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（南西から） 種前遺跡遺構外遺物出土状況（北西から）
図版 25～30	種前遺跡出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

「揖屋馬渕線整備事業」は、災害時の避難ルート、及び常態的に混雑する国道9号線の代替機能を持つ道路として整備することにより、東出雲町内幹線道路の歩行者・自転車の安全確保や中海・宍道湖・大山圏域内の移動時間短縮による経済効果の波及を目的とする、総延長2,780mの道路整備として、松江市（道路課）により計画された。

これを受けて、令和2年3月に事業用地内の埋蔵文化財について当課に事前依頼があったことから、用地内の踏査を行った結果、周知の「崎田遺跡」と、遺跡の有無を確かめるための要試掘箇所を3カ所確認した。なお、崎田遺跡についても散布地として確認されているのみで、遺跡の内容・範囲も不明瞭であったことから、4カ所の確認調査が必要であった。このため、令和2年6月～11月にかけて断続的に試掘・確認調査を実施した。結果、尾根上にある崎田遺跡は、近代以降の改変を受けているものの、五輪塔の散布箇所と試掘調査により竪穴建物跡が検出された箇所の2区画において遺跡の存在が確認された。また、同丘陵南西裾にある緩斜面部にも、試掘調査の結果、遺物包含層が確認された。



第1図 調査地位置図 (S=1:50,000)

認されたことから、令和2年12月に遺跡の発見通知を提出し、新たに「種前遺跡」として周知することとなった。

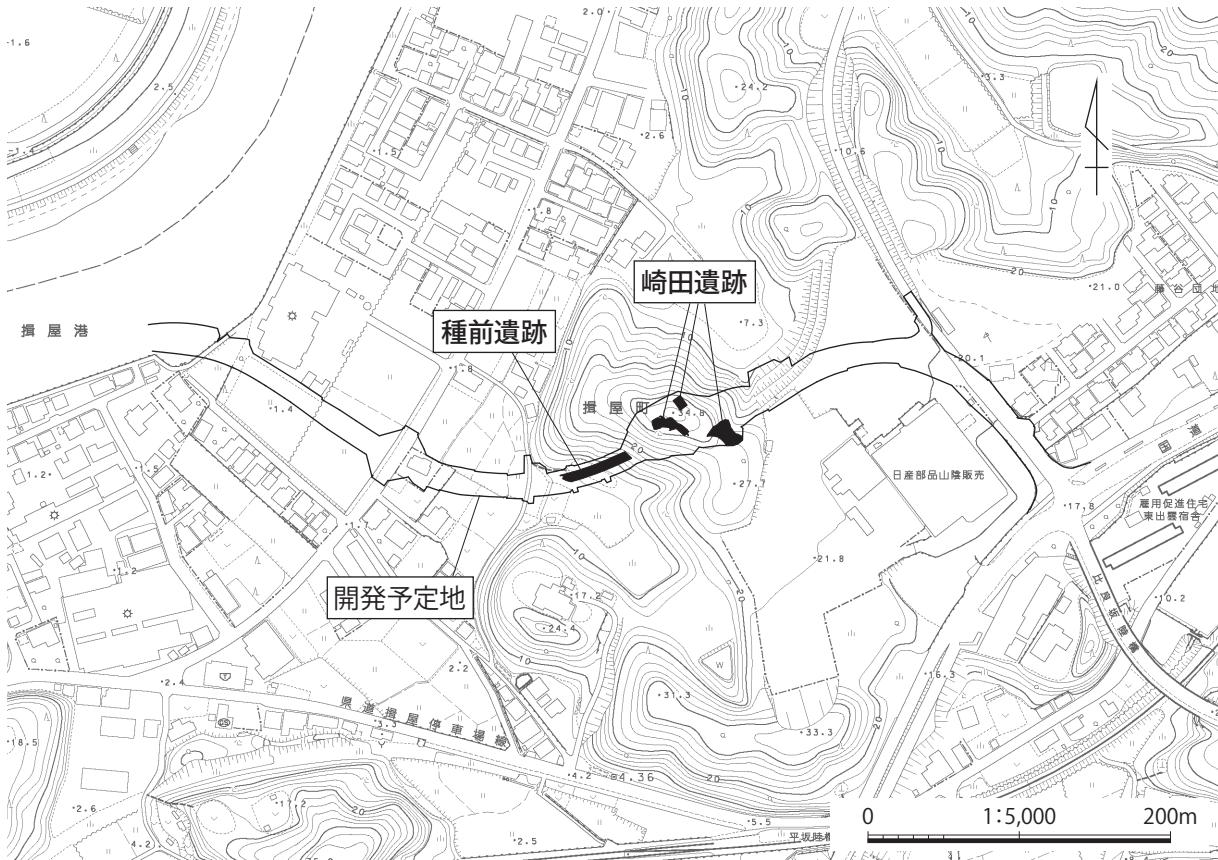
以上の結果を受けて、事業部局と協議した結果、令和3年7月に遺跡の発掘通知が提出され、事業予定範囲にある両遺跡の発掘調査を同年8月から実施するに至ったものである。

なお、当初は急斜面であり調査対象外とした崎田遺跡の範囲に遺構・遺物が確認されたことから、急遽、調査範囲を追加している。調査区の設定にあたってはT-8～10を設定し、遺跡の広がりを確認した。

両遺跡において貴重な調査成果が得られたことから、令和3年11月27日には、住民を対象とした現地説明会を行っており、80名を超える参加があった。また、令和4年3月26日には東出雲公民館主催の歴史講座において、「崎田遺跡・種前遺跡発掘調査から見えてきたこと」と題して講演会を開催し、同時に出土遺物の展示・説明会を実施した。その後、記者公開も行っている。



写真1 現地説明会



第2図 崎田遺跡・種前遺跡位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

崎田遺跡・種前遺跡は島根県の東部、松江市東出雲町揖屋に所在する。中海の南西沿岸部にあたり、周辺の海浜部では古くから漁業や水産加工品の生産が盛んである。

この中海南西沿岸部一帯は、標高 50m 前後の南北丘陵が中海の汀線と直交する格好で連続して並ぶ地形となっており、丘陵と丘陵の間の谷部では余すことなく水田が営まれている。遺跡の多くはこの丘陵上に位置しており、本遺跡も丘陵上及びその裾部に位置する。遺跡の所在する丘陵の北端は中海に突き出しており、先端部は「崎田鼻」と呼ばれている。更に中海に向けて埋没丘陵となり、丘陵延長線上からは「一つ石」と呼ばれる岩が水面から顔を出し、ここが祭祀の対象として祀られている。

なお、干拓事業により陸地化されてしまっているが、従来は種前遺跡から中海の海岸までは 200m ほどの距離しかなく、海辺の近くに展開した遺跡であったようである。

以下では東出雲町地内の遺跡を中心に紹介し、当地周辺の歴史を概観する。

第2節 歴史的環境 (第3図)

〈旧石器時代〉

町内において旧石器時代の遺跡は見つかっていないが、周辺では大庭町の下黒田遺跡（55）、東津田町の南外 5 号墳（64）の丘陵下から旧石器が出土している。他の宍道湖沿岸部でもこの時期の資料が相次いで発見されており、今後の調査に期待するところである。

〈縄文時代〉

古くから縄文時代の遺跡として知られる竹ノ花上遺跡（29）では、前期の土器片などが出土しているが、実体の多くは不明である。また、意宇平野東南端に位置する春日遺跡（30）では後期の土器片が出土しているが 2 次的な堆積土中の出土である。こうした中で、鶴貫遺跡（24）の調査では、後・晩期の土器片と共に、当時の中海の海岸線を推定させる海性の堆積層が確認されており注目される。また、渋山池遺跡（16）からは縄文時代と考えられる 20 基以上の落し穴を検出しているが、縄文時代の遺物と考えられるものは石鏃数点のみで、土器は皆無である。いずれにせよ明確な遺構が見つかっておらず、当該期の集落自体がどこに位置するかは今後の課題である。

〈弥生時代〉

市内東端の東出雲町意東に所在する磯近遺跡（2）からは粒痕が付いた弥生土器が出土し、早くから町内を代表する弥生時代の遺跡として知られている。この他にも甕形土器、打製・磨製石斧、土錘などが出土している。土器は前期末のもので、この時期の中海海岸線を推定させる資料として評価されている。これとほぼ同時期と考えられる竪穴建物跡が寺床遺跡（18）で検出されており、ここから柱状抉り入り石斧が出土している。

中期の遺跡は丘陵上の寺床遺跡で溝などが検出されているほか、鶴貫遺跡など沖積平野でも当該期

の遺跡が存在していることが確認されている。

後期の遺跡は丘陵部に立地する渋山池遺跡、原ノ前遺跡（15）で竪穴住居などが検出されている。この他、注目される遺跡としては後期末の四隅突出形墳丘墓の可能性が指摘される大木権現山1号墳（22）や、後期初頭の洪水砂で埋没した夫敷遺跡（38）の水田跡などが挙げられる。

〈古墳時代〉

古墳時代に入ると当地域では数多くの古墳が造営される。前期古墳としては寺床1号墳が県内でも最古級のものとして知られている。1辺21m～33mの方墳で、第1主体は礫床に割竹形木棺を置くもので、斜縁二神二獸鏡1面、鉄剣1、勾玉1などを副葬していた。また、舶載の内行花文鏡が出土した古城山2号墳が前期古墳として知られる。

中期古墳もその前半期と考えられるものが、寺床古墳群や大木権現山古墳群中に見られるが、いずれも小規模な方墳である。これに対して中期でも後半期に築造されたと考えられるものが島田池遺跡（20）、島田遺跡（19）、渋山池古墳群（17）などで見られ、大半は円墳となっている点が注目される。

後期古墳としては、出雲東部独特の石棺式石室をもつ栗坪1号墳（26）などが知られるが、いわゆる群集墳は全て横穴墓であり、周辺部とほぼ同様な状況と言える。島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群などは前代で墓域となっていた丘陵部に大規模な横穴墓群が展開している。

一方、集落遺跡は四ツ廻II遺跡（12）、勝負遺跡（9）などで中期の玉作工房や、後期の掘立柱建物跡群などが発見されているが、前期にまで遡る集落は四ツ廻遺跡の一部にあるだけで、他は平野部の夫敷遺跡の土器溜まりが注意されるくらいである。

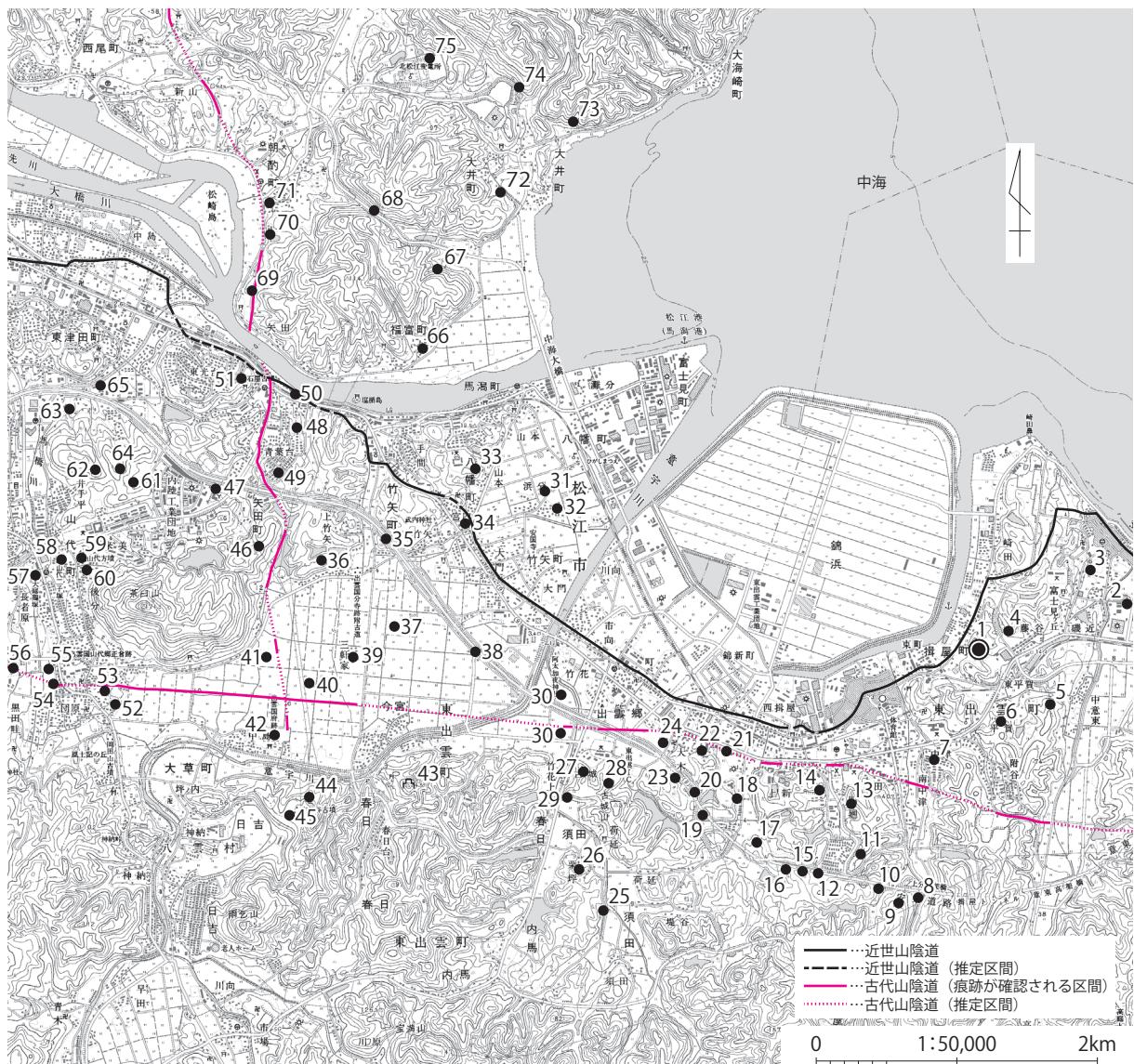
〈奈良・平安時代〉

集落遺跡としては渋山池遺跡、原ノ前遺跡、岸尾遺跡（23）、島田池遺跡、林廻り遺跡（10）などがあり、いずれも丘陵斜面に築かれた掘立柱建物が中心となっている。このほかで注目されるのは、奈良時代後半期の鍛冶工房と考えられる建物跡が島田池遺跡から見つかったほか、平安時代前半期の須恵器窯が渋山池古墳群で、さらに勝負遺跡では木棺墓から、島田池遺跡は祭祀的な建物跡からそれぞれ八稜鏡が出土している。小無田遺跡（53）、川原宮III遺跡（54）、下黒田遺跡では道路状遺構が発見されている。これらは古代山陰道¹¹の推定地に挙げられており、特に小無田遺跡は正西道、下黒田遺跡は東北道の一部とされている。東出雲の正西道推定ルートは小無田遺跡や川原宮III遺跡、出雲国府跡を通り、出雲市の杉沢遺跡と鳥取県米子市の橋本徳道西遺跡までをつなぐルートとなっている。

〈中世・近世〉

中世の山城としては、春日城跡（43）、古城山城跡（27）が知られている。1978年に発行された『東出雲町誌』には、春日城は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防を繰り広げた末、落城したと記録されている。現在でも本丸・出丸・空堀が残っている。古城山城は砦として利用されていたと考えられ、当時の井戸や郭が残されている。

近世においては今回調査を行った丘陵東側に「意東焼」の窯跡が存在するとされる。これまで本格的な調査は行われていないが、宅地造成に伴う試掘調査などで磁器を本焼する前の素焼の碗などが多数出土しており、こうした伝承に真実性をもたせている。



1 崎田・種前遺跡	16 渋山池遺跡	31 浜分遺跡	46 回田古墳群	61 奥宇田瀬遺跡
2 磯近遺跡	17 渋山池古墳群	32 浜分II遺跡	47 寺山田遺跡	62 檜岡古墳群
3 才免遺跡	18 寺床遺跡	33 屋敷山遺跡	48 井ノ奥古墳群	63 檜岡II遺跡
4 藤谷古墳	19 島田遺跡	34 的場遺跡	49 井ノ奥4号墳	64 南外5号墳
5 平賀古墳群	20 島田池遺跡	35 中竹矢古墳群	50 灘遺跡	65 石台遺跡
6 平賀遺跡	21 島田II遺跡	36 上竹矢古墳群	51 石屋古墳	66 福富松ノ前遺跡
7 高井横穴群	22 大木権現山古墳群	37 布田遺跡	52 団原古墳	67 蛇貫谷遺跡
8 堂床古墳	23 岸尾遺跡	38 夫敷遺跡	53 小無田遺跡	68 岩汐峠遺跡
9 勝負遺跡	24 鶴貫遺跡	39 三軒屋遺跡	54 川原宮III遺跡	69 魚見塚遺跡
10 林廻り遺跡	25 粟坪遺跡	40 神田玉作跡	55 下黒田遺跡	70 キコロジ遺跡
11 大鳥才ノ神遺跡	26 粟坪古墳群	41 樋口玉作跡	56 外屋敷遺跡	71 朝酌岩屋古墳
12 四ツ廻II遺跡	27 古城山城跡	42 出雲國府跡	57 大庭鶴塚	72 山巻古墳
13 四ツ廻III遺跡	28 古城山古墳群	43 春日城跡	58 山代二子塚	73 山津遺跡
14 屋台垣横穴	29 竹ノ花上遺跡	44 古天神古墳	59 山代方墳	74 池ノ奥窯跡群
15 原ノ前遺跡	30 春日遺跡	45 東百塚山古墳	60 山代原古墳	75 別所遺跡

第3図 崎田・種前遺跡周辺の遺跡分布図

【註】

[1] 古代山陰道の推定ルートについては島根県古代文化研究センターによる『出雲国風土記—地図・写本編—』(2022)を参考に記載し、第3図に反映させた。

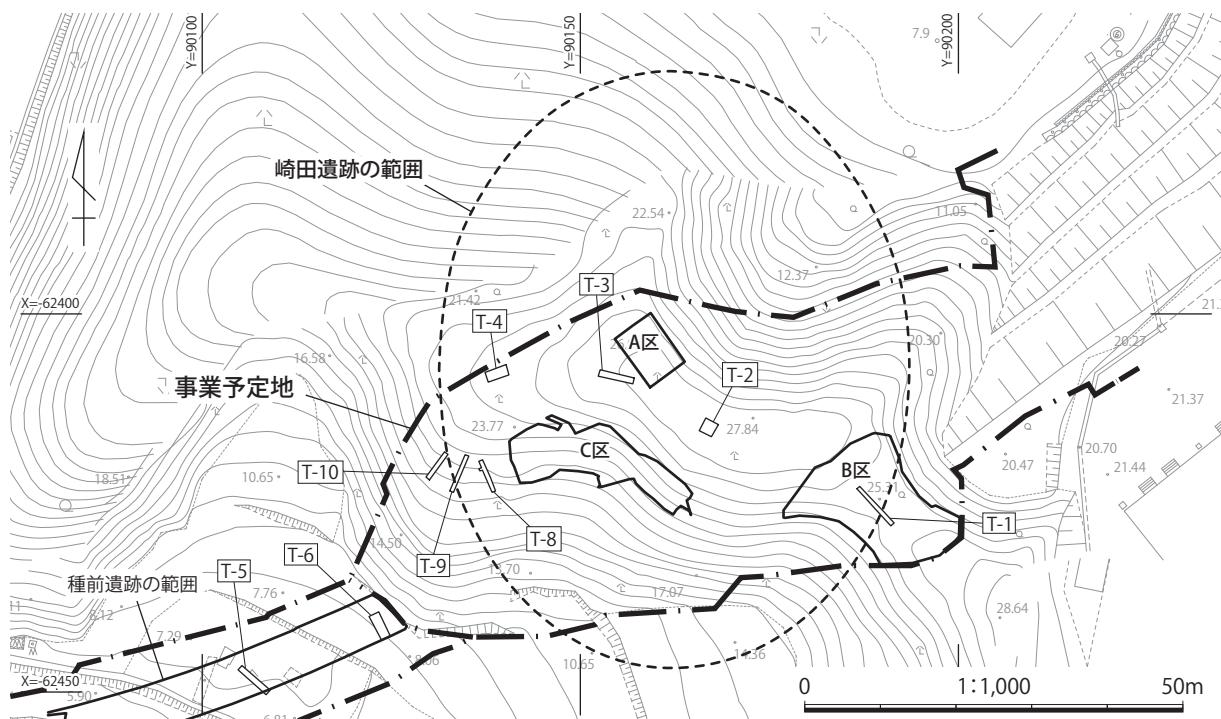
第3章 崎田遺跡

第1節 調査の経過と概要

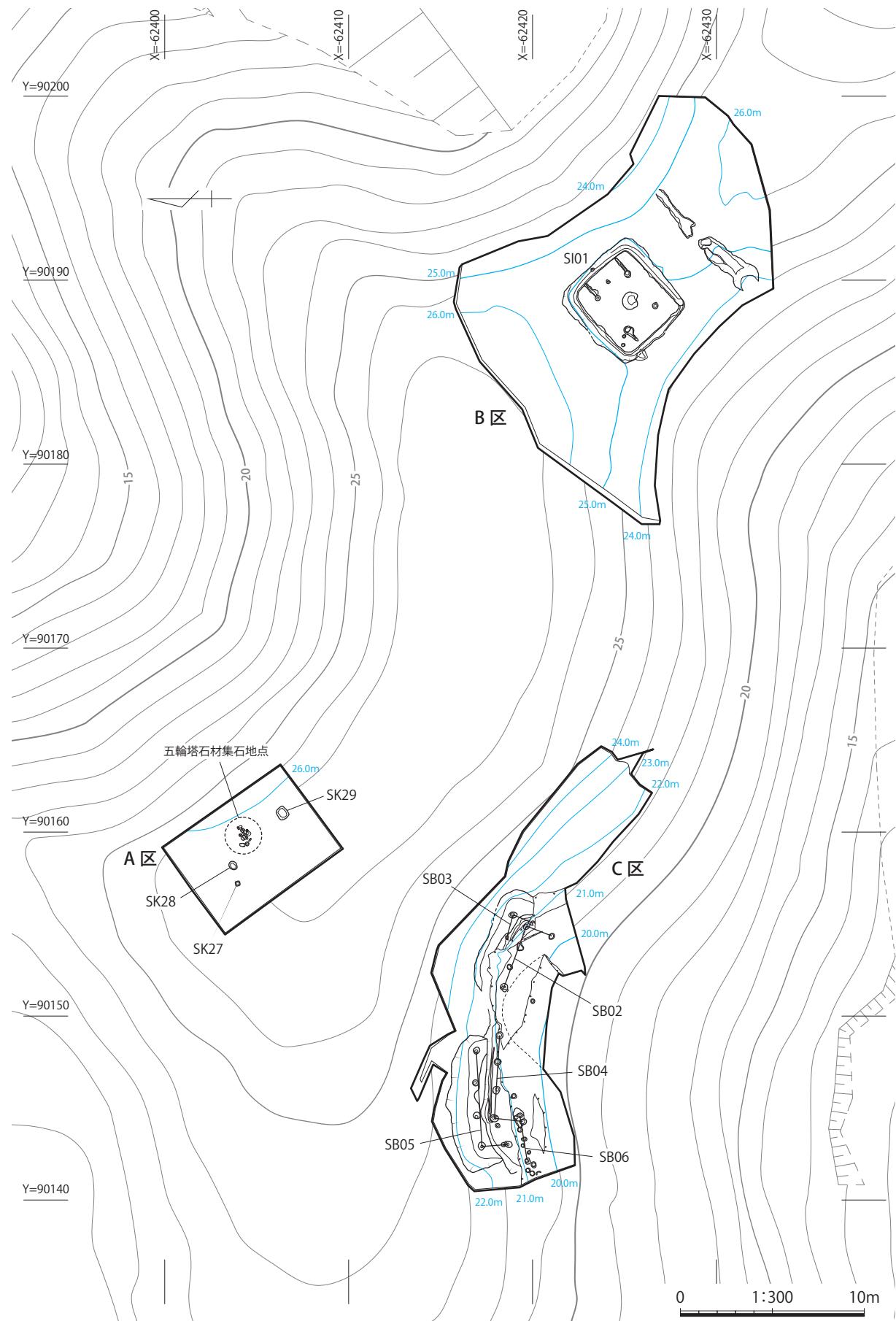
崎田遺跡は中海に向けて延びる南北丘陵の標高 20～27 m 地点に位置している。発見の経緯は定かではないが、昭和 53 年に刊行された『東出雲町誌』には、土師器や須恵器片が採取された散布地として記載されている。このため、まずは遺跡の内容と範囲を確認するための試掘調査から始めた。丘陵上の平坦面や緩斜面にトレント 4 本を設定し、令和 2 年 6 月 29 日～7 月 3 日の 5 日間をかけ手掘りにより実施した。その結果、遺跡は開発予定地全体に広がるものではないことが確認できたため、丘陵頂部に集積された五輪塔周辺を便宜的に A 区、尾根筋で検出した竪穴建物跡周辺を B 区として本調査を実施することとした。調査面積は A 区が 45.71m²、B 区が 210.78m² である。

令和 3 年 8 月から開始した本調査は、A・B 区を同時進行で調査を進めた。調査中に排出された土砂を処理するため重機を手配したところ、そのパイロット道から遺物や遺構が不時発見される事態となった。発見されたのは急斜面のため試掘調査の対象から外した場所であった。このため、トレント 3 本を設定して範囲を限定した後、C 区として調査区を設定し、A 区、B 区の調査と並行して 138.67m² の範囲を調査した。C 区からは加工段を伴う掘立柱建物跡のほか多数の遺物が出土している。

以下では、B 区で検出した竪穴建物跡を「第 2 節 竪穴建物跡」、C 区掘立柱建物跡を「第 3 節 掘立柱建物跡」、A 区の五輪塔集積地点の調査成果を「第 4 節 古墓」としてその概要を述べる。



第4図 事業予定地と調査区位置図（崎田遺跡）



第5図 崎田遺跡 遺構配置図

第2節 竪穴建物跡

SI01 (第6図)

調査区の標高 24.5～25.8m を測る尾根筋で検出した竪穴建物跡である。平面形は方形を呈し、規模は東西 8.8m、南北 5.4m、床面からの立ち上がりは最大で 0.64m である。床面からは主柱穴と壁際溝、小ピット、床面小溝、土坑を検出したが炉跡は検出されず、貼り床は確認できなかった。

主柱穴は 4 個 (P1～4) 検出され、その間隔は 1.6～2.0 m で、ピット上縁の径は 28～32cm、深さ 52～56cm を測る。いずれも円形を呈し、底面のレベルは高さ 24.1 m で揃っている。

床面中央から土坑 (SK05) を検出しているが、いわゆる中央ピット (特殊ピット) のように明確に掘り込まれたものではなく、浅く窪んでいる程度のものである。内部には地山が風化したようなシルト質土が浅く堆積する。平面は不正橿円形を呈し、長軸は 94cm、深さは最大で 10cm である。

壁際溝は幅 14～34cm、深さ 8.3～12.7cm の断面「U」字状を呈する溝が全周する。床面小溝は主柱穴 P2 と P3 から壁際溝に向け真っ直ぐに伸びており、壁際溝に繋がっている。床板を載せる転ばし根太などの痕跡か、部屋の間仕切りに関連するものであると考えられる。P1 にとりつく溝は壁際溝まで伸びておらず、床面小溝とは異なる用途のものかもしれない。

建物跡の南東には尾根を分断する格好で外周溝が掘られている。中央部分は陸橋状に掘り残されており、建物へ向かう通路としての機能を考えている。南西側の溝は幅 1m、深さ 46cm、北東側の溝は幅 40cm、深さ 18cm を測る。

SI01出土遺物 (第7図)

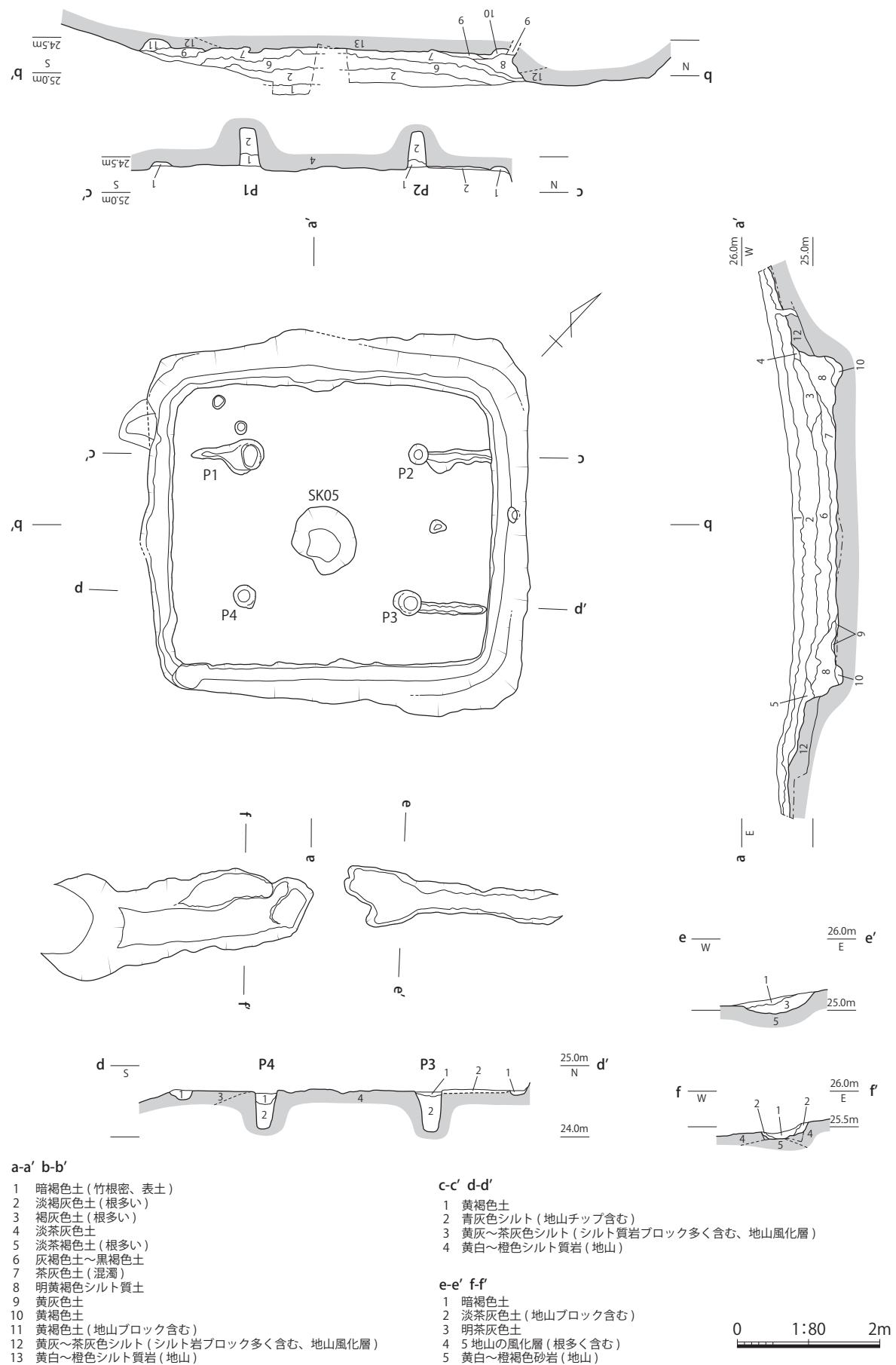
建物床面から出土した遺物として大谷編年第 2～3 期の須恵器の蓋杯 (7-1・2・7) があることから、SI01 は古墳時代後期のものであると想定される。

7-1～3 は須恵器の坏蓋である。7-1 は天井部の破片であり、内外面に回転ナデ、天井部外面に丁寧な回転ヘラケズリが施されている。また、天井部外面には一直線のヘラ記号をもつ。7-2 は口縁部の破片であり、口径 13.2cm、残存高 3.7cm を測る。7-3 は口径 14.3cm、残存高 3.0cm を測る。内外面に回転ナデが施されている。口径が大きく、口縁部に段も確認できることから大谷編年 3 期のものと判断した。

7-4～7 は須恵器の坏身である。7-4 は外面の回転ヘラケズリが受部近くまで続く。口径 11.6cm、底径 5.3cm、器高 3.6cm を測る。径は小さいが、全体的なシルエットは大谷編年 3 期のものである。7-5 は口径 11.8cm、底径 9.2cm、器高 4.4cm を測る。口縁部の立ち上がりが高く、ケズリの範囲が狭い。大谷編年 2 期のものである。内外面に回転ナデ、外面にヘラケズリが施されている。7-6 は口径 13.6cm を測る。口径は大きいものの、立ち上がりがそれほど高くない。大谷編年 3 期のものと考えられる。内外面に回転ナデが施され、外面のヘラケズリは比較的コンパクトにおさめている。7-7 は口縁部が欠損しており、口径は不明であるが受径部 13.8cm を測る。ケズリが甘く、大谷編年 3 期にあたる。

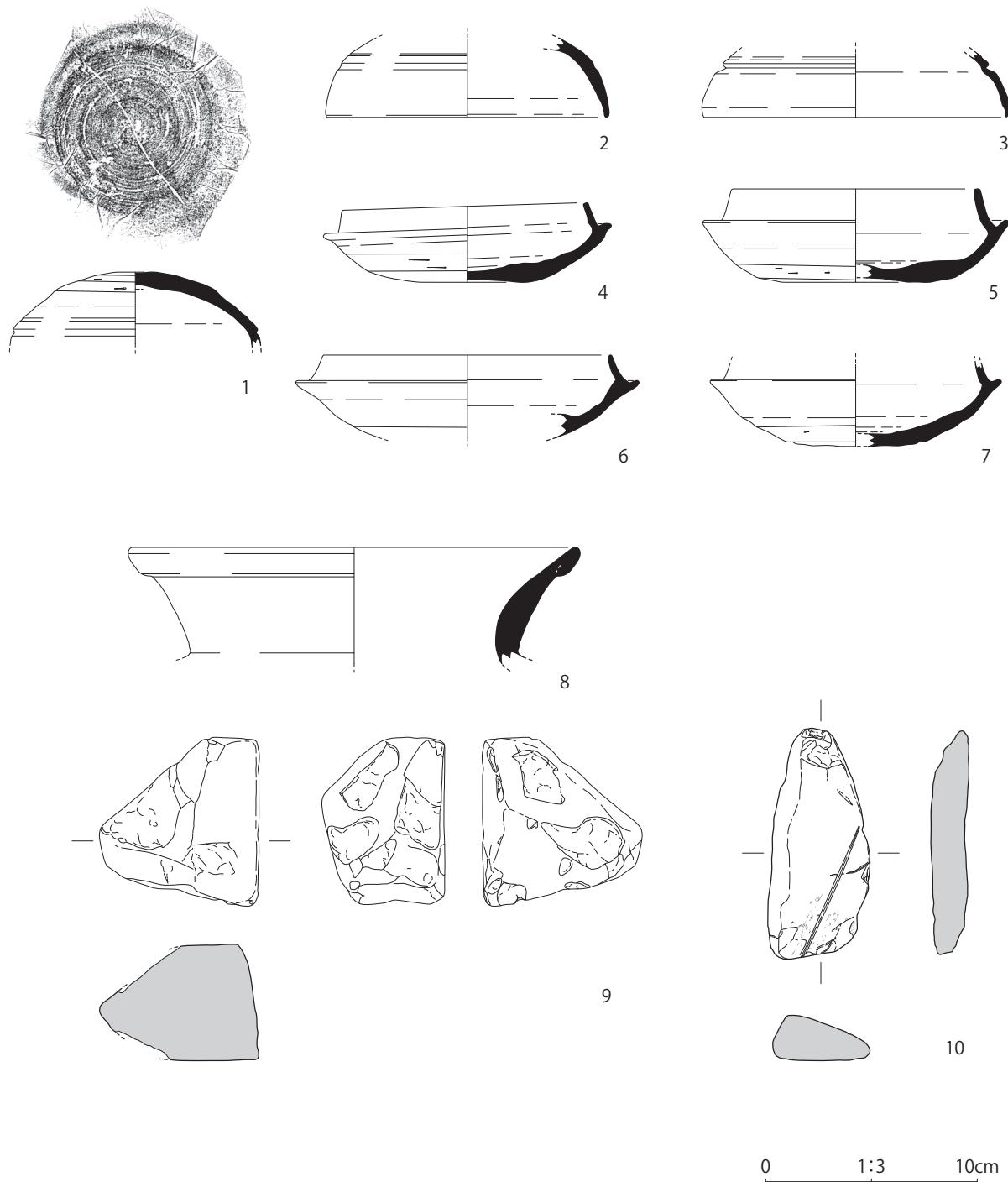
7-8 は須恵器の甕で、口径 21.0cm を測る。口縁端部は肥厚され玉縁状を呈しており、内外面には回転ナデが施されている。

7-9 は砥石である。長さ 8.0cm、幅 7.5cm、厚さ 5.7cm を測る。



第6図 崎田遺跡 SI01 平面・断面図

7-10は長さ 10.9cm、幅 4.6cm、厚さ 2.2cmを測る用途不明の石器である。片面にのみ一条の凹線が刻まれている。



第7図 崎田遺跡 S101 出土遺物実測図

第3節 掘立柱建物跡

調査区の標高 20.0～22.5m を測る南向きの斜面から 5 棟(SB02～06)の掘立柱建物跡を検出した。このうち SB02 と 03、SB04 と 05 については切り合いが認められることから建て替え前と後の建物跡と考えている。SB02～05 については斜面上方に加工段と溝をもつものであるが、斜面下方にあたる南側は消失しており、全容の分かることはなかった。

また、工事中の不時発見であったため埋土の大部分が除去されており、建て替えの先後関係が確認できなかった建物もあった。

SB02 (第8図)

南向き斜面の標高 20.5～21.0m で検出した掘立柱建物跡であり、桁行 3 間と梁行 1 間が残る。桁行の柱穴は 4 個 (P6～9) 検出され、その間隔は 1.1～1.2 m である。ピット底面の標高は 20.47～20.70 m である。P6～8 は 20.5 m 前後に収まるが、P9 は 20.70 m と若干深いものである。平面形状は円形を呈し、P9 には柱痕跡が見られる。梁行の柱穴は P9 と直交する位置で柱穴 1 個 (P10) を検出している。P10 は上縁部が消失しているため本来の規模は不明であるが、底面の標高は 20.40m を測る。

斜面上方にあたる建物北側から東側には溝が巡り、本来は背面に加工段を備えた建物跡だったと考えられる。溝の規模は幅 40～50cm、深さ 40cm、残存長約 2 m を測る。

後述する SB03 とは切り合い関係にあるが、不時発見のため覆土が取り除かれており明確な新旧関係は分からなかったが、わずかに残った堆積土から SB02 (古) -SB03 (新) と考えている。

SB03 (第8図)

SB02 の背後に位置する掘立柱建物跡であり、建物北東部分の桁行 1 間、梁行 1 間が遺存している。斜面上方にあたる北側を断面「L」字状に削って平坦面を作り出しており、検出面での標高は平坦面が 18.6 m、加工段上端が 22.4 m、比高差最大 3.8 m を測る。平面は崩れた「コ」字状を呈し、規模は上端長 5.9 m、平坦面の長さ 4.9 m である。

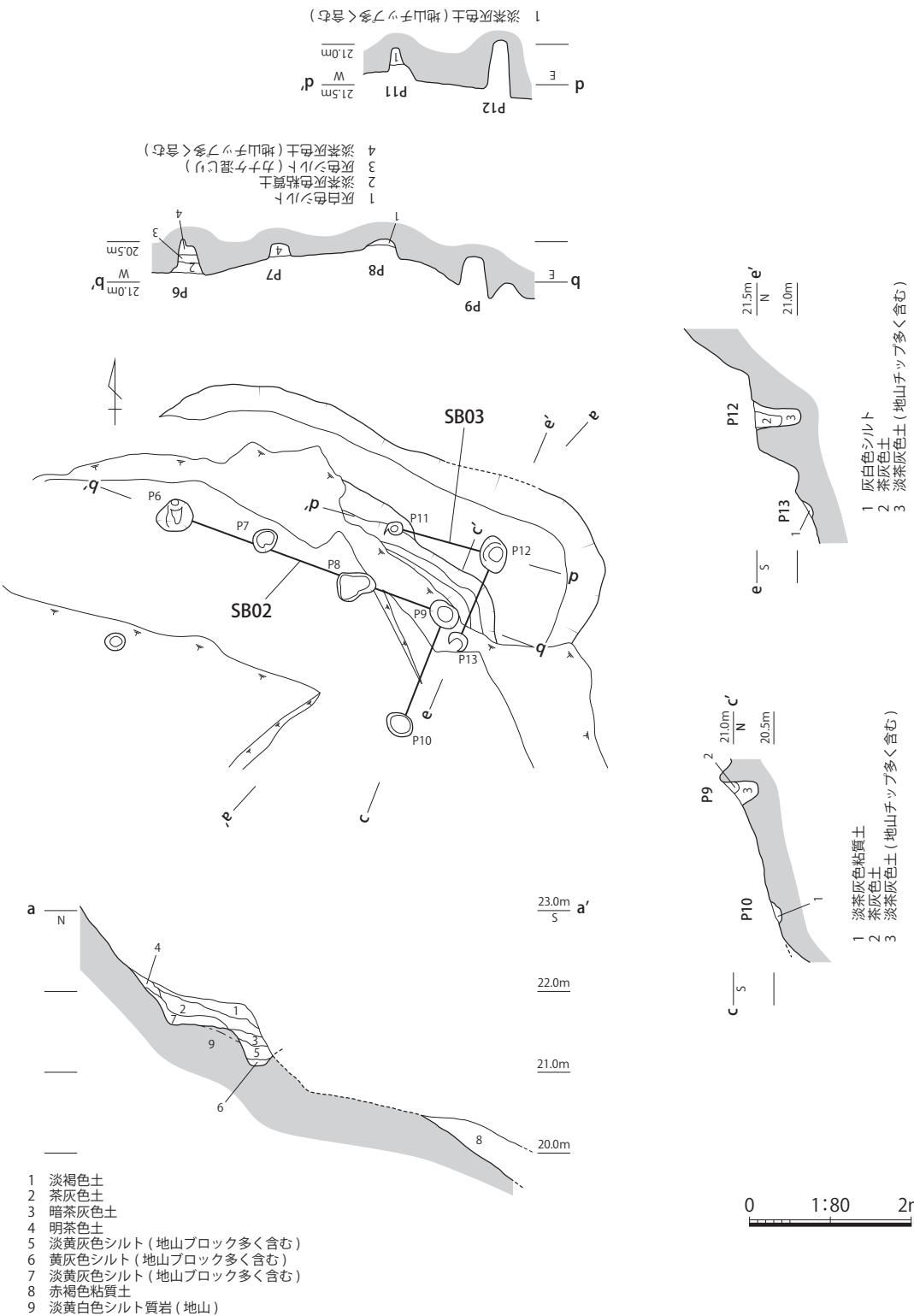
平坦面には柱穴 2 個 (P11、12) があり、桁行の柱間寸法は心々距離で 1.3 m を測る。攪乱により残りが悪く桁行 1 間しか遺っていないが、加工段平坦面の長さが 4.9 m であることを勘案すれば、SB02 と同じく桁行 3 間程度の建物が建っていたようである。ピットの規模は P11 が上縁径 20cm、深さ 32cm、底面の標高は 21.04 m である。これに対し、P12 は径 40cm、深さ 56cm、底面の標高は 20.95 m であり、柱痕跡が確認できた。桁行と直交する位置で柱穴を 1 個 (P13) 検出しており、同じ建物跡の柱穴として取り扱っている。このピットについては上縁部が消失しており、底部のみ残存しているため径や深さについては不明である。底面の標高は 20.82 m である。

遺物は地山面から土師器のほか、輪状つまみをもつ須恵器の蓋が 1 点出土している。

SB03出土遺物（第9図）

9-1は輪状つまみをもち口縁部が下垂する須恵器蓋である。口径 14.1cm、器高 2.1cm、つまみ径 4.5cmを測り、国府編年第2型式（7世紀末葉～8世紀第1四半期）に該当するものである。

9-2は土師器の甌である。口径 34.1cmを測る。内面にはヘラケズリ、ハケメ調整が施されており、



第8図 崎田遺跡 SB02～03 平面・断面図

外面にはハケメ、ナデ調整が施されている。

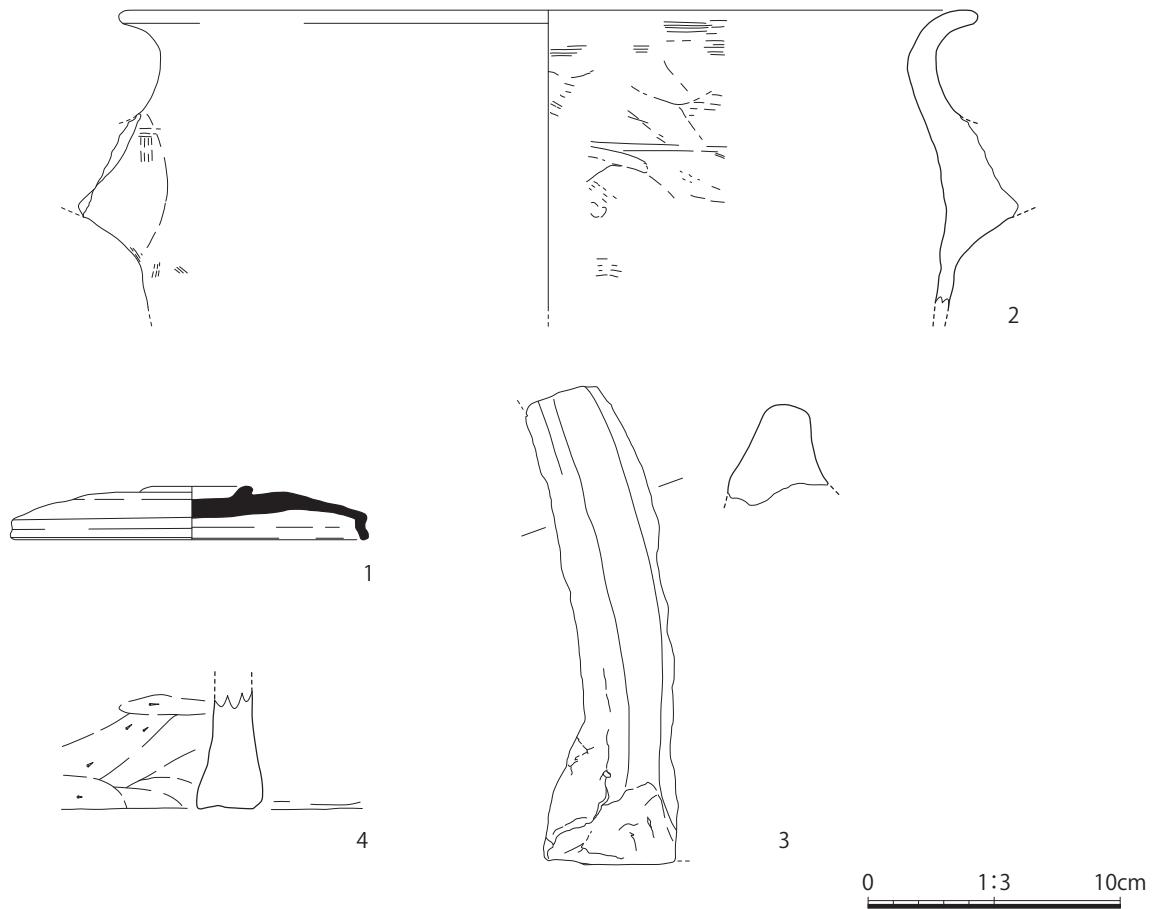
9-3 は床面壁際で出土した竈の焚口底部分の破片である。厚みは最大で 3.6cm を測る。

9-4 は P12 付近で出土した竈底部の破片で、内面にケズリが施されている。

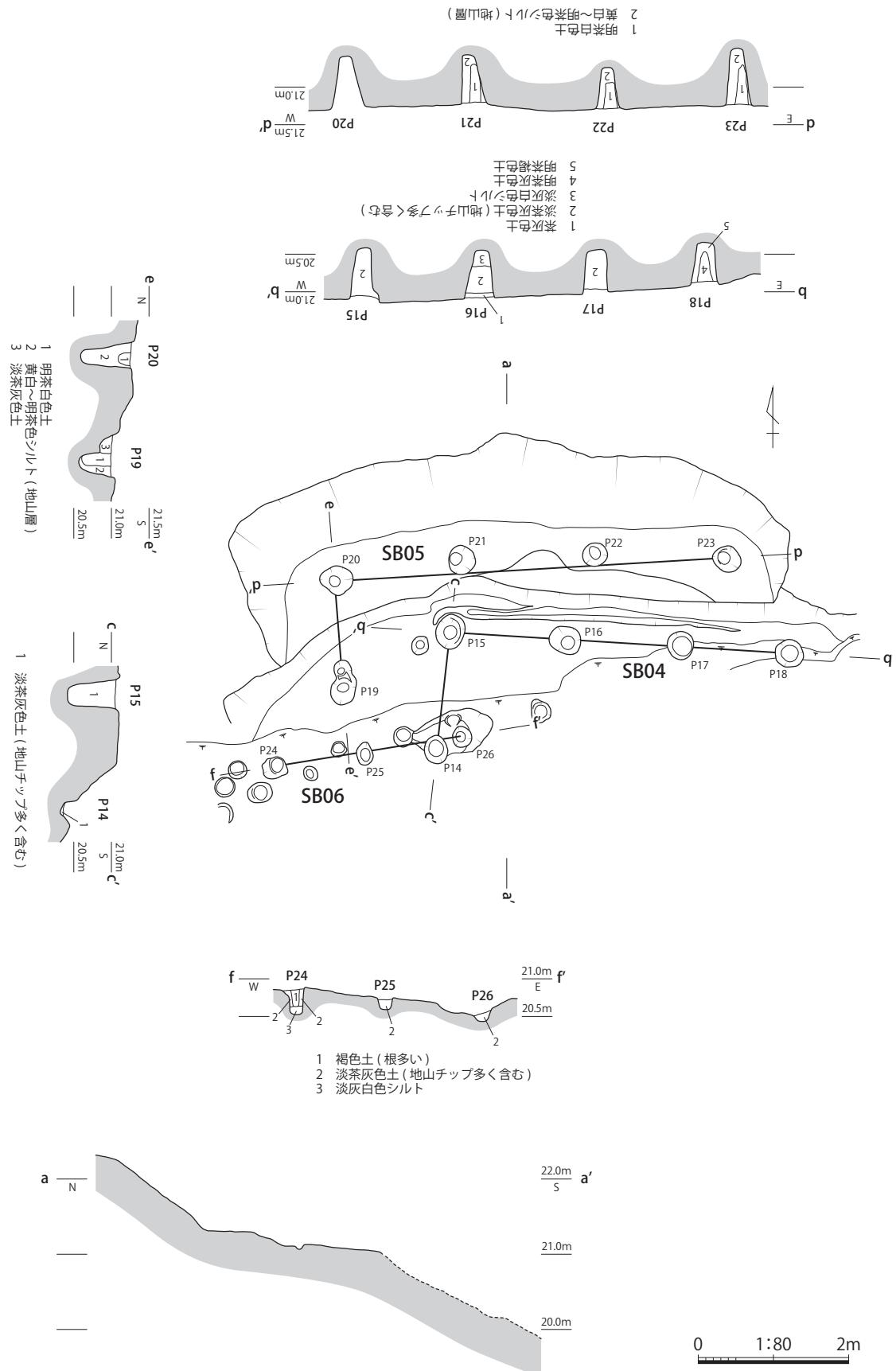
SB04 (第10図)

調査区の標高 20.25 ~ 21.25m で検出した掘立柱建物跡であり、桁行 3 間、梁行 1 間が残存している。斜面上方にあたる北側を削りだして加工段を設けており、壁面下には溝が掘り込まれている。溝は幅 17cm、深さ 6cm、加工段の残存長 8.5 m、比高差最大 31cm を測る。桁行の柱穴は 4 個 (P15 ~ 18) 検出され、その間隔は 1.5 ~ 1.6 m で、ピット上縁の径は 30 ~ 40cm、深さ 60 ~ 66cm を測る。底面の標高は 20.34 ~ 20.45 m であり、約 10cm の差が見られる。平面形状はいずれも円形を呈し、P18 には柱痕跡が確認できる。斜面下方からは、この桁行と直交する位置でピット 1 個 (P14) を検出している。平面形は円形を呈し、径 33cm、深さ 24cm を測る。後述する SB06 とは切り合い関係にあるが、不時発見のため覆土が取り除かれており明確な新旧関係は分からなかった。

遺物は床面から土師器と、SB06 と同時期のものを含む須恵器 2 点が出土している。



第9図 崎田遺跡 SB03 出土遺物実測図



第10図 崎田遺跡 SB04～06 平面・断面図

SB04出土遺物（第11図）

11-1 は国府編年第3～4型式にあたる須恵器の高台付皿である。口径は不明、底径 13.0cmを測る。内面底が磨耗し平滑化しているため、転用硯である可能性が高い。底部には静止糸切痕が残る。

SB05（第10図）

SB04 の背後に位置する掘立柱建物跡であり、桁行 3間、梁行 1間が遺存していた。斜面上方にあたる北側を断面「L」字状に削って平坦面を作り出しており、検出面での標高は平坦面が 21.3 m、加工段上端が 26.0 m、比高差最大 4.7 mを測る。平面は「コ」字状を呈し、規模は上端長 1.4 m、平坦面の長さ 5.2 mである。

桁行の柱穴は 4 個(P20～23)検出され、その間隔は 1.7～1.8 mで、ピット上縁の径は 32～44cm、深さ 56～72cmを測る。底面の標高は 20.5～20.7 mであり、20cmの差が見られる。平面形状はいずれも円形を呈し、P20～23 のすべてに柱痕跡が確認できる。斜面下方からは桁行に直交する位置でピット 1 個 (P19) を検出している。P19 は円形を呈し、上縁の径は 32cm、深さ 47cmを測り、柱痕跡が確認できた。底面の標高は 20.55 mであり、桁行の柱穴とレベルが揃う。

遺物は土師器数点を出土している。

SB05出土遺物（第12図）

12-1・2 は土師器甕である。12-1 は口径 29.2cm、残存高 6.9cmを測る。外面にはハケメ、ナデ調整が施され、内面にはケズリ、ナデ調整が施されている。12-2 は土師器の甕である。口縁は外反し、肩部は張らない。

SB06（第10図）

SB04 の南側には、これと切り合う格好で複数の柱穴が存在する。ここから一直線に並ぶ同規模の柱穴 3 個 (P24～26) を抜き出して SB06 とした。ただし、この組み合わせ以外にも一直線に並ぶ柱穴があり、違う組み合わせでも復元が可能である。SB06 は調査区の標高 20.5～21.0mで検出したものであるが、攪乱が大きく、本来の床面レベルではない。このため柱穴も底部が残存するのみのものであった。その間隔は 1.2～1.3 mで、ピット上縁の径は 20～30cmを測る。底面の標高は 20.40～20.60 mであり、約 20cmの差が見られる。平面形状は円形を呈し、P24 には柱痕跡が確認できる。

遺構外出土遺物（第13図）

13-1 は須恵器の蓋である。輪状つまみをもち、口径 15.2cm、つまみ径 4.5cmを測る。内面が平滑化しており、転用硯の可能性がある。

13-2 は国府編年第2型式にあたる須恵器の高台付坏である。口径 13.5cm、器高 4.0cmを測る。底部に回転糸切痕が残る。

13-3 は国府編年第2型式の高台付皿である。高台端部は平坦に整えられ、底部には「井」と読める墨書が確認できる。底部に回転糸切痕が残る。

13-4 は国府編年第4型式の無高台坏で、底部に静止糸切痕が残る。胴部の立ち上がりが外に開く。

13-5 は国府編年第2型式に相当する須恵器長頸壺の底部である。底部には回転糸切り後ナデが施

されている。高台を有し、体部に丸みをもつ。

13-6・7は須恵器坏である。13-6は口縁部が屈曲し外へ開き、13-7は口縁端部が肥厚する。

13-8は焼成不良の須恵器で高台付皿である。口径18.4cm、器高3.6cmを測る。底部に回転糸切痕が残り、高台端部は平坦に整えられている。国府編年第4～5型式のものである。

13-9は須恵器の口縁部である。口径は16.8cmを測り、内外面に回転ナデが施される。

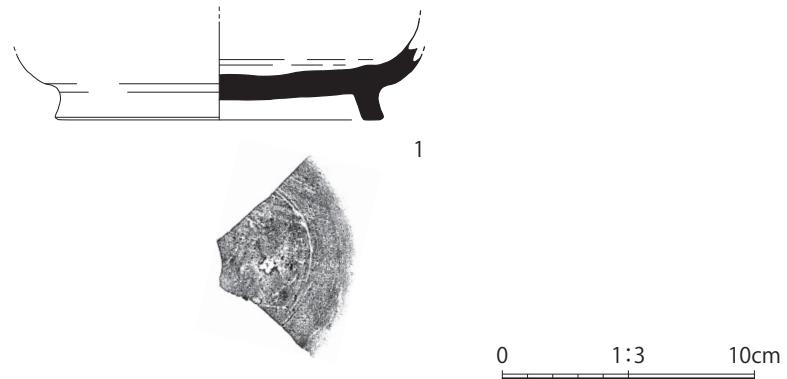
13-10は須恵器の灯明皿で、口径9.3cm、器高2.7cmを測る。底部に静止糸切痕が残り、内面には黒色の付着物が見られる。

13-11～13は土師器の甕である。13-11は口径26.6cmを測り、内外面にハケメ調整が施される。

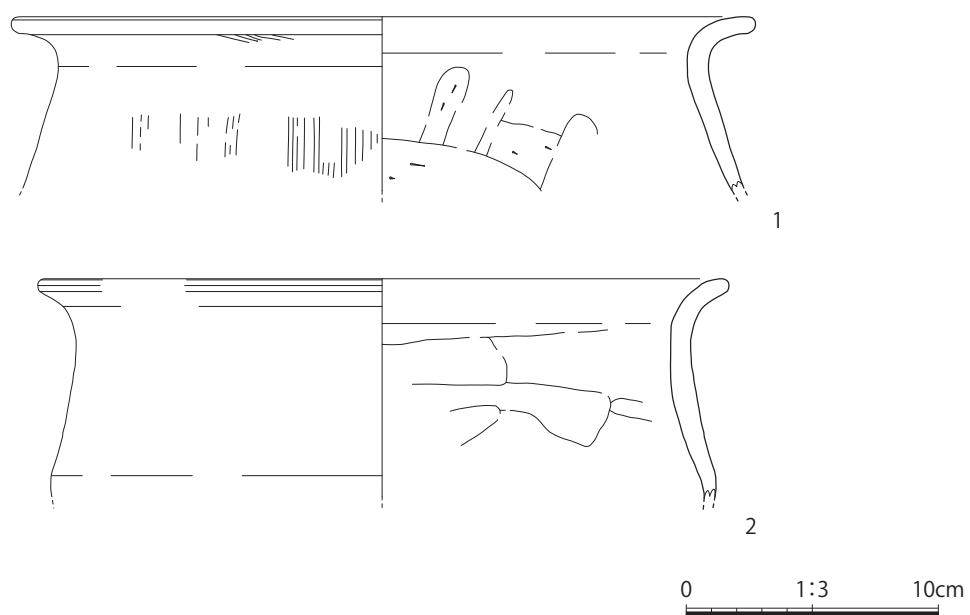
13-12・13はそれぞれ口径24.0cm、25.2cmを測り、外面にハケメ調整が施される。

13-14は甕の把手である。厚み3.3cm、長さ6.2cmを測る。

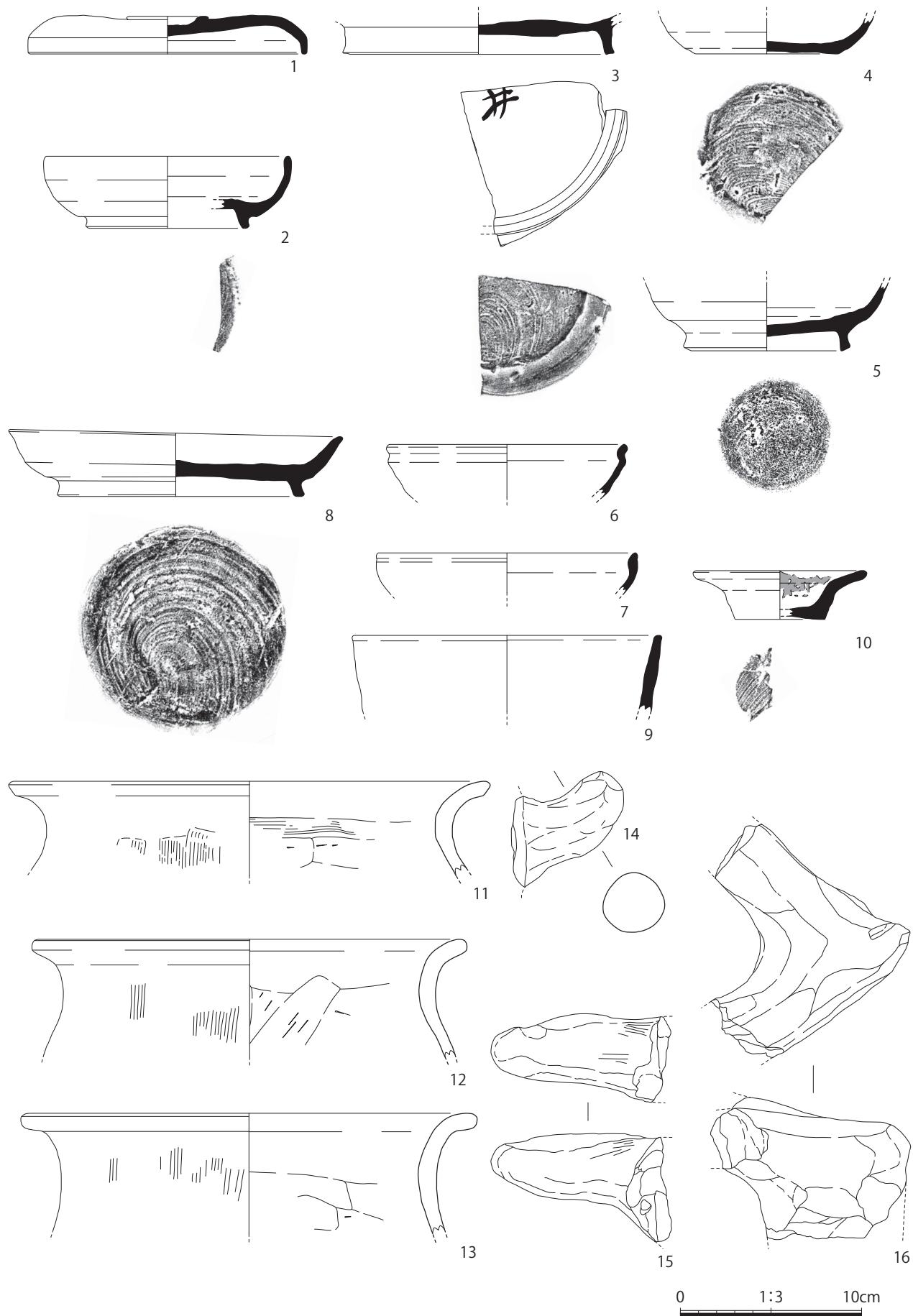
13-15・16は土製支脚である。13-15は厚み3.9cm、長さ10cmを測る。13-16は突起部分の破片であり、一部にナデとハケメが確認できる。長さ11.0cm、高さ7.8cmを測る。



第11図 崎田遺跡 SB04 出土遺物実測図



第12図 崎田遺跡 SB05 出土遺物実測図



第13図 崎田遺跡C区遺構外出土遺物実測図

第4節 古墓

調査区内の最高所である標高 26.25～26.50m を測る尾根上の平坦面（A 区）には五輪塔の部材が集積されている場所があった。試掘調査では隣接する場所に設定した T-2 トレンチの表土内から寛永通寶 1 点が出土しており、古墓との関連が注目される。

五輪塔が集積された地点を中心として 8.0 × 5.5 m の調査区を設け掘削したところ、地山に掘り込まれた土壙 3 個を検出した。埋土の水洗いは行っていないため骨片の存在は確認できていないが、柱痕跡は認められず並びに規則性はなく、周辺遺跡における類例などから古墓として報告する。土壙の規模からみて、火葬墓の可能性を考えている。

以下では各土壙について詳述し、集積された五輪塔については陶器を含め「出土遺物」で一括して取り扱う。

SK27（第14図）

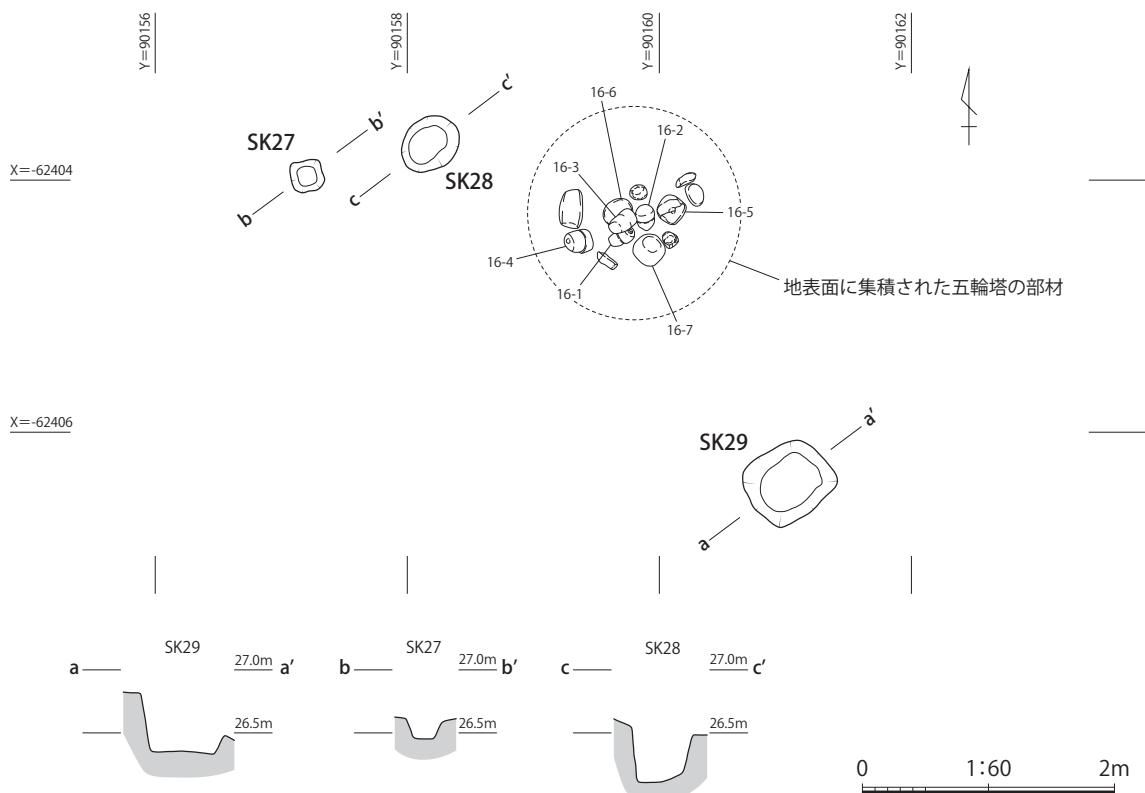
標高 26.6～26.7m を測る地点で検出した小土壙である。平面は隅丸方形を呈し、現状での規模は一辺 26cm、深さ最大 15cm を測る。

SK28（第14図）

標高 26.5～26.6m を測る地点で検出した小土壙である。平面は橢円形を呈し、現状での規模は長軸 48m、短軸 40m、深さ最大 46cm を測る。

SK29（第14図）

標高 26.5～26.8m を測る地点で検出した小土壙である。平面は形の崩れた隅丸方形を呈し、現状での規模は長辺 60m、短辺 48m、深さ最大 46cm を測る。



第14図 崎田遺跡 A 区遺構・五輪塔出土状況図

出土遺物（第15・16図）

ここでは丘陵上の平坦面に集積されていた五輪塔と陶磁器、試掘調査時に出土した銭貨を取り扱う。

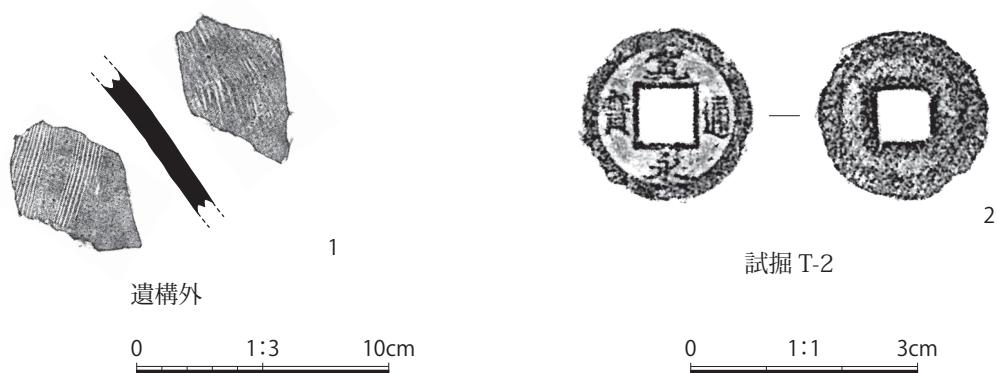
15-1は中世の須恵器の甕であり、外面にタタキ、内面にハケメ調整が施されている。五輪塔とともに集積されていたものであるが、古墓との関係性は不明である。

15-2は試掘調査時にT-2トレーナーから出土した「寛永通寶」である。ハ貝宝であり、外径2.28cmを測る。

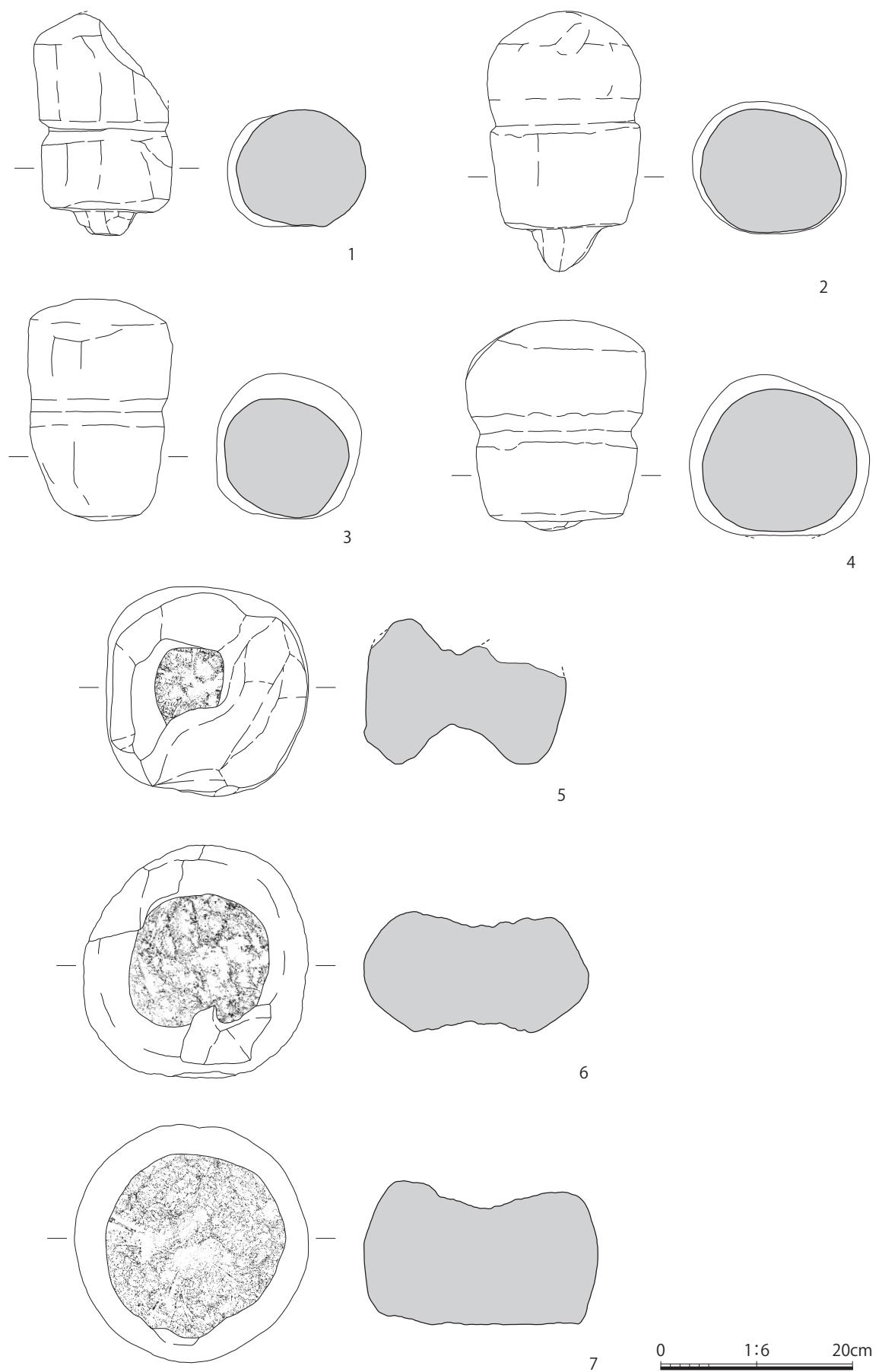
16-1～7は16世紀後半から17世紀前半頃の組合せ式五輪塔で、空風輪4点と水輪3点が出土している。いずれも小型で、梵字はみられない。

空風輪である16-1～4はいずれも一石で造られており、V字状の溝を掘ることで空輪部と風輪部の区別をついている。16-1は最大長23.1cm、空輪部径13.5cm、風輪部径13.5cm、重量3.90kgを測る。柄の断面は円形である。空輪の側面は直線的な造形で、頂部は崩れており、突起の有無は確認できない。16-2は最大長27.2cm、空輪径16.1cm、風輪径15.6cm、重量6.54kgを測る。柄は逆円錐形で、風鈴頂部に突起は見られない。今回出土した中では比較的丁寧な調整が施されており、空輪部側面は丸みをもたせた造形になっている。16-3は最大長23.1cm、空輪部径15.0cm、風輪部径13.9cm、重量5.82kgを測る。風化により柄は残っておらず、くびれも浅い。16-4は最大長22.0cm、空輪部径18.7cm、風輪部径16.7cm、重量7.86kgを測る。柄の断面は方形で、頂部に突起は見られない。空輪部側面は直線的に作られている。16-2は角閃石を含む安山岩製、ほか3個体は凝灰質砂岩のいわゆる来待石製である。石材別に形態を整理すると、来待石製の3点は柄が短く、空輪頂部に丸みをもち、空風輪側面は直線的であるのに対して、安山岩製の1点は柄が長く、空輪頂部と側面に丸みをもつという形態的差異がみられた。

水輪である16-5～7はいずれも胴部分が張り出しており、5・6は上下面、7は上面が彫りこまれている。16-5は最大径23.2cm、高さ15.1cm、重量8.0kgを測る。16-6は最大径25.5cm、高さ12.5cm、重量8.6kgを測る。16-7は最大径24.8cm、高さ15.0cm、重量10.2kgを測る。16-6は安山岩製、ほか2個体は凝灰質砂岩のいわゆる来待石製のものである。来待石製の2点は最大径が上位にあり、樽型であるのに対して、安山岩製の1点は最大径が中位にあり、算盤玉のような形態である。



第15図 崎田遺跡A区遺構外・試掘T-2出土遺物実測図



第16図 崎田遺跡A区出土五輪塔実測図

第5節 小結

崎田遺跡では、試掘調査の結果をもとに設定した丘陵頂部のA区と尾根筋のB区に加え、南西に下る斜面のC区を調査した。

尾根筋では鞍部に 210.78m²の調査区を設定し、B区とした。調査の結果、竪穴建物跡1棟と外周溝を検出した。竪穴建物跡は主柱穴4個、埋土に炭化物を含む土坑1基、壁際溝を検出した。外周溝は中央が掘り残されており建物への通路は限定されたが、その延長に梯子穴などの遺構は検出しておらず、出入口関係施設は発見できなかった。遺構床面からは大谷編年2～3期の須恵器が出土していることから、竪穴建物跡の年代は古墳時代後期中葉から終末期にあたる。当地においてこの時期の竪穴建物跡が残っている例は少なく、尾根上鞍部という立地も珍しいものである。煮炊きした様子がなく、炉跡は見当たらない。

C区では5棟の掘立柱建物跡を検出した。2棟(SB02、03)の柱穴列の西側に隣接して3棟(SB04、05、06)の柱穴列を確認している。いずれも桁行3間である。SB02、03の遺構面からは国府編年第2型式の須恵器、SB04、05の遺構面からは国府編年第3～4型式の須恵器皿が出土した。また、遺構外遺物として墨書土器が出土している。国府編年第2型式の皿の底に「井」の文字が書かれており識字者の存在がうかがえる。この頃には当遺跡の南方に古代山陰道が通っており、交通の要衝に発展した集落の可能性がある。

丘陵頂部では現地踏査時に五輪塔の部材が集積する箇所が確認されており、この集積地点を中心に 45.71m²の調査区を設定し、A区とした。調査の結果、地山面からSK27～29を検出した。当地域では丘陵頂部で土壙墓が検出される類例がみられることから、これら3基を土壙として解釈した。小規模であることから火葬墓であると考える。標石として、五輪塔の水輪3点と空風輪4点を確認した。16世紀後半から17世紀前半の松江市域において一般的に造立されていた小型の組合せ式五輪塔の部材である。いずれにも梵字は確認できなかった。使用石材は凝灰質砂岩(来待石)と安山岩の二種類に分けられ、両者には形態的特徴に違いがみられたが、これが五輪塔の時期差によるものか、工人の違いによるものか、明確なことはわからなかった。

以上、調査区の丘陵鞍部からは古墳時代後期中葉～終末期の竪穴建物跡1棟、丘陵南西向き斜面から7世紀末葉～8世紀第4四半期頃の掘立柱建物跡5棟、丘陵頂部から五輪塔を標石とする16世紀後半～17世紀前半の火葬墓3個を検出した。崎田遺跡は周辺にも広がっており、今回の調査により利用目的を変化させながら断続的に営まれた複合遺跡であることが分かった。

【註】

[1] 島根県教育庁文化財課世界遺産室 間野大丞氏のご指導による。

崎田遺跡 遺物観察表

土器

※法量のカッコ書きの数値は、復元または残存法量を示す。

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
7-1	SI01	須恵器	壺蓋	—	—	(3.3)	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ	胎土 焼成 4mm以下的小石を含む 良好	灰～灰白色	
7-2	SI01	須恵器	壺蓋	(13.2)	—	(3.7)	回転ナデ	胎土 焼成 砂粒少し含む 良好	白灰色	
7-3	SI01	須恵器	壺蓋	(14.3)	—	(3.0)	回転ナデ	胎土 焼成 密 良好	灰色	大谷編年3期
7-4	SI01	須恵器	壺身	(11.6)	5.3	3.6	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 焼成 密 良好	灰色	大谷編年3期 受部径(13.6cm)
7-5	SI01	須恵器	壺身	(11.8)	(9.2)	4.4	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ	胎土 焼成 密 良好	灰色	大谷編年2期 受部径(14.6cm)
7-6	SI01	須恵器	壺身	(13.6)	—	(3.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 焼成 密 良好	灰色	大谷編年3期 受部径(16.2cm)
7-7	SI01	須恵器	壺身	—	(6.4)	(3.9)	外 回転ナデ 回転ヘラケズリ 部分的に緑灰色の 自然釉 内 回転ナデ	胎土 焼成 3mm以下的小石等を含む 良好	灰色	大谷編年3期 受部径(13.8cm)
7-8	SI01	須恵器	甕	(21.0)	—	(5.5)	回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒・石英 等を含む 普通	白灰～暗灰色	
9-1	SB03	須恵器	蓋	14.1	—	2.1	回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末葉～8c第1四半期 つまみ径4.5cm
11-1	SB04	須恵器	高台付皿	—	(13.0)	(3.9)	外 回転ナデ 内 ナデ 底部 静止糸切り痕	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	灰色	出雲国府編年第3～4型式 (8c第3～4四半期) 転用窯の可能性あり
12-1	SB05	土師器	甕	(29.2)	—	(6.9)	外 ハケメ、ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	黄褐色	
12-2	SB05	土師器	甕	(26.6)	—	(8.7)	外 ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	黄褐色	
13-1	C区 遺構外	須恵器	蓋	(15.2)	—	2.1	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	灰色	転用窯の可能性あり つまみ径(4.5cm)
13-2	C区 遺構外	須恵器	高台付壺	(13.5)	(9.0)	4.0	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ 高台内 回転糸切り痕	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末葉～8c第1四半期
13-3	C区 遺構外	須恵器	高台付皿	—	(15.0)	(2.1)	外 回転ナデ 内 ナデ、墨書き 高台内 回転糸切り痕	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 普通	外 灰～赤褐色 内 灰色	出雲国府編年第2型式 7c末葉～8c第1四半期 墨書きあり「井」
13-4	C区 遺構外	須恵器	無高台壺	—	(7.8)	(2.0)	外内 ナデ 底部 静止糸切り痕	胎土 焼成 3mm以下の砂粒を含む 良好	灰色	出雲国府編年第4型式 (8c第3～4四半期)
13-5	C区 遺構外	須恵器	長頸壺	—	(9.1)	(3.7)	外内 回転ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 不良	外 褐灰色 内 灰色	出雲国府編年第2型式 7c末葉～8c第1四半期 溶着あり
13-6	C区 遺構外	須恵器	壺	(13.0)	—	(2.9)	回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	緑灰～黒色	
13-7	C区 遺構外	須恵器	壺	(14.2)	—	(2.2)	回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	黒色	
13-8	C区 遺構外	須恵器	高台付皿	18.4	13.6	3.6	外 回転ナデ 内 ナデ 高台内 回転糸切り痕	胎土 焼成 3mm以下の砂粒を含む 不良	赤褐色	出雲国府編年第4～5型式
13-9	C区 遺構外	須恵器	短頸壺か 口縁部	(16.8)	—	(4.2)	回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を少量 含む 良好	黒～ 暗オリーブ灰色	
13-10	C区 遺構外	須恵器	灯明皿	(9.3)	(5.0)	2.7	外内 回転ナデ 底辺 静止糸切り痕	胎土 焼成 1mm前後の砂粒を含む 良好	外 黒色 内 灰オリーブ色	内面に黒色の付着物
13-11	C区 遺構外	土師器	甕	(26.6)	—	(4.8)	外 ハケメ、ヨコナデ 内 ハケメ、ケズリ ヨコナデ	胎土 焼成 密、砂粒少し含む 普通	黄橙色	
13-12	C区 遺構外	土師器	甕	(24.0)	—	(6.5)	外 ハケメ、ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	黄褐色	

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
13-13	C区 遺構外	土師器	甕	(25.2)	—	(6.7)	外 ハケメ、ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	
15-1	A区 遺構外	須恵器	甕	—	—	(5.6)	外 タタキ 内 ハケメ	胎土 細かい砂粒を含む 焼成 良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	中世

土製品

遺物番号	遺構名	器種・部位	法量		調整・文様の特徴		色調	備考
			大きさ(cm)	重量(g)	調整・手法・文様	胎土・焼成		
9-2	SB03	甕	口径(34.1)/器高(10.8)		外 ハケ、ナデ 内 ハケメ ヘラケズリ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	
9-3	SB03	竈 庇	長さ(19.0)/幅(5.2) /厚さ3.6		不明	胎土 焼成 密普通	浅黄橙～橙色	庇部分(右下)
9-4	SB03	竈	高さ(5.2)		ケズリ	胎土 焼成 1mm前後の砂粒を含む 普通	黄橙～橙色	
13-14	C区 遺構外	甕 把手	長さ(6.2)/高さ(5.0) /厚さ3.3		不明	胎土 2mm以下の砂粒を多く 含む 焼成 良好	橙色	
13-15	C区 遺構外	土製支脚	長さ(10.0)/高さ(5.9) /厚さ3.9		ナデ、ハケ	胎土 焼成 1mm以下の砂粒を含む 良好	赤褐色	
13-16	C区 遺構外	土製支脚	長さ(11.0)/高さ(7.8)		不明	胎土 焼成 1mm程度の砂粒を含む 良好	赤褐色	

石器・石製品

遺物番号	遺構名	種類	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
7-9	SI01	砥石	不明	8.0	7.5	5.7	421.49	使用痕少ない
7-10	SI01	不明	大海崎か	10.9	4.6	2.2	105.5	一部のみ使用

五輪塔(空風輪)

遺物番号	出土地	法量(cm)					重量(kg)	柄タイプ	石材	備考
		最大長	柄を除く長さ	空輪径	風輪径	括れ部径				
16-1	A区	23.1	20.6	(13.5)	13.5	12.2	6.5	3.90	円錐形	来待石 空輪部破損
16-2	A区	27.2	22.7	16.1	15.6	14.6	7.2	6.54	円錐形	安山岩 角閃石を含む
16-3	A区	23.1	23.1	15.0	13.9	13.7	—	5.82	—	来待石
16-4	A区	22.0	21.0	18.7	16.7	15.8	6.0	7.86	円錐形	来待石

五輪塔(水輪)

遺物番号	出土地	法量(cm)				重量(kg)	石材	備考	
		上面径	下面径	最大径	高さ				
16-5	A区	—	17.0	23.2	15.1	隅丸方形 幅7.3/深さ3.6	8.0	来待石	
16-6	A区	14.5	14.0	25.5	12.5	—	8.6	安山岩	
16-7	A区	19.0	22.0	24.8	15.0	—	10.2	来待石	下面是へこみなし

銭貨

遺物番号	調査区	銭種	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	備考	
15-2	試掘 T-2	寛永通寶	22.8	6.9	1.0	1.69	95	八貝宝	

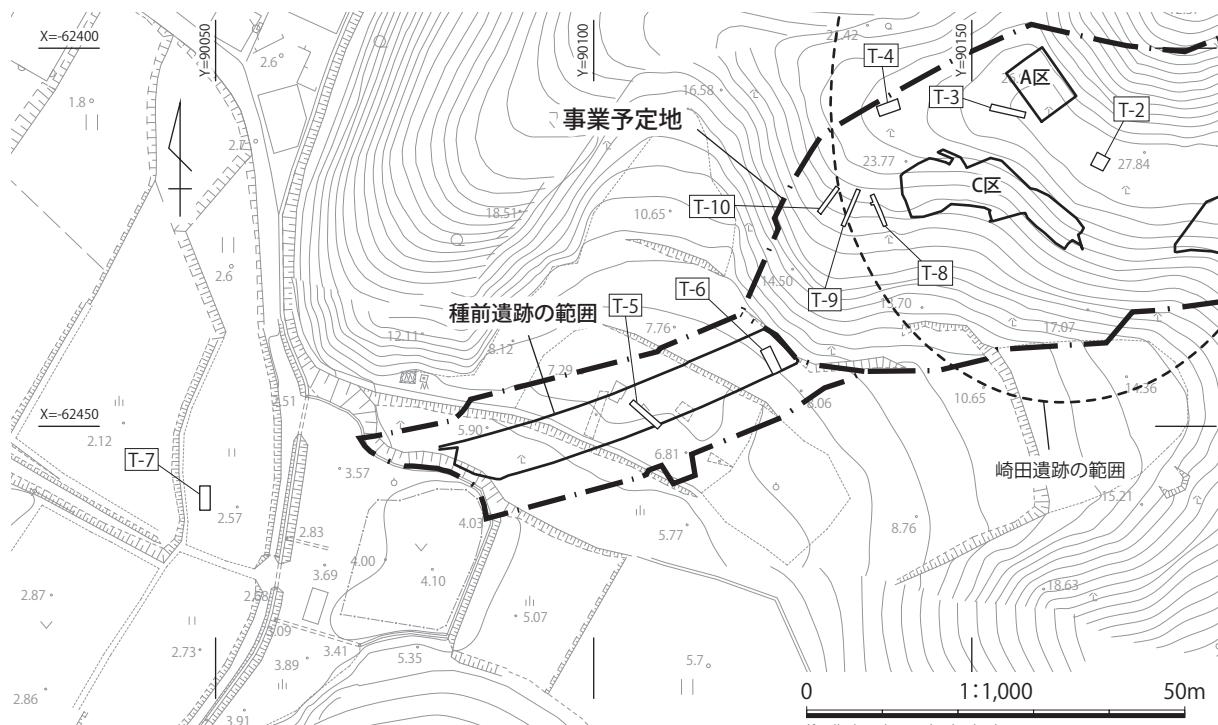
第4章 種前遺跡

第1節 調査の経過と概要

種前遺跡は本事業に伴う試掘調査で発見した集落遺跡である。令和2年9月に実施した分布調査時に崎田遺跡のある丘陵裾部に緩斜面を確認したことから遺跡の有無を確認するための調査を実施することとした。試掘調査はトレントを2本設定し、令和2年10月8日～10月13日のうち4日間をかけ手掘りにより実施した。山側のトレントからは集石遺構を検出し、谷側のトレントからは土錘3点と碧玉片数点のほか、多数の須恵器・土師器が出土している。11月6日には遺跡の範囲を絞り込むため谷水田部分に追加トレント(T-7)を設定したが、ここからは何も確認されず、丘陵裾の車道予定地270.65m²（長さ47.5m、幅6.0m）を本調査範囲とした。このため歩道及び法面部分について地下に保存された格好となっている。

当該遺跡の調査前の標高は5.9～9.0mであるが、厚い客土や堆積土が存在しており、調査後に確認した遺構面での標高は3.0～7.0mとなる。前述の崎田遺跡の頂上平坦部の遺構面と種前遺跡の遺構面とは比高差最大21.9mを測る。

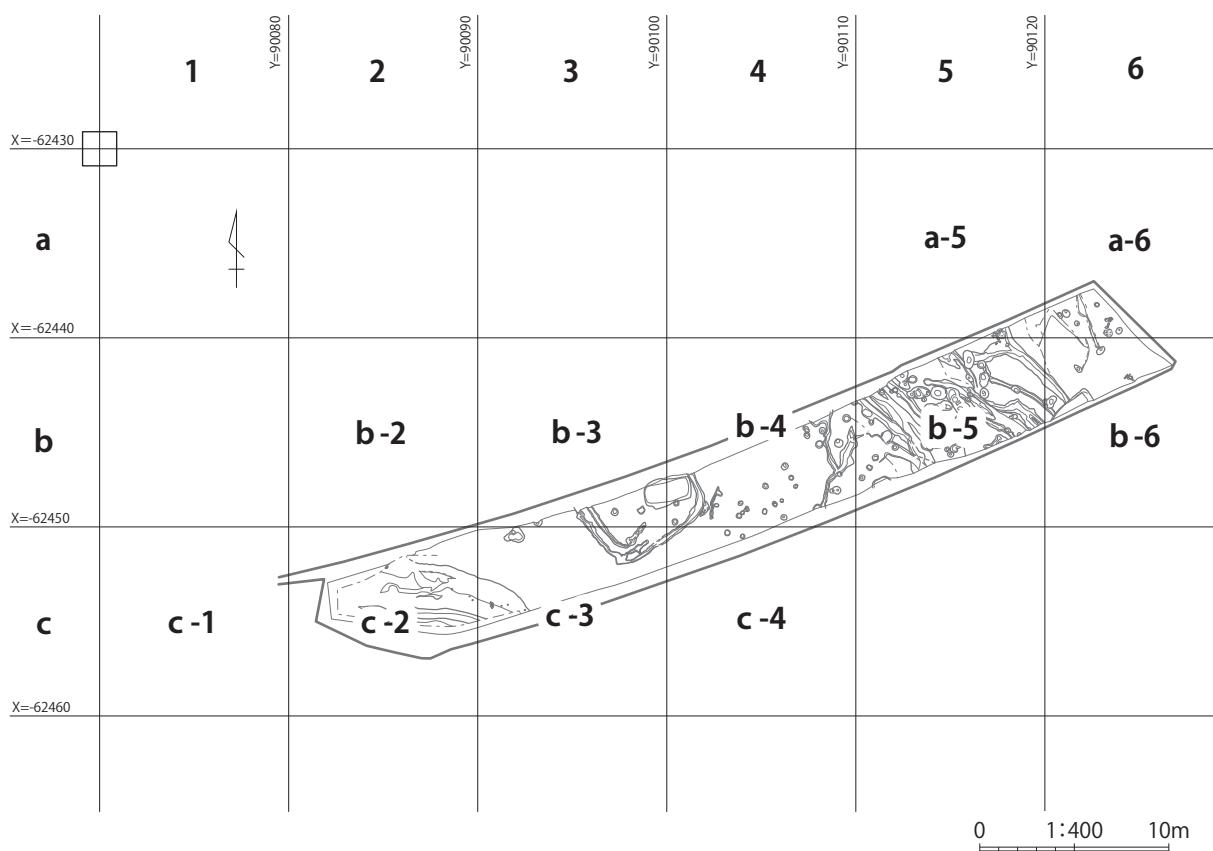
今回の調査では、籬壇状の加工段4段、竪穴建物跡1棟(SI01)のほか谷部に形成された自然流路(NR11)を検出した。各加工段の平坦面からは溝やピット多数を検出しており、掘立柱建物跡を復元している。報告にあたっては加工段ごとに項目を設け、ここから検出した遺構や遺物を加工段ごとに記載してその変遷や土地利用を考察する。



第17図 事業予定地と調査区位置図（種前遺跡）

以下では、第2節「堅穴建物跡」、第3節「加工段」、第4節「土坑」、第5節「自然流路 NR11」として概要を述べる。出土した遺物については遺構ごとに掲載しているが、遺構面を覆う古墳時代の包含層（第64～80、83層）と中近世の包含層（第49～55、58層）から出土した遺物については第6節の「遺構外出土遺物」で一括して掲載した。なお、表土から古墳時代の包含層上層にかけて、複数の土錐が出土したため、これについても第6節にて扱うものとした。弥生土器、土師器、土製品、須恵器、陶磁器、石器の順に記載する。

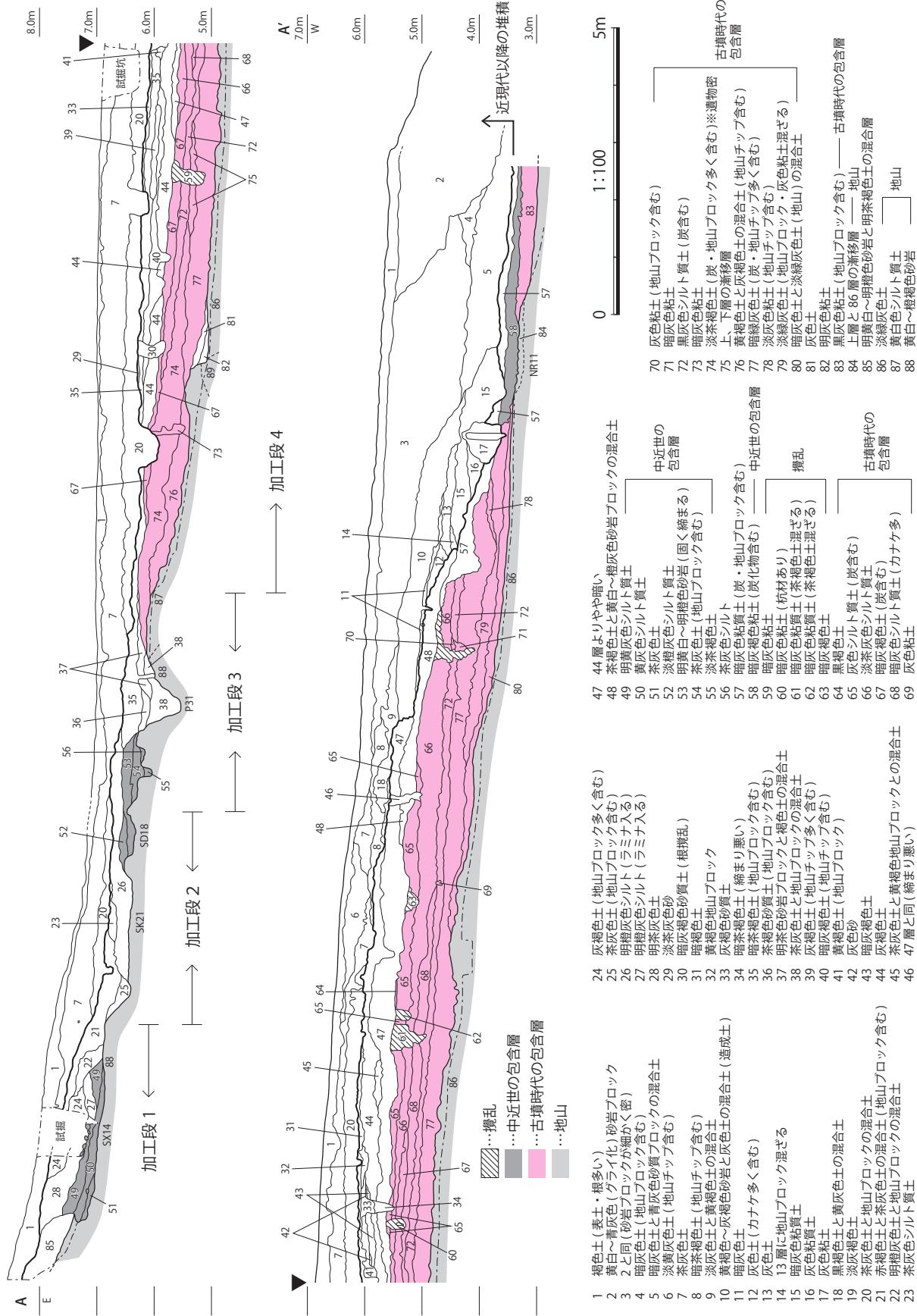
また、遺構外から出土した遺物の取り上げにあたっては、世界測地系に則したグリッドを組み、グリッドごとに取り上げを行った。遺物観察表に出土層位とグリッドを記載しており、本文中の説明は割愛した。



第18図 種前遺跡 調査グリッド図



第19図 種前遺跡 遺構配置図



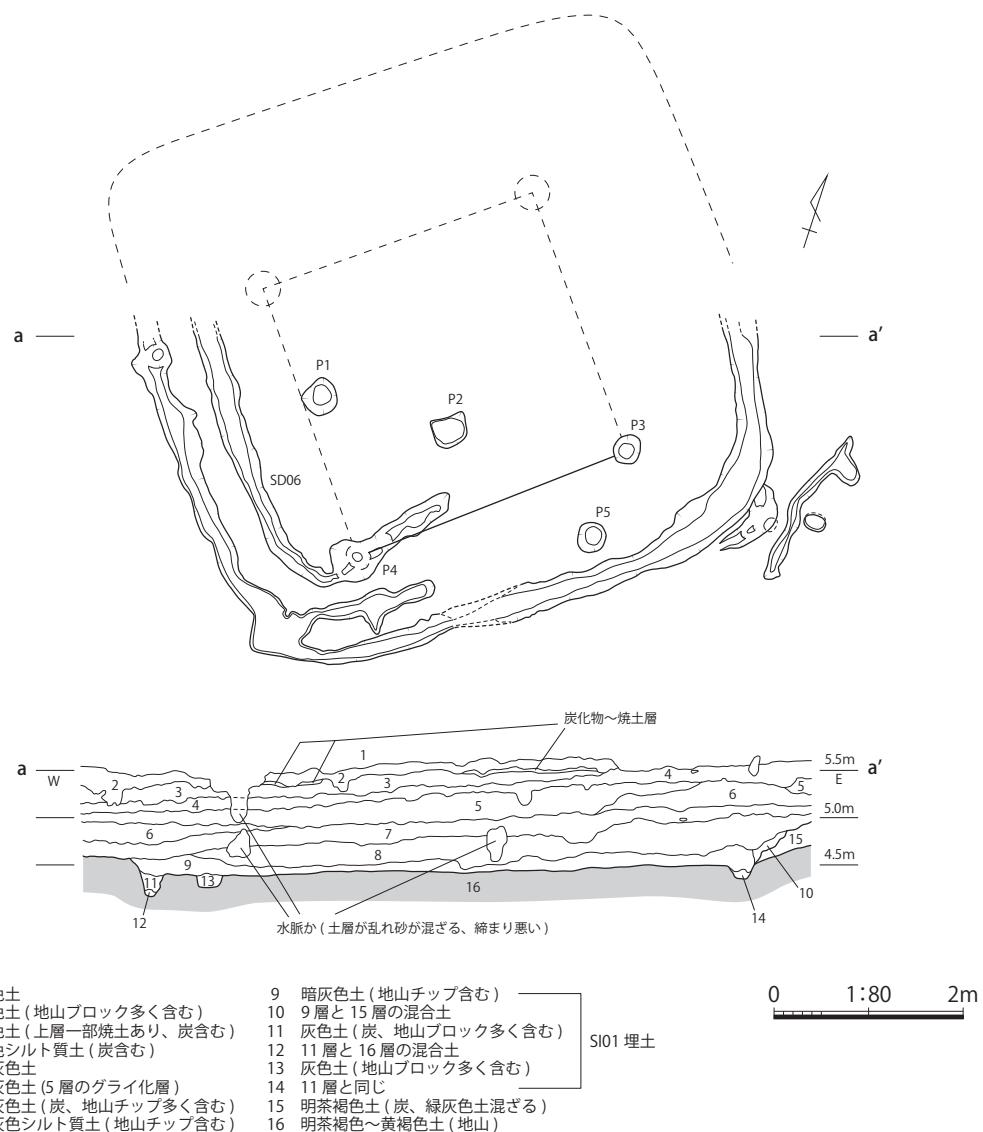
第2節 壁穴建物跡

第1項 SI01

調査区の標高 4.0～4.75m を測る低地部で検出した壁穴建物跡である。平面形は方形を呈し、規模は東西 6m を測るが、南北規模は一部が調査区外へ広がるため不明である。壁高は最大で 40cm を測る。床面からは柱穴 5 個 (P1～5) と壁際溝、溝、土坑を検出した。柱穴に規則性は無く、主柱穴については特定することができなかった。床面中央部には被熱の影響と考えられる赤褐色の土が見られたが、範囲を示すことができないほど曖昧なものであった。

壁際溝は幅 10～28cm、深さ 14～24cm の断面「U」字状を呈する溝が全周する。また、床面西側には壁際溝と並行する溝 SD06 を検出したが、その使途は定かではない。建て替えが行われた痕跡を示す可能性もあり、建て替え前の古い時期の壁際溝かもしれない。規模は幅 26cm、深さは最大で 16cm を測る。

遺物は、壁際溝内から土師器の高环が出土している。



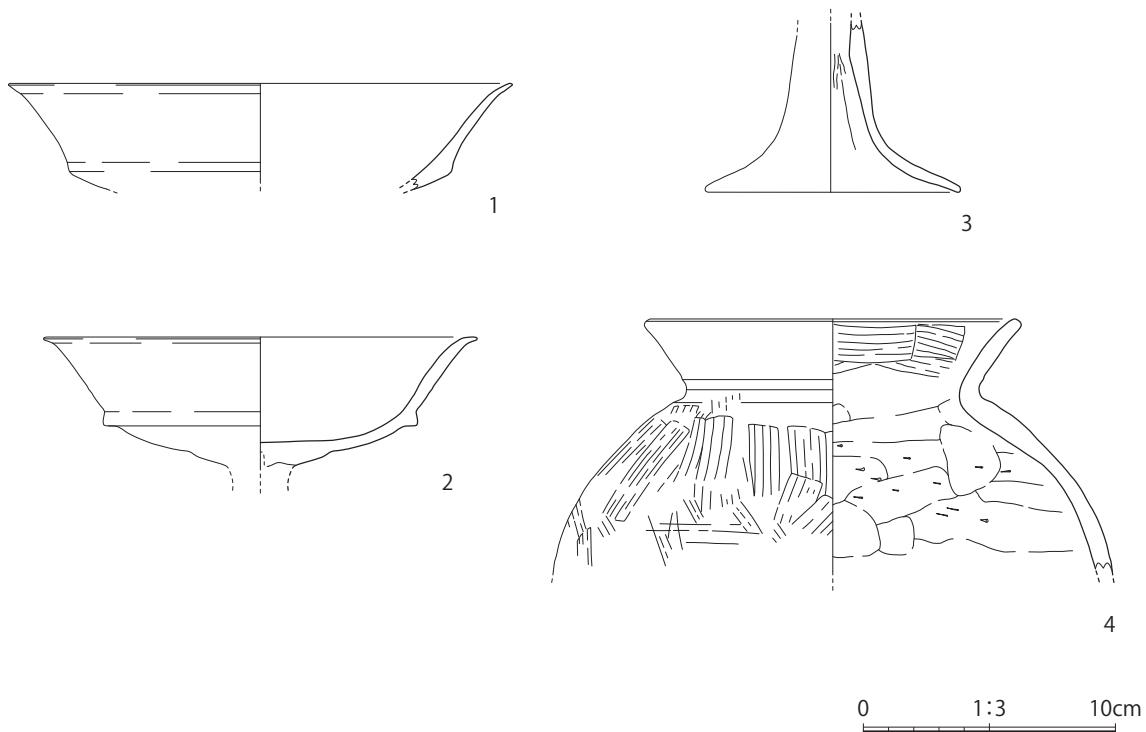
第 21 図 種前遺跡 SI01 平面・断面図

SI01出土遺物（第22図）

22-1～3は土師器の高坏である。22-1と22-2は壁際溝内で出土した高坏の坏部である。22-1は口径20.0cm、残存高4.2cmを測る。風化により調整は不明である。22-2は小谷4式にあたり、口径17.2cm、残存高5.1cmを測る。風化により調整は不明であるが、外面にわずかにミガキが施されている。22-3・4は壁際溝の埋土上面で出土した。22-3は古墳時代中期の高坏の脚部である。底径10.1cm、残存高6.7cmを測り、内面にはしぶり痕が残り、ナデ調整が施されている。22-4は古墳中期の甕で、口径15cm、残存高10.0cmを測る。口縁部内面にハケメとナデ調整、外面にナデ調整が施され、胴部は内面にケズリ、外面にハケメが施されている。

第3節 加工段

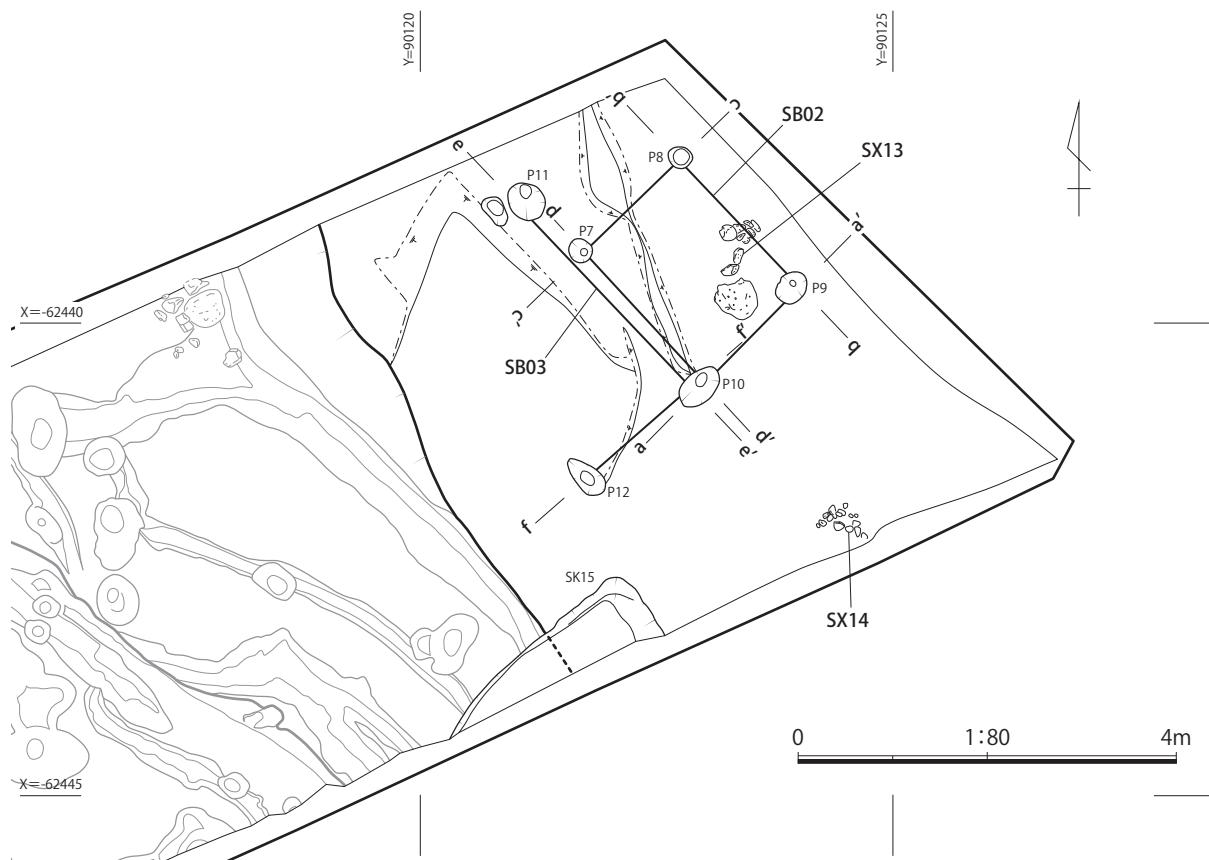
丘陵に近い調査区の東側では雑壇状の加工段を検出しており、4つの平坦面を確認した。平坦面からは溝や多数の柱穴を検出しており、ここでは便宜的に丘陵側を加工段1、低い方に向け加工段2、加工段3、加工段4と呼称し、それぞれの加工段から検出した溝と柱穴群について概要を記す。なお、柱穴群については狭長な調査区であるため、現地での建物復元はできていない。このためSB02など例外的に1間×1間の建物跡として復元したものもあるが、基本的には「斜面に並行して等間隔に並ぶ2間以上のピット列」かつ「1間が1m以上あるもの」を抜き出し掘立柱建物跡として報告する。



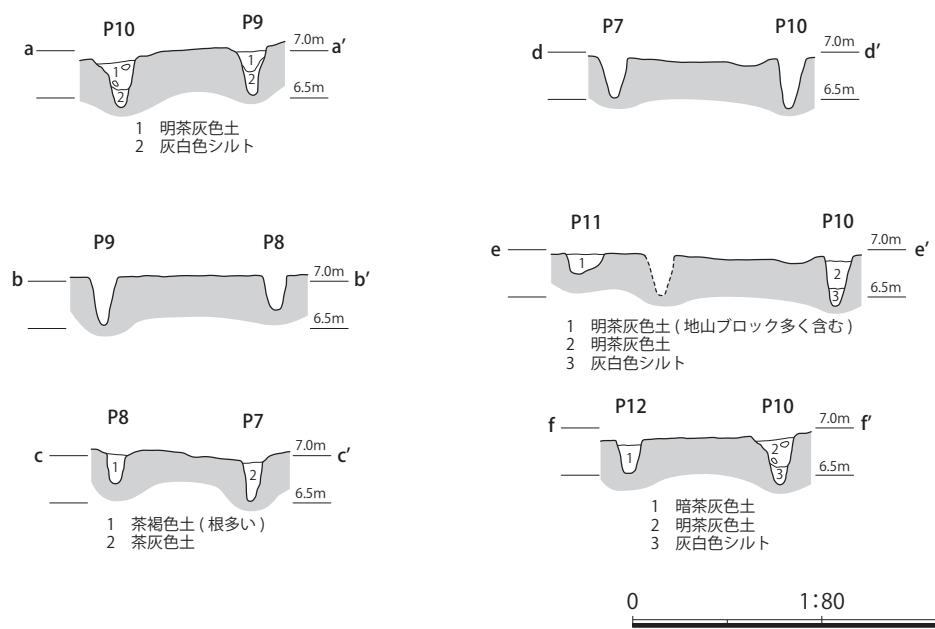
第22図 種前遺跡 SI01 出土遺物実測図

第1項 加工段1

調査区東端の平坦面を加工段1とした。平坦面での標高は6.75～7.00mであり、集石遺構2か所(SX13、14)を検出するとともに掘立柱建物跡2棟(SB02、03)を検出した。遺物は出土していない。また、a-6グリッドの第49～51層からは近世の土錐1点のほか、陶磁器が出土した。



第23図 種前遺跡加工段1平面図



第24図 種前遺跡 SB02・SB03 土層断面図

SB02 (第23・24図)

加工段1の標高7.3～7.6mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行1間、梁行1間として復元した。規模は心々で桁行1.4m、梁行1.8mを測り、主軸の傾きはN-40°-Wである。

柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴底部の標高は7.4～7.9mである。

P10は後述のSB03と共有する格好で復元しているが、切り合い関係があるわけではない。

SB03 (第23・24図)

SB02の南西側で検出した掘立柱建物跡であり、桁行1間、梁行1間として復元した。規模は心々で桁行2.8m、梁行1.6mを測り、主軸の傾きはN-45°-Wである。

柱穴の平面形は円形を呈し、柱穴底部の標高は7.4～7.9mである。

SX13 (第23図)

地山面に10～20cm大の石が集積している。除去後に精査を行ったが、この下に遺構は確認できなかった。後述するSX14とは石材の大きさが違っており、違う性格を考える必要がある。礎石の据え付け痕跡もなく、性格は不明と言わざるを得ない。

SX14 (第23図)

中近世の遺物包含層である第49～51層の上面の上に5～10cm大の石が集積している。除去後に精査を行ったが、この下に遺構はなく、礎石の据え付け痕跡も見られなかった、SX13と同様に性格は不明である。

SK15 (第23図)

中近世の遺物包含層を掘り込むかたちで検出した。短辺82cm、長辺2.5m、深さ23cmである。加工段2で検出したSD19とは切り合い関係にあり、SK15(新)-SD19(古)である。古墳時代の須恵器片が出土しているものの、包含層との関係から中近世以降の土坑であることが分かるため、遺物の詳細は割愛する。

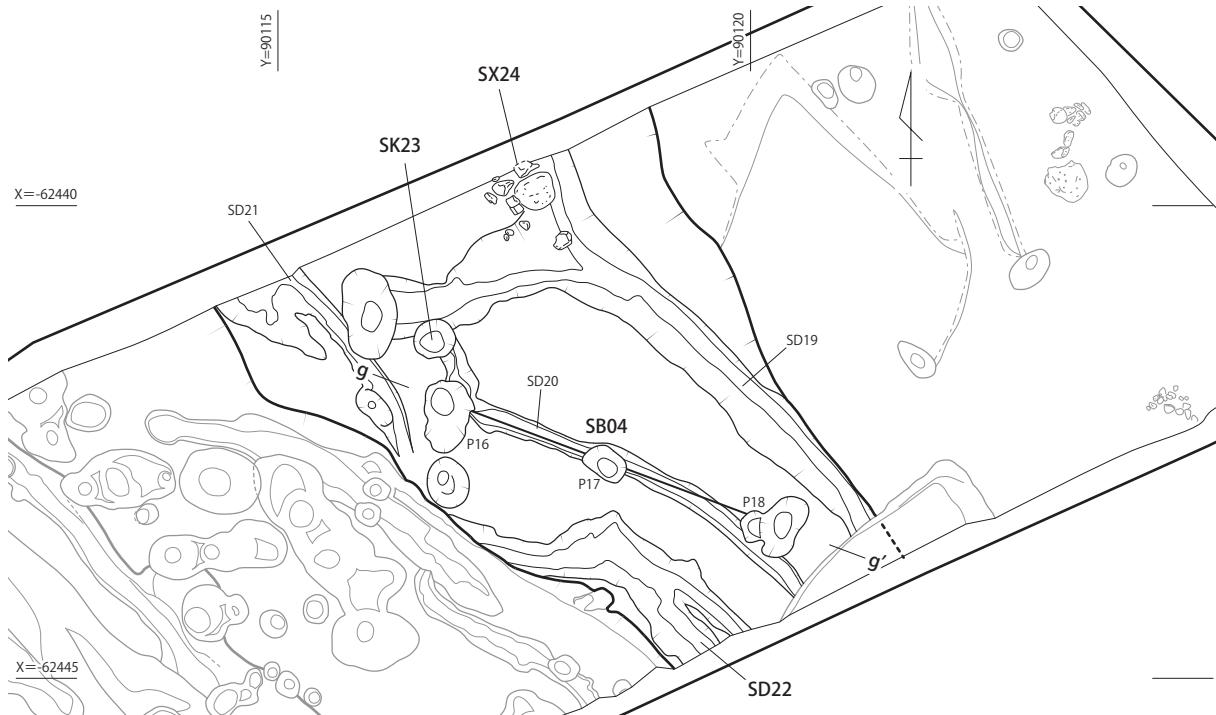
第2項 加工段2

斜面上方にあたる北東側を削り、その下に平坦面を作り出している。加工段上端部での標高は6.06m、平坦部での標高は6.44～6.58mを測る。加工段の下にはこれに沿うように溝SD19が位置しているほか、3本の溝(SD20～22)を検出している。このうちSD21、22については蛇行して流れる自然流路のようにも見える。この他、加工段2からは集石遺構1カ所(SX24)、掘立柱建物跡1棟を復元した。

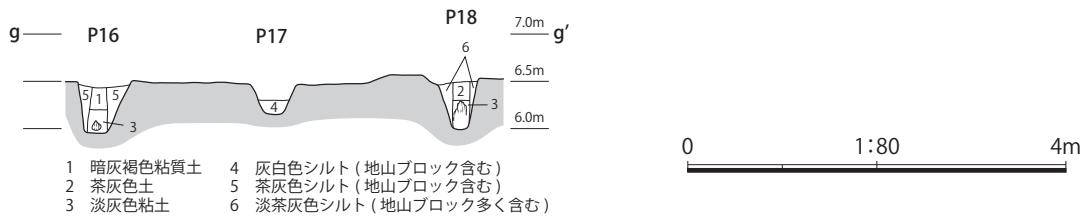
遺物は、SD22から近世の土師器が出土しているほか、柱穴や溝から古墳時代前期初頭から後期までの遺物の小片が出土している。複数の時期の遺構が存在している可能性が考えられる。

遺構内出土遺物 (第27図)

27-1はSD22から出土した土師器の皿である。口径11.0cm、器高2.1cmを測る。近世の京都系土師器で、手づくねにより成形されている。27-2は土師器甕の口縁部である。SK23から出土しており、草田編年6期の古墳時代初頭にあたる。27-3は碧玉の石核である。SK23から出土しており、長さ4.0



第25図 種前遺跡加工段2平面図



第26図 種前遺跡 SB04 土層断面図

cm、幅 6.0cm、厚さ 3.5cm、重量 102.0 g を測る。大型の石核で、製品にしようとしたものである。

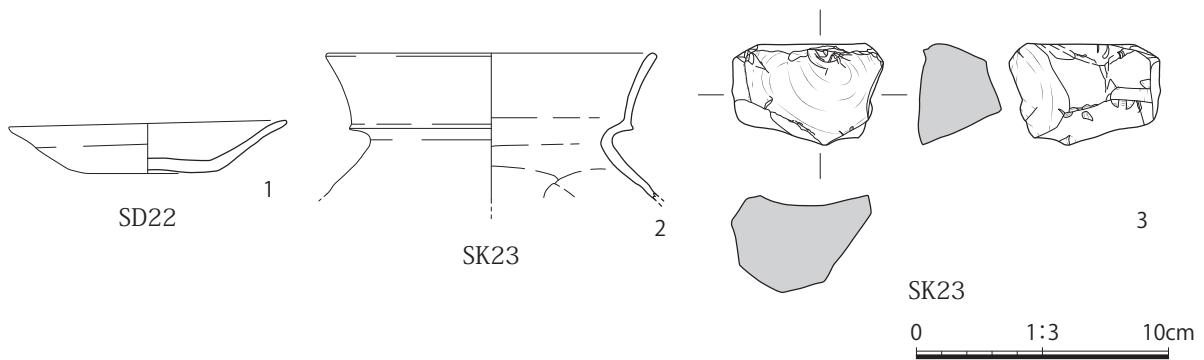
SB04 (第25・26図)

加工段2の標高 6.4m ~ 6.5m を測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行2間を復元した。全長は心々で 3.8m、柱間距離は P16-P17 が 1.9m、P17-P18 が 2m を測り、主軸の傾きは N-70°-W である。柱穴の平面形は不整形であり、底部の標高は 5.95 ~ 6.16m である。P16 と P18 からは柱根が出土しているが、柱材は分析をしていないため不明である。SD20 とは切り合い関係にあり、SB04 (新) -SD20 (古) である。

遺物は P16 から古墳時代後期の土師器片と須恵器片が出土したが、実測できるものではなかった。

SX24 (第25図)

地山面の上に石が集積している。石の大きさにはばらつきがあり、10 ~ 20cm 大の集石と 40cm 大の石が混在している。加工段1で確認したものと同様に、集積の下に遺構はなく、礎石の据え付け痕跡も確認できなかった。性格は不明である。



第27図 種前遺跡遺構内出土遺物実測図

第3項 加工段3

斜面上方にあたる北東側を削り、その下に平坦面を作り出している。加工段上端部での標高は6.44m、平坦部での標高は6.0～6.3mを測る。加工段の下にはこれと並行する格好で溝が位置しているほか、掘立柱建物跡5棟を復元した。床面から出土した遺物はない。

SB05 (第28・29図)

加工段3の標高6.18～6.24mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行3間を復元した。主軸の傾きはN-63°-Wである。全長は心々で6.2m、柱間距離はいずれも心々で2mを測る。柱穴の平面形は、橢円形または不整形を呈し、底部の標高は5.61～6.02mである。SP28からは柱根を検出している。

遺物は、柱穴から古墳時代後期の須恵器の小片と朝鮮の陶器が出土した。

遺構内出土遺物 (第30図)

30-1は陶器で、P25で出土した朝鮮舟徳利の胴部である。内面にはタタキ成形による同心円文の當て具痕が残り、外面には褐釉がかかる。16世紀代のものである。

30-2はP28から出土した柱根である。長さ53.2cm、幅20.6cmを測る。

SB06 (第28・29図)

加工段3の標高5.71～5.96mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行3間を復元した。主軸の傾きはN-56°-Wである。全長は心々で4.8m、柱間距離はSK27-SK29-SK32は心々で1.36m、SK32-P34は心々で1.92mを測る。柱穴の平面形は橢円形または不整形を呈し、底部の標高は5.61～6.02mである。

遺物は柱穴から土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。

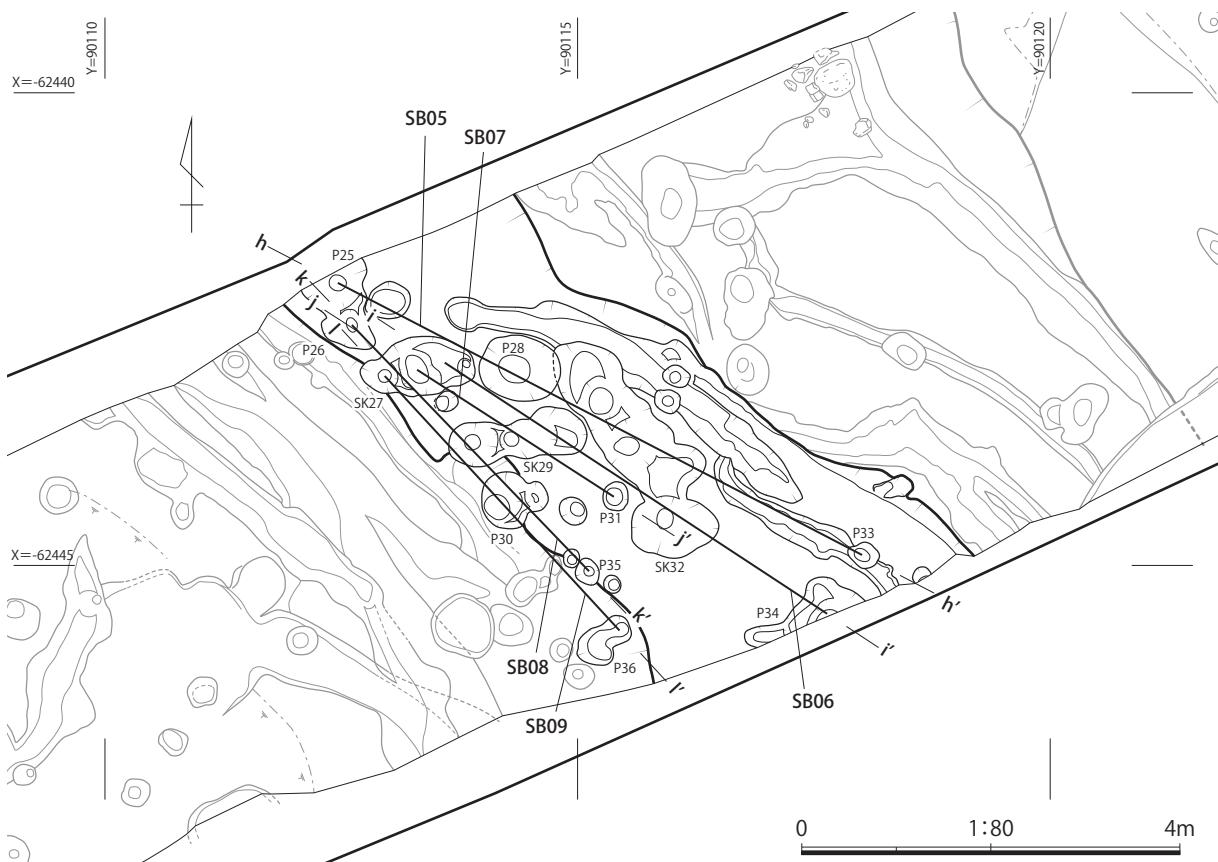
SB07 (第28・29図)

加工段3の標高6.1～6.2mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行2間を復元した。主軸の傾きはN-57°-Wである。全長は心々で2.48m、柱間距離はそれぞれ1.2mを測る。柱穴の平面形は橢円形または不整形を呈し、底部の標高は5.54～5.64mである。

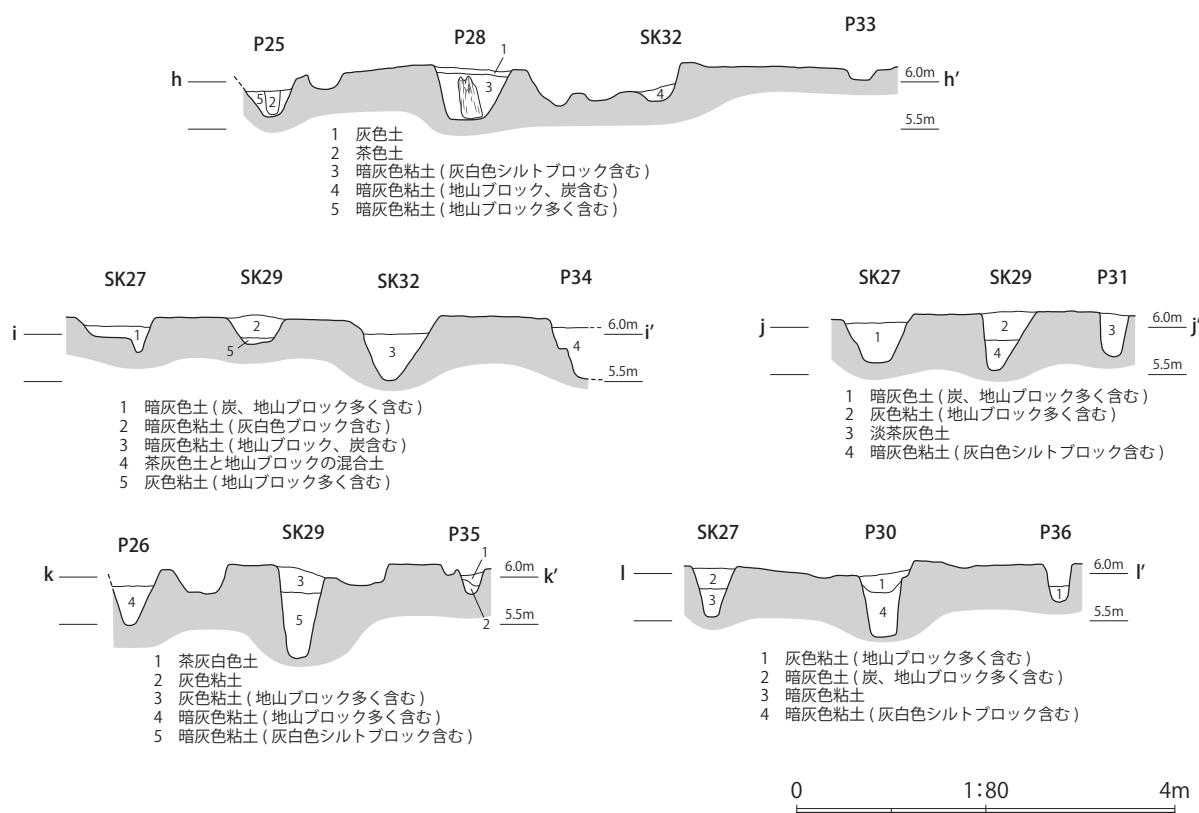
遺物は柱穴から須恵器と土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。

SB08 (第28・29図)

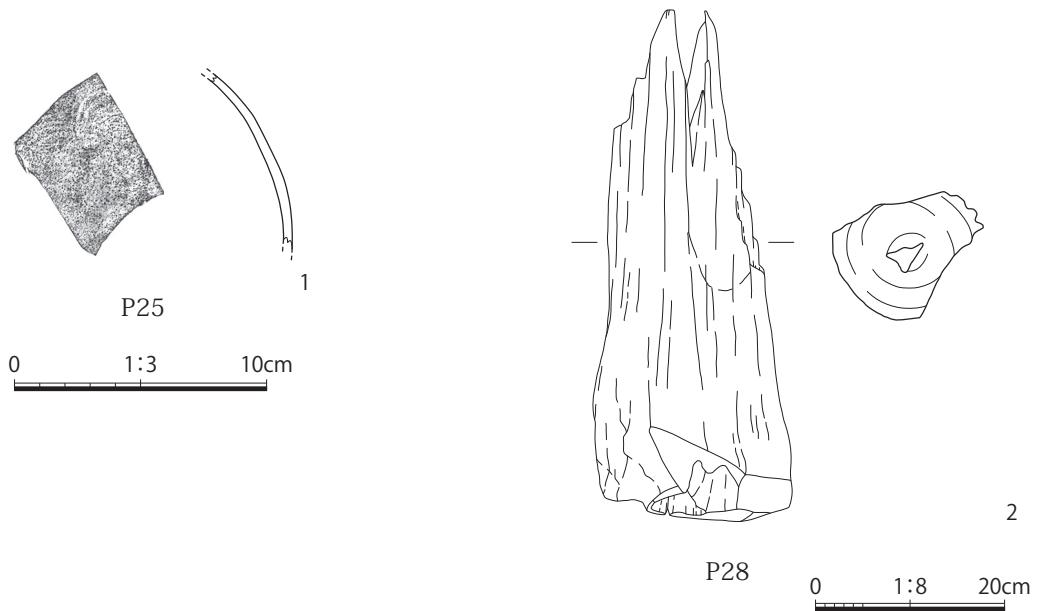
加工段3の標高6.04～6.14mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行2間を復元した。主軸の傾きはN-43°-Wである。全長は心々で3.6m、柱間距離はP26-P30は心々で1.76m、



第28図 種前遺跡加工段3平面図



第29図 種前遺跡 SB05 ~ 09 土層断面図



第30図 種前遺跡遺構内出土遺物実測図

P30-P35は心々で1.84mを測る。柱穴の平面形は円形または不整形を呈し、底部の標高は5.14～5.83mである。遺物は出土していない。

SB09（第28・29図）

加工段3の標高6.0～6.1mを測る位置で検出した掘立柱建物跡であり、桁行2間を復元した。主軸の傾きはN43°Wである。全長は心々で3.68m、柱間距離は2間とも心々で1.84mを測る。柱穴の平面形は橢円形または不整形を呈し、底部の標高は5.33～5.7mである。遺物は出土していない。

第4項 加工段4

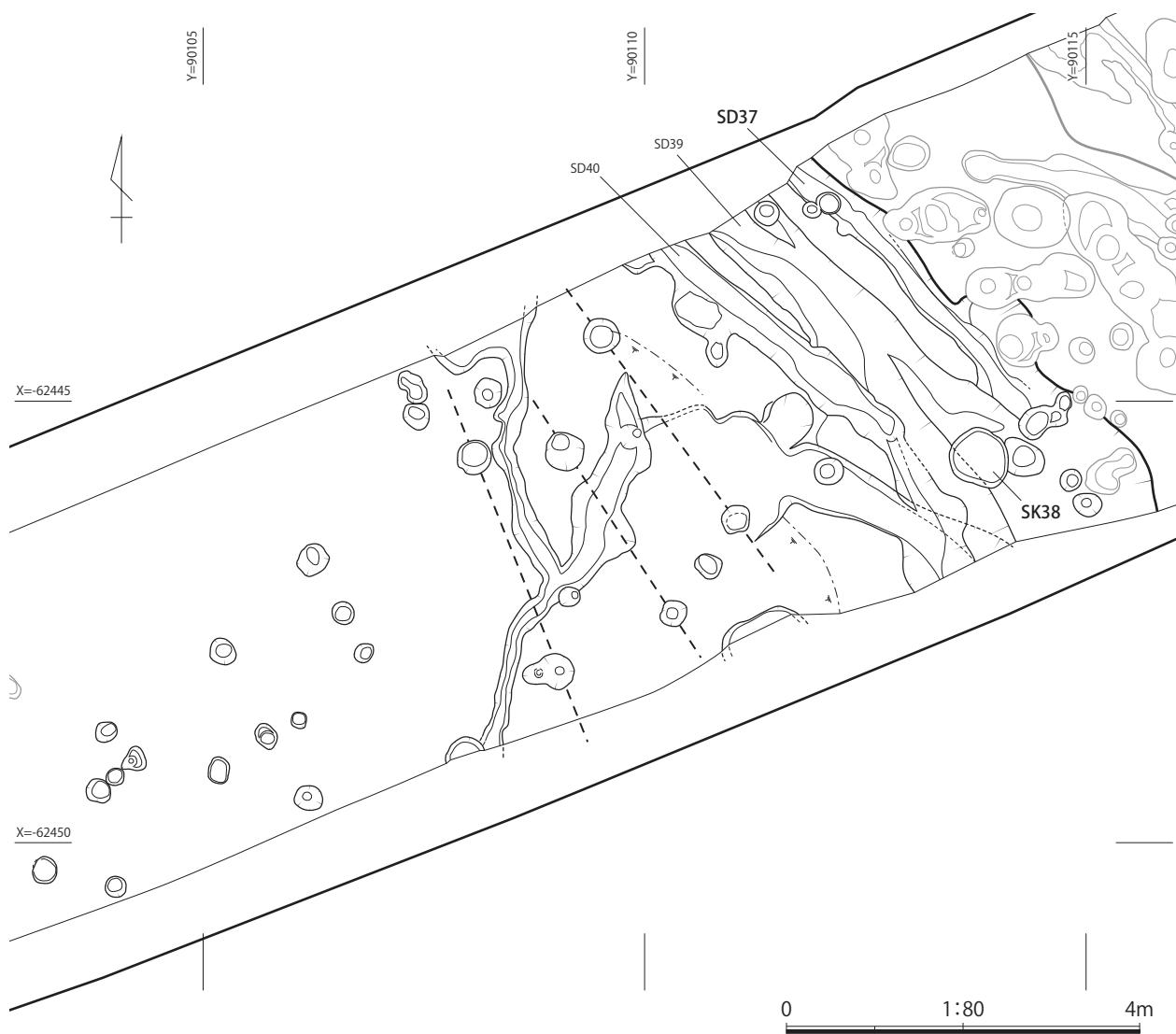
斜面上方にあたる北東側を削り、その下に平坦面を作り出している。加工段上端部での標高は6.3m、平坦部での標高は4.8～5.5mを測る。加工段の下にはこれに沿うように溝SD37が位置しているほか、複数の溝や段を検出している。柱穴は検出しているものの建物の並びとして復元できるものはなかった。SD37については遺構の上端部が消失しており、加工段4に付随する遺構であるとは言い難いが、調査区の土層断面から彫り込み面を確認することができなかったため、便宜的に加工段4検出遺構として扱った。また、掘立柱建物の復元も試みたが2間以上の柱穴列は見られなかったため、ここでの記載は省略する。柱穴列として調査区外に続く可能性が考えられるものについては点線で示した。

遺物は加工段斜面の溝SD37、39、40で弥生時代終末期から古墳時代後期までの土器片が出土した。

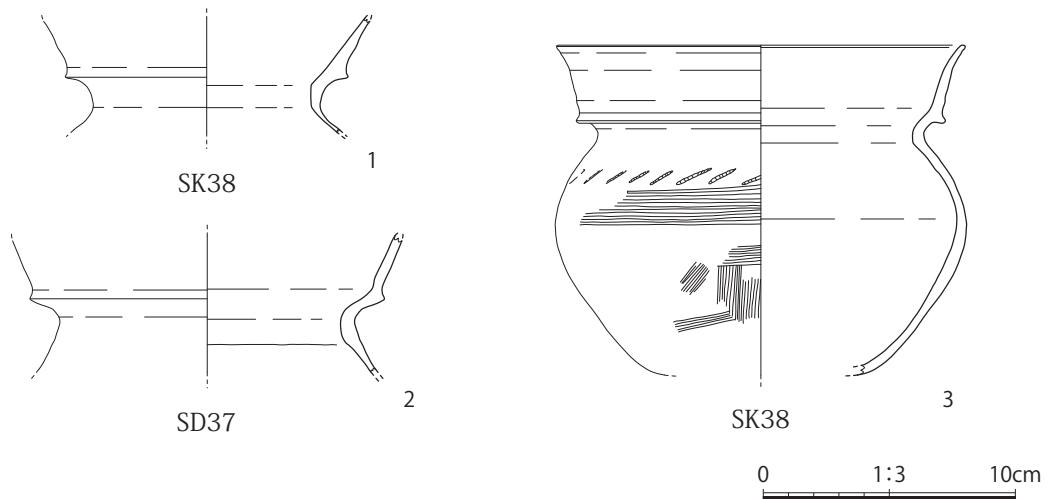
遺構内出土遺物（第32図）

32-1・2は土師器の鼓形器台である。32-1はSK38、32-2はSD37から出土しており、32-2は古墳時代前半のものである。

32-3はSK38から出土した土師器の平底鉢である。口径は16.2cmを測り、体部にハケメ、肩部に列点文が施される。時期は草田編年6期に該当する。



第31図 種前遺跡加工段4平面図



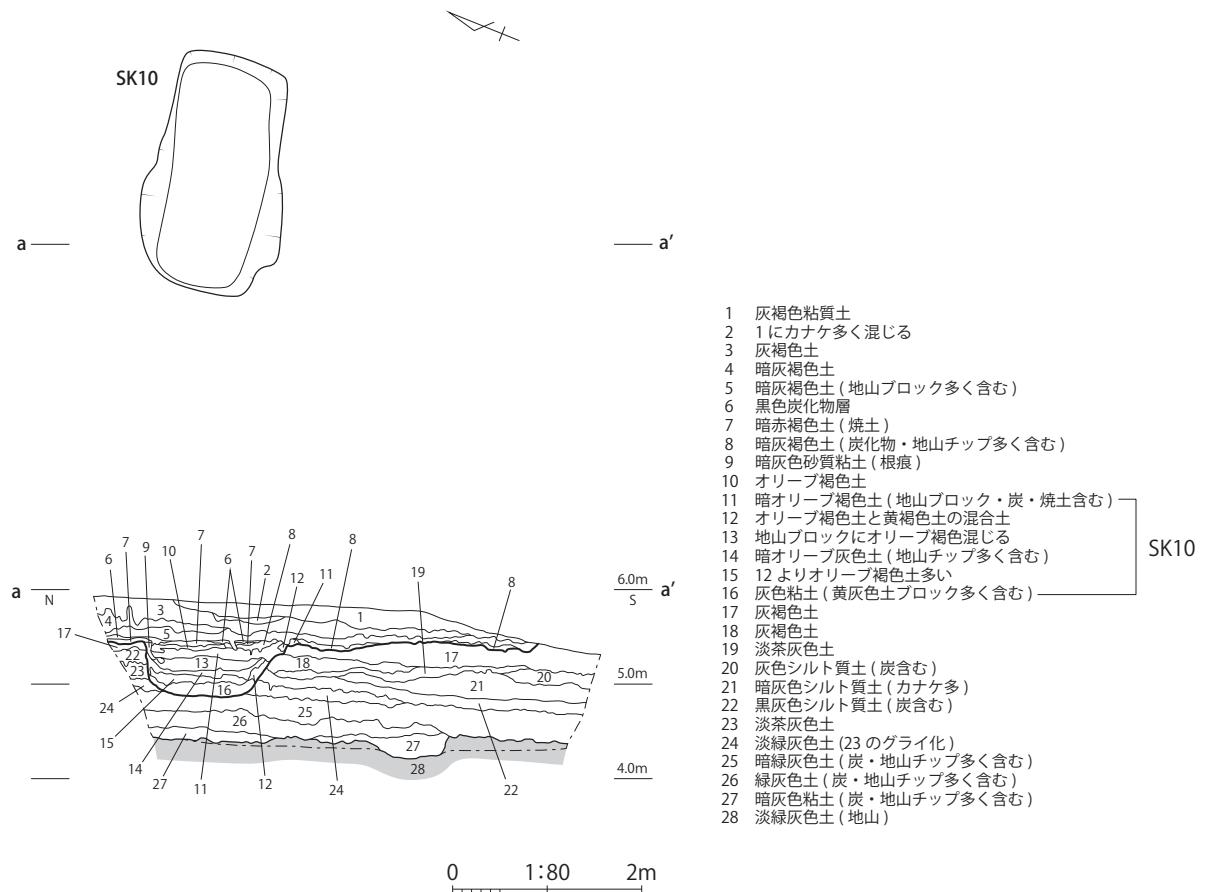
第32図 種前遺跡遺構内出土遺物実測図

第4節 土坑

ここでは、種前遺跡で検出した加工段に伴わない土坑について取り扱う。

SK10 (第33図)

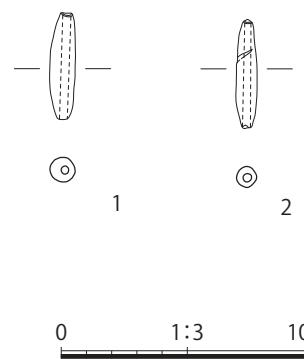
竪穴建物跡の上層で検出した、長辺 2.4 m、短辺 1.8 m、深さ 60cmの土坑である。第 17 層の褐色土層を掘りこんで作られており、埋土は第 11 層から第 16 層の 6 層である。内部からは近現代のものと考えられる小型の管状土錘のほか、古墳時代後期の須恵器片が出土した。



第 33 図 種前遺跡 SK10 土層断面図

遺構内出土遺物 (第34図)

34-1・2 は管状土錘である。いずれも長さ約 4cm、径は 1 cm 程度のもので、重さは 34-1 が 3.30 g、34-2 が 2.49 g の小型品である。これらはともに管状土錘 b 類 (和田 2015) に分類され、その中でも特に小型品である。中海・宍道湖周辺地域における出土例 (内田 2009) との比較から、どちらも古代以降の土錘である。



第 34 図 種前遺跡 SK10 出土遺物実測図

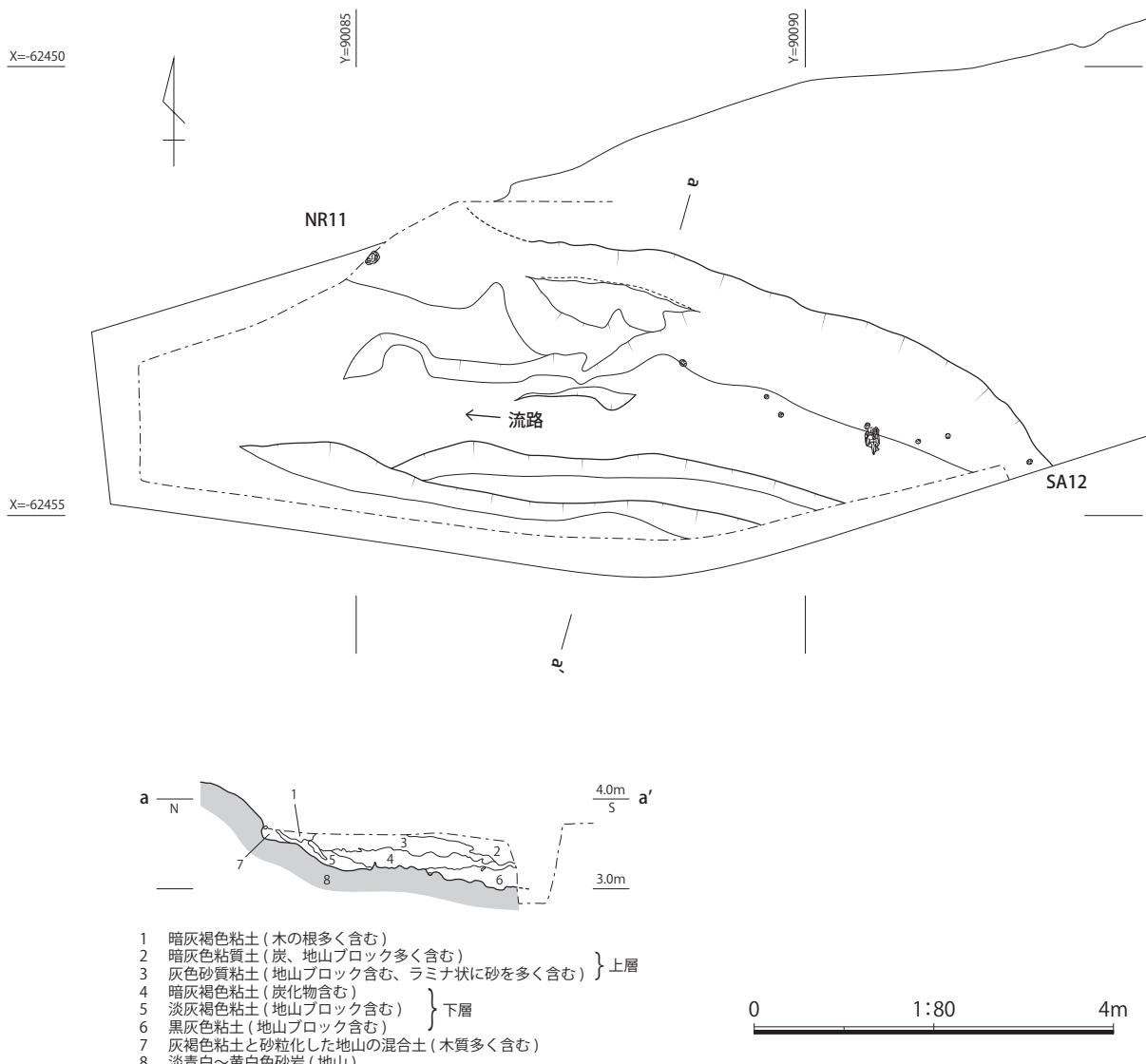
第5節 自然流路NR11

調査区の最低所となる西端からは、崖と平坦な部分とが交互に現れている河岸段丘のような自然地形を検出した。流路右岸と判断し、便宜的に自然流路（NR11）として報告する。この斜面からは杭列SA12を検出したほか、流路の自然堆積土中からは多数の遺物が出土している。

第1項 杭列

SA12（第35図）

流路と並行に打ち込まれた杭であり、6本が4mの範囲に打ち込まれ、3.5m離れた位置にも単独で1本が存在する。どの層位から打ち込まれたものかは不明だが、打ち込まれた地山での標高は3.6m前後で揃っていることから、地山が露わになっている頃に打ち込まれた可能性を考えている。この杭列の性格は不明だが、流路と並行して打ち込まれていることを考えれば、護岸のようなものかもしれない。



第35図 種前遺跡 NR11 平面・断面図

第2項 NR11

南東から北西に向けて流れる流路の右岸部分を検出した。肩部での標高は4.2m、調査区内の最も低い部分は3m、比高差は最大で1mを測る。出土遺物については細かい層位ごとの取り上げができるおらず、第6層のものを最下層出土遺物、第4・5層のものを下層出土遺物、2・3層のものを上層出土遺物として取り上げている。最下層～下層からは須恵器、土師器が出土しており、上層からは木製品と鹿角が出土しているほか、銭貨が1点確認された。

下層出土遺物（第36図）

36-1は提瓶の体部である。外面にカキメが施されており、一部に自然釉が溶着し、胴部に別個体の蓋が付着している。口縁部の欠損と火ぶくれによる変形により型式は不明である。

36-3は土師器底部外面に糸切り痕をもつ土師器皿である。底径5.2cmを測る。内外面には回転ナデ調整が施されている。内面に黒い付着物が確認できることから灯明皿に使用されたものか。

36-4は14～15世紀の中国青磁碗である。片切彫の鎬蓮弁文が施され、高台内は無釉である。

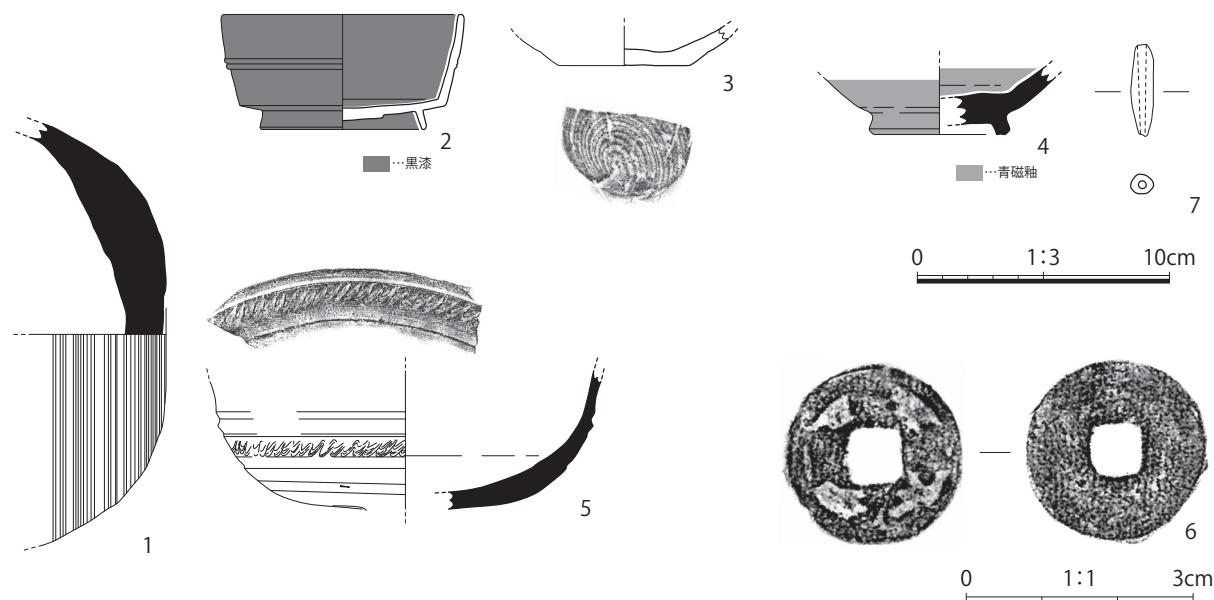
36-5は須恵器の低脚無蓋高环坏部の破片と思われる。口縁端部を欠いており口径は不明だが、15cm以上となるものである。外面には波状文が施され、底部付近は回転ヘラケズリである。脚部との接合部分は判然としない。

上層出土遺物（第36図）

36-2は上層から出土した漆器椀である。口径9.6cm、高さ4.6cmを測る。内外面に黒漆が塗られている。

36-6は銭貨である。一部の文字が潰れているため銭種は特定できないが、「□□元寶」と読み取れる。

36-7は土錘である。長さ3.6cm、厚さ0.9cm、重さ2.14gを測る。類例から近現代のものであると考えられる。



第36図 種前遺跡 NR11 出土遺物実測図

第6節 遺構外出土遺物

ここでは遺構面を覆う古墳時代の包含層(第64～80、83層)と中近世の包含層(第49～55、58層)から出土した遺物について掲載する。なお、表土から古墳時代の包含層上層にかけて出土した土錐についても第6節にて扱うものとした。

弥生土器

37-1は注口土器の注口である。弥生時代後期のものとみられる。

37-2は小型壺である。外面にかすかにハケメが確認できる。また、内面には茶色の付着物がみられ、漆の可能性がある。

37-3～5は甕の口縁部である。上方に引き伸ばされた口縁の外面に、37-3には4条、37-4には3条、37-5には2条の沈線が施されている。弥生時代後期前葉のものである。

土師器（弥生時代終末期から古墳時代）

38-1～5は複合口縁の甕である。38-1～4は薄手の口縁部で、弥生時代終末期のものである。38-5は厚手の口縁部で、古墳時代前期のものである。

38-6～8は低脚壺である。38-6は壺部で古墳時代前期のものであり、内面に付着物があるものの用途は不明である。38-7・8は脚部である。

38-9は底部充填済みの脚部である。

38-10は低脚壺の脚部、38-11は脚付鉢の脚部である。

38-12・13は高壺の脚部である。38-13は壺底部を充填して製作されている。

39-1・2は鼓型器台である。39-1は端部に平坦面をつくり、凹みをつけている。

39-3～8は単純口縁の甕である。39-3は口縁部が立ち上がるが、他5点の口縁部は緩やかに外反するものである。

土師器（古代・中世）

40-1・2はカワラケである。底部に回転糸切り痕が残る。

40-3は古代の無高台壺である。

40-4～6は皿である。40-5・6は古代末期のものである。

40-7・8は柱状高台付皿である。40-7は国府編年第9-10型式のもので、古代末期から中世にあたる。

40-9は中世の鍋である。内外面にハケメが施され、外面にはススが付着している。

40-10は小壺である。頸部から口縁部まで緩やかに外反し、外面に赤彩がみられる。

土製品

41-1は焼土塊である。片面は還元により青灰色を呈する。

42-1～3は甕の把手である。42-3は他の2点に比べて把手先端部分が上に曲げ伸ばされている。

42-4は甕型土器の把手である。42-5は土製支脚の脚部である。

42-6・7は移動式カマドで、42-6は庇、42-7はヒレである。

42-8～20は土錐である。これらは古墳時代の包含層より上層から出土したものである。42-8～19は古代以降の管状土錐で、42-20は近世の土錐である。扁平状の土師質土器の中央に溝を有し、3個

の円孔が穿たれる。穴の位置から、欠損部にもう 1 孔あけられていたことが想定される。この土錘の類例として、中央に 1 条の凹線を有し、その両側に計 4 個の円孔を穿つ土錘が兵庫県の兵庫津遺跡から出土している。

須恵器

43-1～9 は壺蓋である。43-1～7 は口縁端部に段を持つ。43-1～6 は大谷編年 2 期、43-7～9 は 3 期にあたる。

43-10～18 は壺身である。口縁の立ち上がりが高いものが多く、43-10 は大谷編年 2 期、43-11～17 は 3 期のものである。43-18 は大谷編年 5 期にあたる。口縁の立ち上がりが低く、体部は直線的に立ち上がる。

43-19～22 は高壺である。43-19 は大谷編年 3 期の高壺壺部で、底部には三方の台形透かしの痕が残る。43-20～22 は脚部で、43-20 は大谷編年 2 期、43-22 は大谷編年 2 期から 3 期に該当する。43-21 は三方に円形透かしがあり、脚端部の形も特徴的な搬入品である。TK208～23 期のもので、大谷編年 1 期古相から中相に併行する。

43-23 は直口壺の口縁部である。古墳時代後期のものである。

44-1～3 は壺または甕の口縁部である。いずれも大型品であり、波状文が確認できる。44-2 は口縁端部に平坦面をつくりており、44-3 は口縁端部を上方に引き伸ばしている。

44-4 は腹である。大谷編年 1 期から 2 期のもので、胴部と頸部に刺突文が施されている。

44-5 は中世前期の東播系の鉢である。底部が欠損しており体部の形態は不明であるが、体部と口縁端面はほぼ直角をなし、端部は丸みを帯びている。在地で生産されたもので、外面に重ね焼きの痕である黒斑がみられる。

陶磁器

45-1 は 14～16 世紀の中国青磁陵花皿で、45-2・3 は中国青磁碗である。45-3 には細線の線描蓮弁文が施され、剣頭は蓮弁としての単位を意識している部分と意識していない部分が見られる。16 世紀頃のものであり、断面に漆が付着していることから漆継ぎがされていたことが分かる。

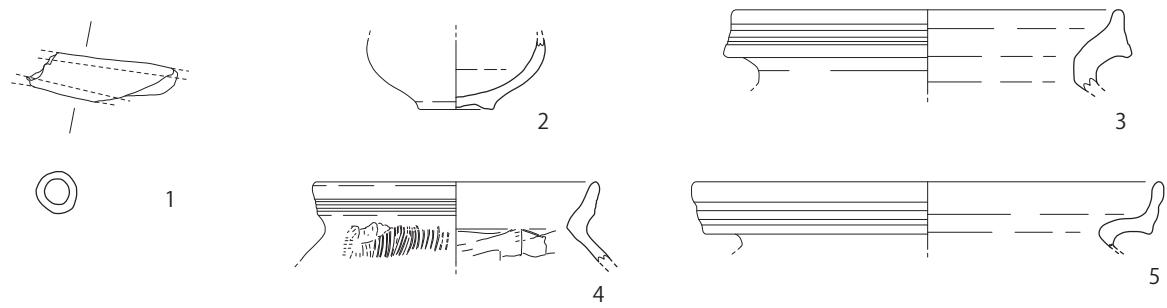
45-4 は 15～16 世紀の朝鮮王朝陶器である。李朝粉青沙器で、砂目が内面底部に 4 か所、高台に 4 か所認められる。

石製品

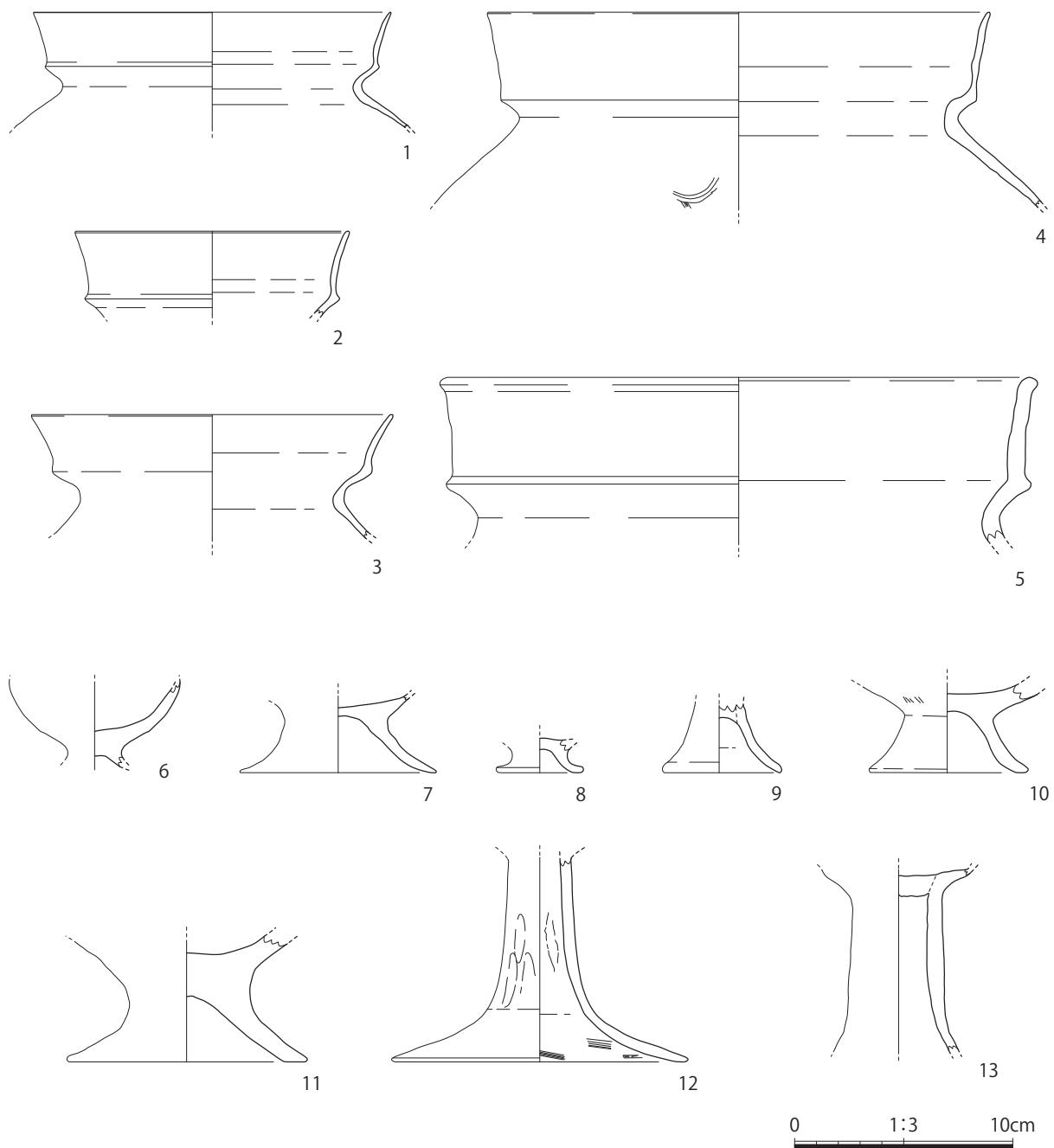
46-1 は石斧で、刃部には使用痕が残る。

46-2 はすり石である。先端部に敲打痕が残る。

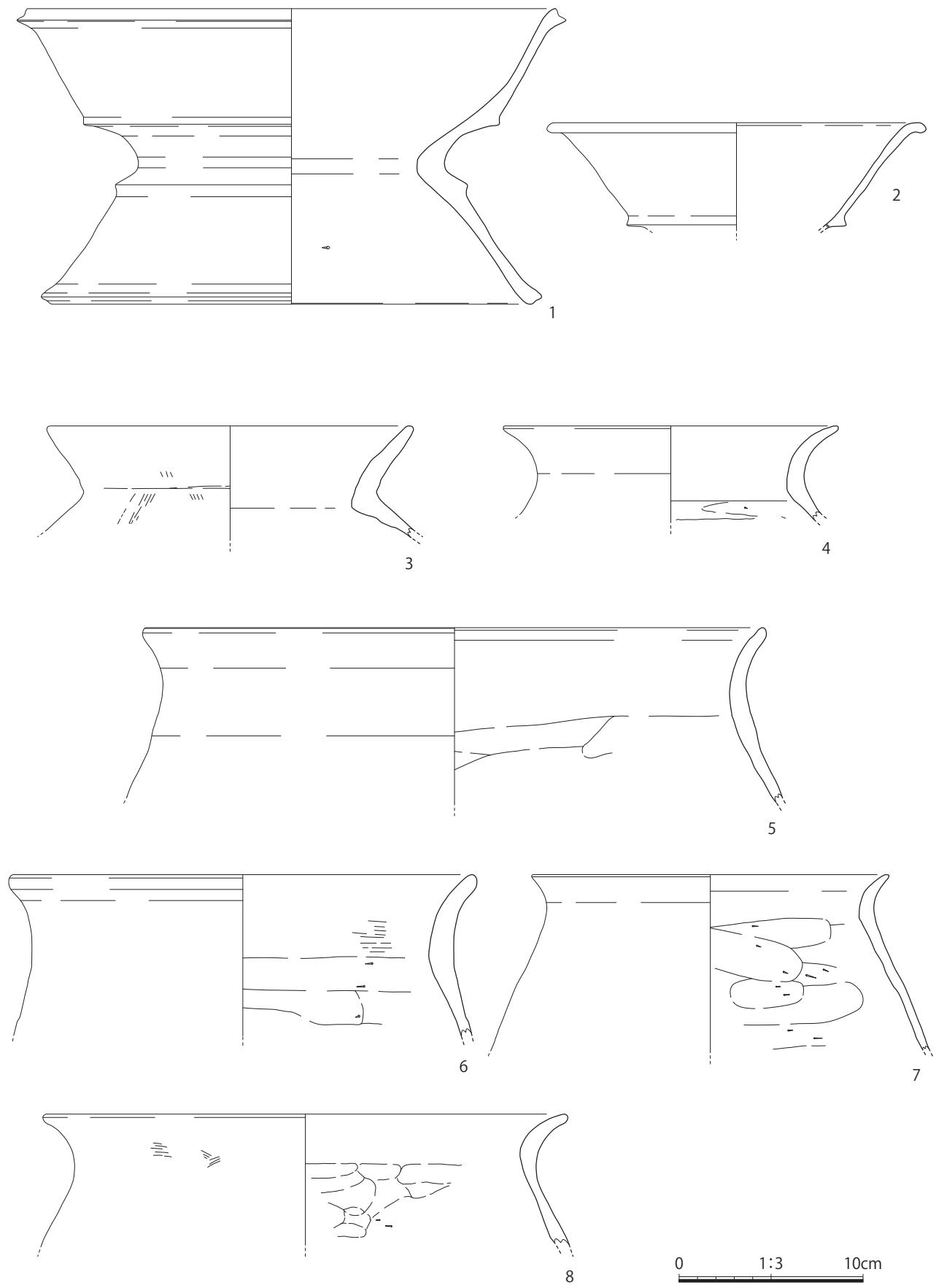
46-3～11 は碧玉である。46-3～4 は勾玉の未製品である。抉りから先に打ち出す製作技法をとつており、大原遺跡から同タイプの勾玉が出土している。46-5～8 は管玉の製作過程で出る剥片である。特に 46-7・8 は断面形が台形になっており、このタイプは安来市に所在する大原遺跡（島根県 1994）で出土した調整剥片の特長（米田 2002）と一致することから、未製品と考えてよい。46-10・11 は管玉の未製品であり、特に 46-10 は古墳時代中期中葉のものである。勝負遺跡で同タイプの細い管玉が出土しており、後期の一般的な幅である 1.2cm を下回る。



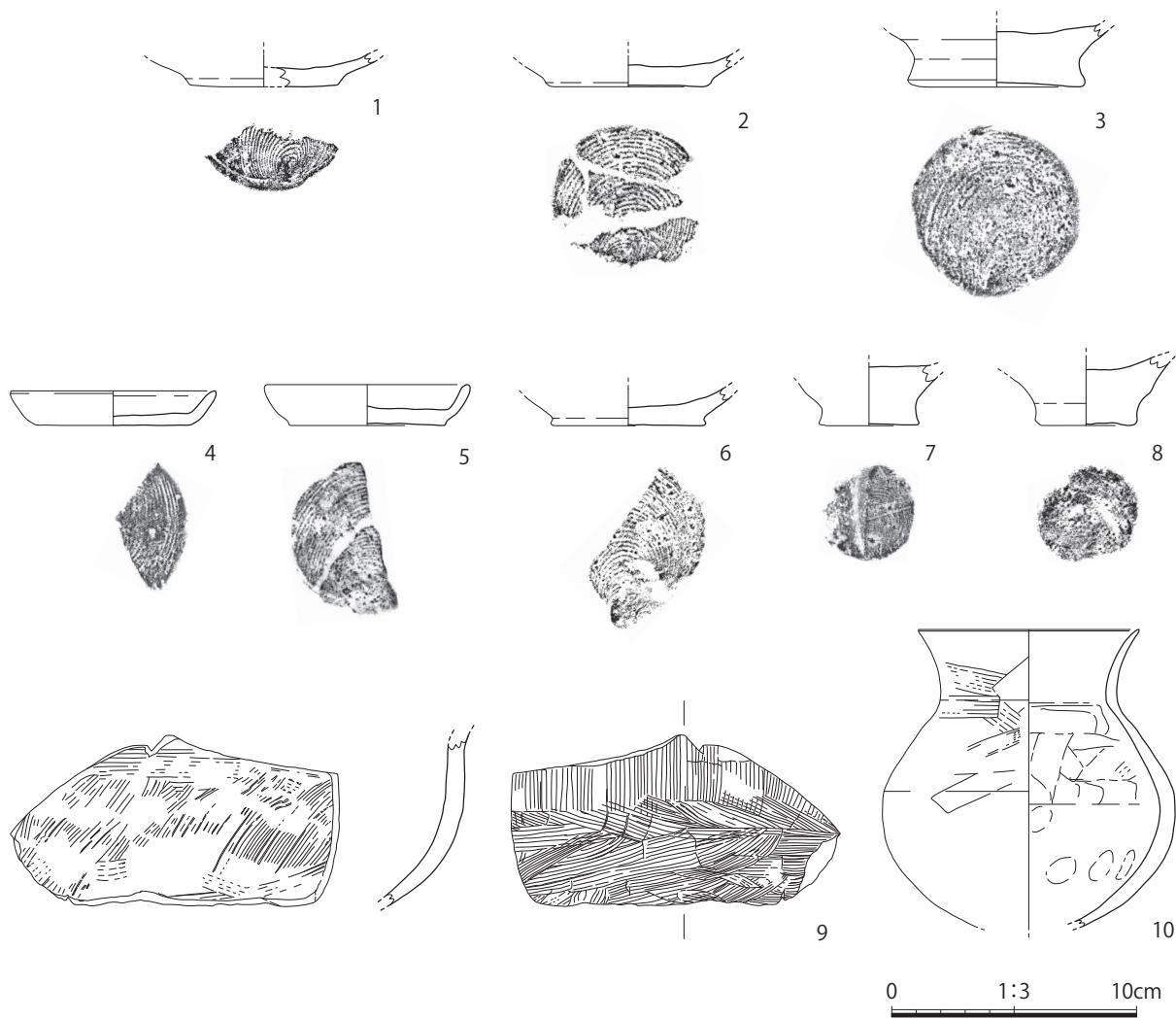
第37図 種前遺跡遺構外出土遺物（弥生土器）実測図



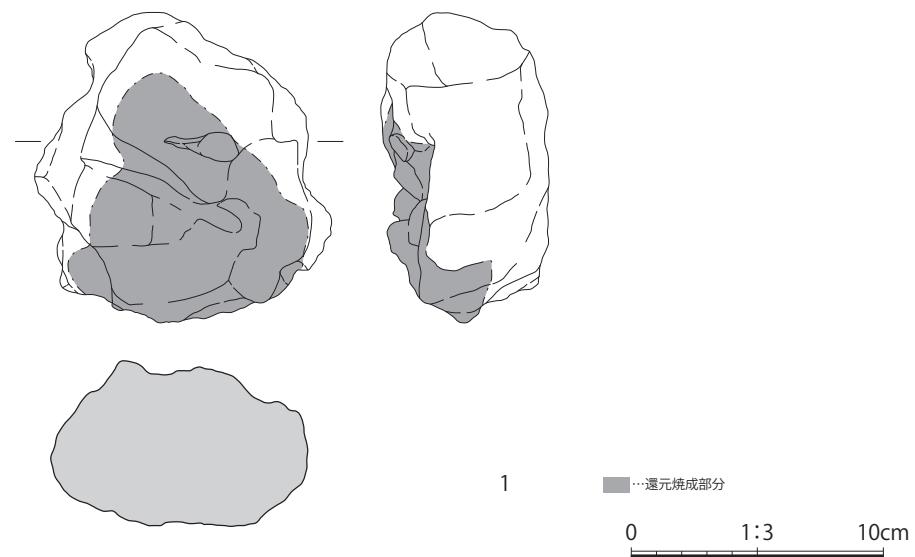
第38図 種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図1



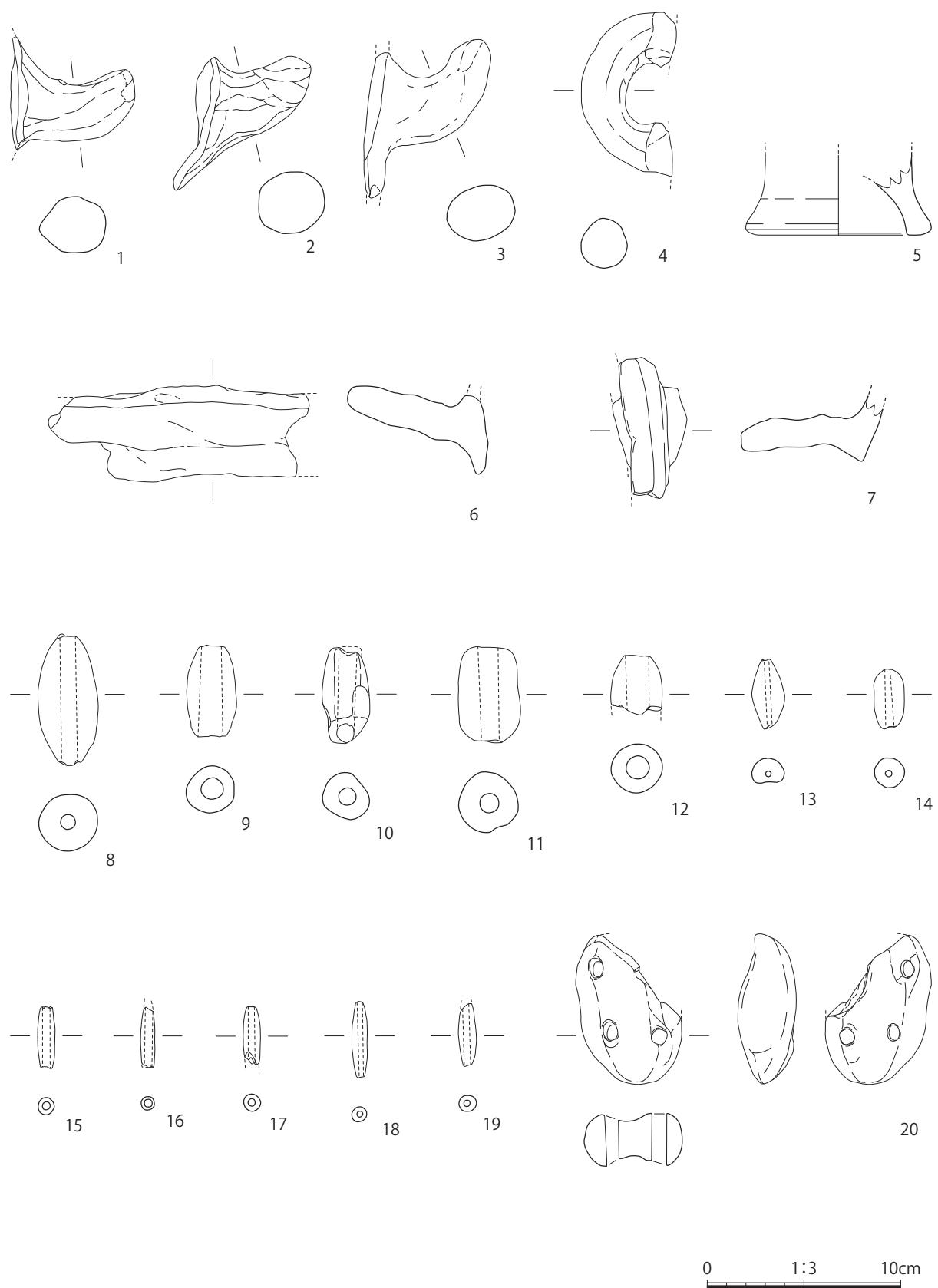
第39図 種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図2



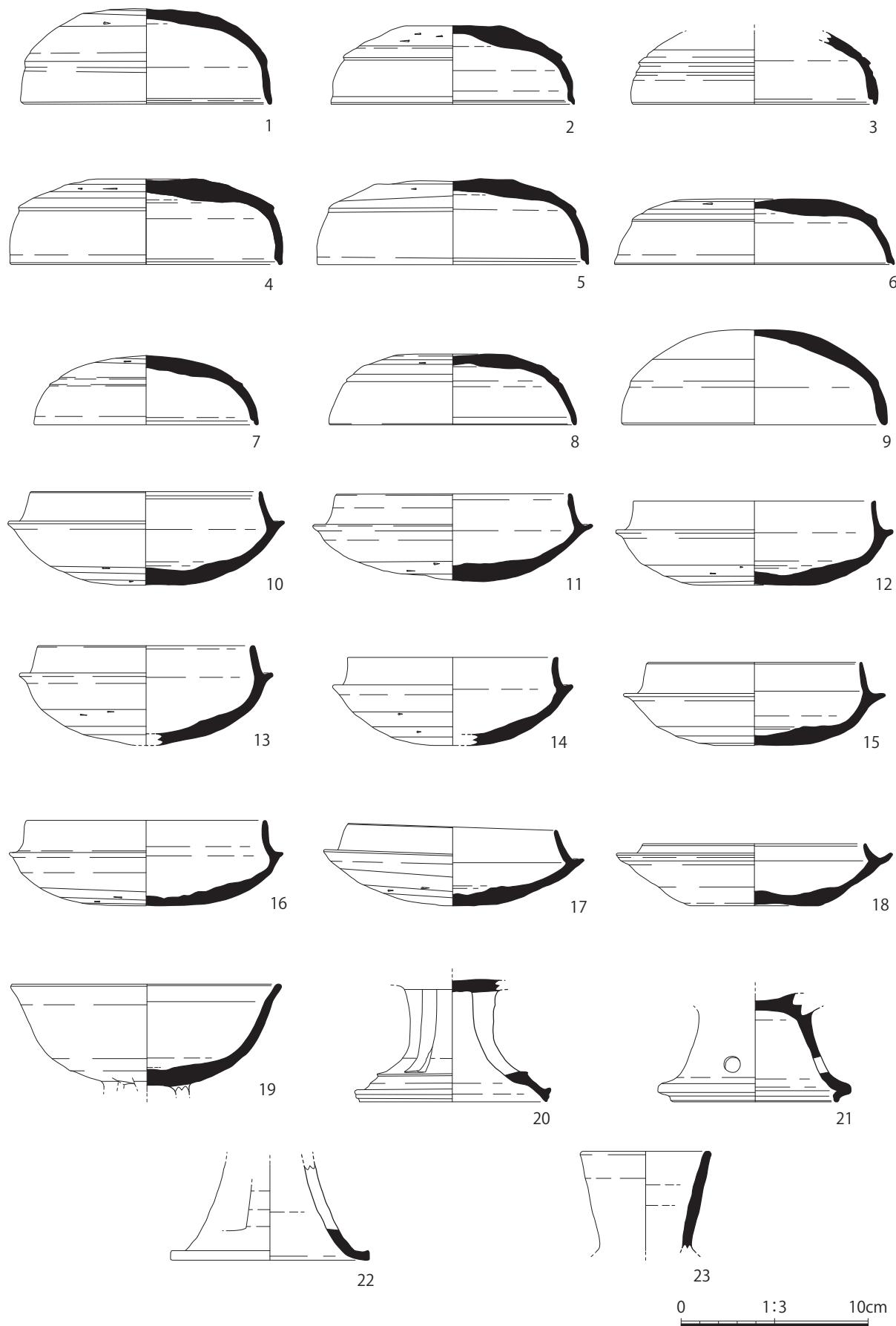
第40図 種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）実測図3



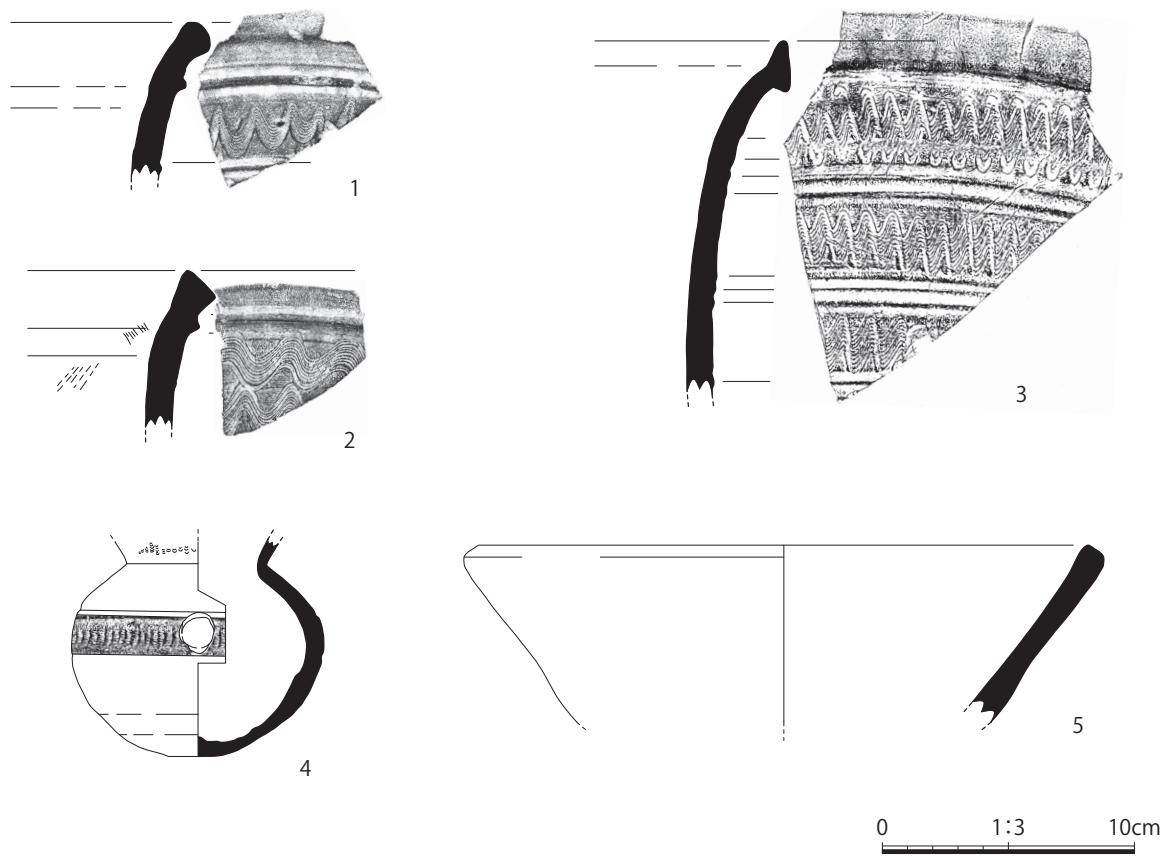
第41図 種前遺跡遺構外出土遺物（焼土塊）実測図



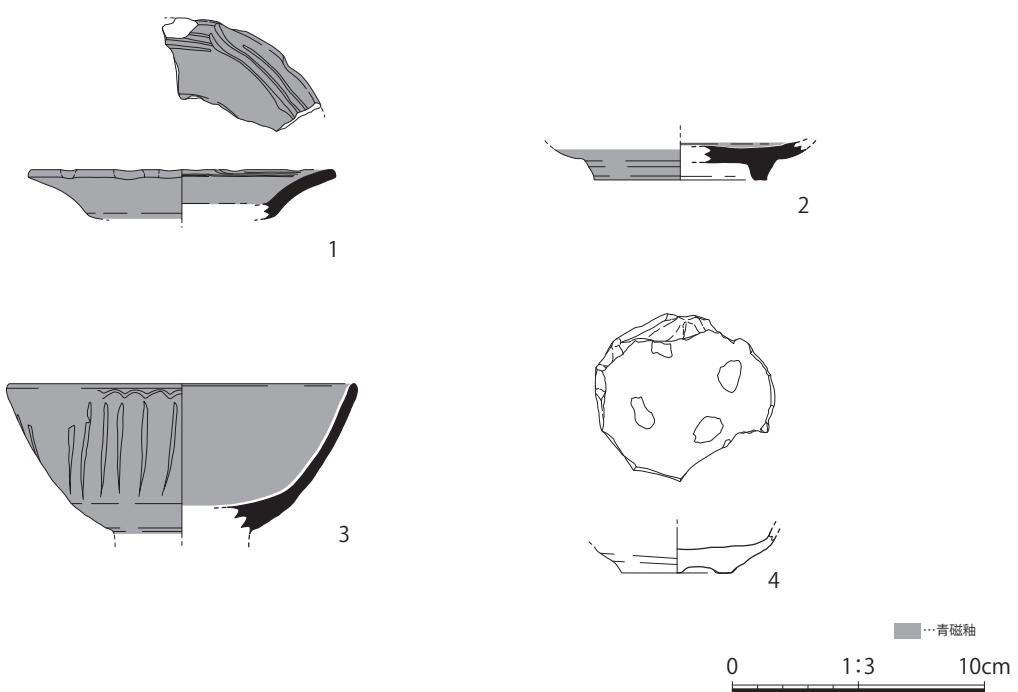
第42図 種前遺跡遺構外出土遺物（土製品）実測図



第43図 種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）実測図1



第44図 種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）実測図2



第45図 種前遺跡遺構外出土遺物（陶磁器）実測図



第46図 種前遺跡遺構外出土遺物（石製品）実測図

第7節 小結

種前遺跡の調査では丘陵裾に広がる緩斜面から竪穴建物跡1棟、掘立柱建物8棟、加工段4段が検出された。また、遺物包含層からは須恵器や土師器のほかに碧玉製玉類未製品や土錘などの当遺跡を特徴づける遺物も出土している。以下では、調査成果に基づいて時期ごとに様相を整理する。

当地における最古の活動痕跡は弥生時代後期後葉の遺物であり、弥生時代後期後葉から開始されたようである。

古墳時代の遺構としては加工段4と竪穴建物跡があげられる。竪穴建物では壁際溝内から小谷4式の土師器高坏、壁際溝埋土上面からは大東2式の土師器高坏や甕が出土しており、おおよそ古墳時代前期後葉頃に機能していたものと考えられる。これにつづく古墳時代中期の遺構は検出されていないが、b-4、5 グリッドの包含層を中心に出土した碧玉の中には、中期中葉頃と考えられる碧玉製管玉の未製品が含まれている。遺物はごくわずかで、調査区西側からは大谷編年第1型式古相（5世紀中葉）併行期の須恵器高坏も出土しており、このあたりの遺物が玉作が行われていた時期のものであると考えられる。古墳時代後期については、包含層からこの時期に位置づけられる須恵器坏が多く出土しており、ある程度活発な人的活動が行われていた可能性が考えられる。ただし、遺構はほとんど残っておらず、この時期の遺物を含む柱穴をわずかに検出したのみである。当遺跡の上方に位置する崎田遺跡では当該期の竪穴建物が検出されており、これに関連する遺物である可能性も考慮される。

古代については遺構を検出しておらず、遺物もごくわずかであることから、この時期には人的活動が希薄であったと考えられる。

中近世の遺構としては調査区東側で加工段3段（加工段1～3）を検出している。このうち、加工段2では溝（SD20）を伴う掘立柱建物（SB04）を検出した。遺構の残存状況が悪いため建物の復元には至らないものの、2間以上の柱穴列を検出している。SD22からは近世の京都系土師器皿が出土しており、これは自然流路ともとれるものの、加工段2の時期はおおよそ中近世に位置づけられよう。加工段3では掘立柱建物を5棟検出している。いずれも建物の復元には至っていないが、SB05・06とSB08・09はそれぞれ主軸方向が揃っており、複数回にわたる建替えが行われたものと考える。加工段4では溝と柱穴を検出しているが、建物の復元には至っていない。加工段3と加工段4では明確に遺構に伴う遺物が出土していないが、加工段3については床面付近から中近世の陶磁器が数点出土しており、この時期に機能していた可能性がある。

ここで注目される遺物として、碧玉製玉類未製品や土錘があげられる。

玉類未製品は古墳時代の包含層から出土しており、出土点数は剥片を含めると42点、総重量は619.52 gであった。このうちの6点は、管玉未製品ないし管玉製作過程で出る剥片である。時期が明らかな遺物として、古墳時代中期中葉の管玉未製品が1点出土している。幅1.15cmを測る細いタイプのものであり、勝負遺跡にみられる管玉とよく似る。また、勾玉未製品が2点出土しており、これについては腹部の抉りを先に打ち出す技法により製作されている。島根県安来市の大原遺跡で確認された古墳時代中期の玉作工房では、腹部の抉りを調整剥離の段階で作出すするタイプの勾玉が多く出土しており、種前遺跡出土の勾玉未製品は大原遺跡出土のものと同タイプのものであるといえる。

土錘は近現代の堆積土（第20図64～80、83層）と中近世の包含層（第20図49～55、58層）、加工段1から出土している。管状土錘15点のほかに、扁平状の土師質土器に1条の浅い溝と4つの円孔が穿たれる土錘が1点出土した。管状土錘については、中海周辺における類例との比較から、古代以降のものであると判断できる。扁平状の土錘については、兵庫県神戸市の兵庫津遺跡（神戸市2010）で検出した近世の遺構面から同型の土錘が出土している。このことから、種前遺跡出土の土錘は古代以降のものとした。

以上、本調査区からは古墳時代前期後葉の竪穴建物跡1棟、その東側にて古墳時代の加工段1段と中近世の掘立柱建物跡8棟を伴う加工段3段を検出した。また、調査区西端の自然流路からは杭列が検出されており、流路内からは中世の陶磁器が出土した。今回の調査により、種前遺跡は周辺に広がる複合遺跡であることが確認できた。また、当地では古墳時代の生業として玉生産、古代以降の生業として漁労が行われてきたことが分かった。

種前遺跡 遺物観察表

土器

※法量のカッコ書きの数値は、復元または残存法量を示す。

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
22-1	SI01	土師器	高坏 坏部	(20.0)	—	(4.2)	不明	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 焼成 不良	橙色	
22-2	SI01	土師器	高坏 坏部	(17.2)	—	(5.1)	外 ミガキ 内 不明	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	外 にぶい橙色 内 浅黄橙色	古墳時代中期 小谷4式
22-3	SI01	土師器	高坏 脚部	—	10.1	(6.7)	外 不明 内 絞り痕	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	古墳時代中期
22-4	SI01	土師器	布留甕	15.0	—	(10.0)	外 ハケメ、ヨコナデ 内 ケズリ、ケズリ気味のハケメ後ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黒褐色	単純口縁 古墳時代中期
27-1	SD22	土師器	皿	11.0	5.0	2.1	手づくね	胎土 密 焼成 良好	灰白～淡黄色	京都系 近世
27-2	SK23	土師器	甕	(13.0)	—	(5.8)	外 ヨコナデ 内 ケズリ、ヨコナデ	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 良好	灰白～浅黄橙色	草田6期 古墳時代初頭
30-1	P25	陶器	朝鮮舟徳利	—	—	(7.5)	外 褐釉 内 同心円当て具痕	胎土 密 焼成 不良	釉 浅黄色 灰色	16世紀代
32-1	SK38	土師器	鼓形器台	—	—	(4.6)	外 不明 内 ケズリ	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 不良	橙色	
32-2	SD37	土師器	鼓型器台	—	—	(5.4)	外 不明 内 ケズリ	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 不良	灰白～黄橙色	古墳時代前半
32-3	SK38	土師器	平底鉢	(16.2)	—	(13.1)	外 ヨコナデ、列点文 内 ハケメ 内 ヨコナデ、ケズリ	胎土 1mm程度の砂粒を多く含む 焼成 良好	黄褐色	草田6期
36-1	NR11	須恵器	提瓶	—	—	(16.7)	外 カキメ 内 回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	灰白色	火ぶくれあり 外内自然釉付着 別個体の破片(蓋)溶着
36-3	NR11	土師器	皿	—	(5.2)	(1.1)	外内 ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm前後の砂粒を少し含む 焼成 不良	橙～灰白色	灯明皿に使った可能性あり
36-4	NR11	中国青磁	碗	—	(5.2)	(2.6)	外内 青磁釉 片切彫の鎬蓮弁文	胎土 密 焼成 良好	オリーブ灰色	14～15世紀 高台内は無釉
36-5	NR11	須恵器	低脚無蓋高坏 坏部	—	—	(5.5)	外 波状文、回転ナデ 内 回転ヘラケズリ 内 回転ナデ 内 ヨコナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	灰白～灰色	
37-1	第33回 畦26層	土師器	注口土器 注口	長さ(5.8)/幅1.7			不明	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	弥生時代後期
37-2	遺構外 b-5	土師器	小型壺	—	(3.0)	(2.8)	ナデ、かすかにハケメ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	外 黄褐色 内 黑褐色	手づくね 内面に茶色い付着物あり (漆か)
37-3	遺構外 b-4	土師器	甕 口縁部	(15.4)	—	(3.2)	外 沈線4条 内 ヨコナデ 内 ヨコナデ	胎土 2mm以下の砂粒含む 焼成 良好	黄褐色	弥生時代後期前葉
37-4	遺構外 b-4	土師器	甕 口縁部	(11.2)	—	(13.2)	外 沈線3条、ハケメ 内 ヨコナデ 内 ヨコナデ 内 ヘラケズリ後ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 良好	外 にぶい黄褐～黒色 内 浅黄橙～黒色	弥生時代後期前葉
37-5	遺構外 b-5	土師器	甕 口縁部	(18.4)	—	(2.6)	外 沈線2条 内 不明	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 不良	浅黄橙色	弥生時代後期前葉
38-1	遺構外 b-5	土師器	甕	(16.4)	—	(5.3)	不明	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	弥生時代終末 複合口縁
38-2	遺構外 b-5	土師器	甕	(12.6)	—	(3.8)	ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	外 黄褐色 内 黄橙色	弥生時代終末 複合口縁
38-3	遺構外 c-3	土師器	甕	(16.6)	—	(5.7)	ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	外 橙色 内 黄橙色	弥生時代終末 複合口縁
38-4	遺構外 c-3	土師器	甕	(23.0)	—	(8.9)	外 波状文、ハケメ 内 不明	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	浅黄橙色	弥生時代終末 複合口縁
38-5	遺構外 c-3	土師器	甕	(26.4)	—	(7.5)	ヨコナデ	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 不良	外 黒～灰白色 内 灰白色	古墳時代前期 複合口縁
38-6	遺構外 b-5	土師器	低脚坏	(7.8)	2.6	4.0	不明	胎土 細かい砂粒を多く含む 焼成 不良	外 灰白～橙色 内 灰白色	内面に付着物あり 古墳時代前期

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
38-7	遺構外c-3	土師器	低脚環脚部	—	9.0	(3.5)	不明	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好	灰白色	
38-8	遺構外c-3	土師器	低脚環脚部	—	(4.0)	(1.6)	不明	胎土 1mm以下の砂粒含む 焼成 普通	橙色～淡黄色	
38-9	遺構外b-4	土師器	器種不明脚部	—	5.3	(3.1)	不明	胎土 1～2mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	赤褐色	
38-10	遺構外b-4	土師器	低脚環脚部	—	7.1	(4.0)	外 ハケメ 内 不明	胎土 2mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	外 淡橙色 内 橙色	
38-11	遺構外c-2	土師器	脚付鉢脚部	—	(10.8)	(4.4)	外 粘土貼り付け後 内 不明	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 良好	にぶい黄橙色	
38-12	遺構外b-5	土師器	高環脚部	—	(13.6)	(9.4)	外 ミガキ 内 紋り痕、ハケメ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	
38-13	遺構外b-5	土師器	高環脚部	—	—	(8.4)	外 ミガキ 内 不明	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	赤褐色	
39-1	遺構外b-5	土師器	鼓形器台	29.8	(27.2)	(16.1)	回転ナデ、ケズリがかすかに見られる	胎土 2mm以下の砂粒を多く含む 焼成 良好	橙～灰白色	
39-2	遺構外b-5	土師器	鼓形器台	(20.0)	—	(5.6)	不明	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	外 橙色 内 浅黄橙色	
39-3	遺構外c-3	土師器	甕	(19.0)	—	(6.1)	外 ハケメ後ヨコナデ 内 押し当て痕あり ヨコナデ	胎土 1mm前後の長石・石英を多く含む 焼成 良好	外 浅黄色 内 灰白～灰黄色	単純口縁
39-4	遺構外b-4	土師器	甕	(18.2)	—	(5.1)	外 不明 内 ケズリ	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好	浅黄橙色	単純口縁
39-5	遺構外b-5	土師器	甕	(33.6)	—	(9.5)	外 ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 1～2mm程度の砂粒を多く含む 焼成 良好	灰白色	単純口縁
39-6	遺構外b-5	土師器	甕	(25.3)	—	(8.8)	外 ナデ 内 ケズリ、ナデ 横方向ハケメ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	単純口縁
39-7	遺構外b-4	土師器	甕	(19.4)	—	(9.5)	外 不明 内 ケズリ、ヨコナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	外 黄橙色 内 灰褐色	単純口縁
39-8	遺構外b-4	土師器	甕	(28.0)	—	(7.1)	外 ハケメ 内 ケズリ	胎土 1mm程度の砂粒を多く含む 焼成 不良	橙～淡橙色	単純口縁
40-1	遺構外b-3	土師器	皿	—	(6.2)	(1.3)	外内 回転ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黒褐色	
40-2	遺構外b-3・4	土師器	皿	—	(6.6)	(1.3)	外内 回転ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	外 橙色 内 浅黄橙～褐灰色	
40-3	第33回甕26層	土師器	無高台坏	—	7.2	(2.5)	外 回転ナデ 内 ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄橙色 一部灰褐色	古代
40-4	第33回甕26層	土師器	皿	(8.3)	(6.2)	1.4	外内 ナデ 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	
40-5	遺構外c-4	土師器	皿	(8.4)	(6.4)	1.7	外内 不明 底部 回転糸切り痕	胎土 微砂粒をわずかに含む 焼成 良好	浅黄橙色	古代末期
40-6	遺構外b-4	土師器	皿	—	(6.0)	(1.5)	外 ヨコナデ 内 不明 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	橙色	古代末期
40-7	遺構外b-3	土師器	柱状高台付皿	—	(4.0)	(2.4)	外 ヨコナデ 内 不明 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 良好	橙色	出雲国府編年第9～10 形式 古代末期～中世
40-8	遺構外b-3	土師器	柱状高台付皿	—	4.0	(2.8)	外内 不明 底部 回転糸切り痕	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 焼成 不良	赤褐色	
40-9	遺構外b-4	土師器	鍋	—	—	(7.4)	外 ハケメ 内 ハケメ後ミガキ	胎土 密 焼成 良好	灰白色	中世 外面に煤付着
40-10	遺構外b-5	土師器	小壺	(9.0)	—	(12.1)	外 ナデ 内 ナデ、ケズリ 指頭圧痕	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色	時期不明 外面に赤彩

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
43-1	遺構外b-3	須恵器	坏蓋	13.4	—	5.3	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良好	灰褐色	大谷編年2期 歪んでいる
43-2	遺構外b-5	須恵器	坏蓋	(13.0)	—	4.2	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を多量 に含む 焼成 良好	灰色	大谷編年2期
43-3	珪24層	須恵器	坏蓋	(13.0)	—	(3.8)	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年2期
43-4	遺構外b-5	須恵器	坏蓋	(14.7)	—	4.6	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	灰褐色	大谷編年2期
43-5	遺構外b-5	須恵器	坏蓋	14.5	—	4.8	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年2期
43-6	遺構外b-4.5	須恵器	坏蓋	(15.0)	—	3.5	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年2期
43-7	遺構外b-5	須恵器	坏蓋	(12.0)	—	3.7	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	灰色	大谷編年3期
43-8	遺構外b-4	須恵器	坏蓋	(13.2)	—	3.8	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年3期
43-9	遺構外b-4	須恵器	坏蓋	(14.2)	—	5.1	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 密 焼成 不良	黄灰色	大谷編年3期
43-10	遺構外b-4	須恵器	坏身	12.3	3.6	5.0	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	灰褐~灰色	大谷編年2期 受部径 14.8cm
43-11	遺構外b-5	須恵器	坏身	(13.8)	3.5	4.7	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 不良	灰色	大谷編年3期 受部径 (14.9cm) 歪んでいる
43-12	第33回珪25層	須恵器	坏身	(12.9)	(6.6)	4.5	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年3期 受部径 (14.8cm)
43-13	第33回珪26層	須恵器	坏身	(11.6)	(3.6)	5.3	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年3期 受部径 (13.6cm)
43-14	遺構外c-3	須恵器	坏身	(11.2)	(2.8)	4.7	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好	外 灰色 内 灰白色	大谷編年3期 受部径 (12.8cm)
43-15	遺構外b-4	須恵器	坏身	11.6	4.4	4.0	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ ヨコナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年3期 受部径 14.0cm
43-16	遺構外b-5	須恵器	坏身	(12.8)	5.0	4.6	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 不良	灰~灰白色	大谷編年3期 受部径 (14.6cm)
43-17	遺構外b-5	須恵器	坏身	11.2	5.4	4.4	外回転ナデ 回転ヘラケズリ 内回転ナデ ヨコナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年3期 受部径 13.9cm 蓋端部溶着
43-18	遺構外b-5	須恵器	坏身	(11.9)	6.8	3.3	外回転ナデ ヘラオコシ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年5期 受部径 (14.7cm)
43-19	遺構外b-3	須恵器	高坏 坏部	14.5	—	(5.8)	回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰~灰褐色	大谷編年3期 三方スカシ(台形)
43-20	不明	須恵器	高坏 脚部	—	(10.0)	(6.5)	回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年2期 三方スカシ(台形) めずらしい
43-21	遺構外b-5	須恵器	高坏 脚部	—	8.8	(5.8)	外回転ナデ 内回転ナデ、ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	灰色	大谷編年1期古相~中相 三方スカシ(円形) 搬入品
43-22	遺構外c-3	須恵器	高坏 脚部	—	(10.6)	(5.1)	回転ナデ	胎土 密 焼成 良好	灰色	大谷編年2~3期 三方スカシ
43-23	遺構外b-6	須恵器	直口壺 口縁部	(6.8)	—	(5.3)	回転ナデ	胎土 密 焼成 良好	灰色	古墳時代後期
44-1	遺構外c-3	須恵器	壺か甕 口縁部	—	—	(6.1)	外波状文、回転ナデ 内回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む やや軟	灰白色	
44-2	遺構外c-3	須恵器	壺か甕 口縁部	—	—	(6.2)	外波状文、回転ナデ 内ハケメ、回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 良好	外 灰色 内 灰白色	

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量(cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法・文様	胎土・焼成		
44-3	遺構外b-5	須恵器	壺か甕口縁部	—	—	(14.0)	外 内 波状文、回転ナデ 回転ナデ	胎土 焼成 1mm程度の砂粒を含む 良好	灰色	大型
44-4	遺構外b-4	須恵器	甕	—	2.1	(7.9)	外 内 手持ちケズリ 凹線、刺突文 回転ナデ	胎土 焼成 1mm以下砂粒を含む 良好	灰色	大谷編年1～2期
44-5	遺構外b-4	須恵器(東播系)	鉢	(25.4)	—	(6.6)	不明	胎土 焼成 密 不良	灰～灰白色	中世前期 焼成が悪く軟質
45-1	遺構外b-5	中国青磁	陵花皿	(12.2)	—	(1.9)	外内 青磁釉	胎土 焼成 密 不良	にぶい黄色	二次焼成(火災)か 14～16世紀
45-2	遺構外b-3	中国青磁	碗	—	(6.8)	(1.4)	外内 青磁釉 高台内のみ無釉	胎土 焼成 密 良好	明オリーブ灰色	14～16世紀 高台内は無釉
45-3	遺構外b-5	中国青磁	碗	(13.7)	—	(5.9)	外内 青磁釉 外 線描蓮弁文	胎土 焼成 密 良好	オリーブ灰色	16世紀頃
45-4	遺構外b-5	朝鮮王朝陶器	皿	—	(4.4)	(1.6)	外内 施釉 内面と高台に砂目4箇所	胎土 焼成 密 良好	外 内 灰白～ オリーブ褐色 灰色	15～16世紀 李朝粉青沙器

石器・石製品

遺物番号	遺構名	種類	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
27-3	SK23	石核	碧玉	4.0	6.0	3.5	102.0	
46-1	遺構外b-3	石斧	不明	10.5	3.0	2.0	88.7	使用痕あり
46-2	遺構外c-4	すり石	不明	(6.6)	6.3	4.8	312.8	敲打痕あり
46-3	遺構外b-3	勾玉の未成品	碧玉	5.8	4.3	2.0	56.1	
46-4	遺構外c-3	勾玉の未成品	碧玉	4.7	2.5	0.9	18.8	
46-5	遺構外b-4	管玉の過程	碧玉	6.3	2.7	0.7	18.6	
46-6	遺構外b-4	管玉の過程	碧玉	2.2	3.7	1.4	9.0	
46-7	第33号 竪1～5層	管玉の過程	碧玉	3.0	4.3	1.6	19.6	
46-8	遺構外b-5	管玉の過程	碧玉	2.4	1.4	1.3	4.0	
46-9	不明	剥片	碧玉	6.1	6.6	2.3	89.3	大型の剥片
46-10	不明	管玉の未成品	碧玉	2.9	1.15	6.5	2.1	両端部破損 細いタイプの管玉。古墳時代中期中葉
46-11	遺構外c-3	管玉の未成品	碧玉	1.4	0.8	4.5	0.9	

木製品

遺物番号	遺構名	種類	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
36-2	NR11	椀	(9.6)	(6.6)	(4.6)	内外面に黒漆、時代不明

銭貨

遺物番号	調査区	銭種	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	備考
36-6	NR11	□□元寶	23.9	6.8 × 6.4	1.1	3.52	100	

土製品

遺物番号	遺構名	器種・部位	法量		調整・文様の特徴		色調	備考
			大きさ(cm)	重量(g)	調整・手法・文様	胎土・焼成		
34-1	SK10	土錘	長さ4.2/径1.0	3.30		胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	赤色	
34-2	SK10	土錘	長さ4.4/径0.8	2.49		胎土 細かい砂粒を含む 焼成 普通	赤褐色	
36-7	NR11	土錘	長さ3.6/径0.9	2.14		胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 普通	橙色	
41-1	遺構外b-5	焼土塊	12.3×11.7/厚さ6.7	—			—	焼けている
42-1	遺構外b-4 地山上	甑把手	幅(6.0)/高さ(5.8)/ 厚さ2.9	—	ケズリ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色～黄橙色	
42-2	遺構外b-4	甑把手	長さ(7.1)/幅(5.8)/ 厚さ3.4	—	ケズリ	胎土 1mm程度の砂粒を多く 含む 焼成 普通	黄橙色	
42-3	遺構外b-5	甑把手	長さ6.1/厚さ3.5/ 高さ(7.5)	—	不明	胎土 1～2mm程度の砂粒を 含む 焼成 良好	橙色	
42-4	遺構外c-2	甑型土器把手	高さ(8.5)/幅(5.0)/ 厚さ2.4	—	不明	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 普通	淡黄色	
42-5	遺構外b-5	土製支脚	底径(9.7)/器高(4.1)	—	ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好	黄褐色～黄橙色	
42-6	遺構外b-4	竈庇	長さ7.0/高さ5.0	—	ナデ	胎土 1mm程度の砂粒を多く 含む 焼成 良好	黄褐色	焚口上部の庇部分 下面に被熱による変色 あり
42-7	遺構外b-4	竈ヒレ	長さ(7.3)/幅(3.8)/ 庇厚1.5	—	不明	胎土 1mm以下の砂粒を多く 含む 焼成 普通	黄褐色	焚口の側面部
42-8	遺構外b-4	土錘	長さ4.8/径3.1	55.78		胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	灰白色	
42-9	遺構外b-5	土錘	長さ4.7/径2.5	22.06		胎土 1～2mm程度の砂粒を含む 焼成 普通	橙色	
42-10	遺構外b-4	土錘	長さ(5.0)/径2.5	19.57		胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 普通	橙色	
42-11	遺構外b-4	土錘	長さ5.0/径3.0	50.42		胎土 細かい砂粒を含む 焼成 普通	明赤褐色	
42-12	遺構外b-5	土錘	長さ(3.1)/径2.8	14.69		胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	赤褐色	
42-13	遺構外b-4	土錘	長さ3.7/径1.7	6.66		胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	明褐色	
42-14	遺構外b-4	土錘	長さ3.2/径1.6	5.98		胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	橙色	
42-15	遺構外b-4	土錘	長さ3.2/径0.9	2.21		胎土 細かい砂粒を含む 焼成 普通	にぶい黄橙色	
42-16	遺構外b-4	土錘	長さ(3.1)/径0.8	1.10		胎土 細かい砂粒を含む 焼成 普通	橙色	
42-17	遺構外b-4	土錘	長さ(3.0)/径0.9	1.59		胎土 細かい砂粒を少量含む 焼成 普通	明赤褐色	
42-18	遺構外b-4	土錘	長さ4.0/径0.8	2.03		胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	赤褐色	
42-19	遺構外b-4	土錘	長さ(3.3)/径0.9	1.95		胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	赤褐色	
42-20	遺構外b-6	土錘	長さ(7.7)/幅(5.5)/厚さ3.0	81.60		胎土 3mm以下の砂粒少量含む 焼成 普通	橙色	円孔3つあり 近世

第5章 総括

ここまで述べてきたとおり、都市計画道路揖屋馬潟線整備事業予定地内において崎田遺跡・種前遺跡の調査を行い、密度に粗密はあるものの、おもに古墳時代から中近世までの遺構・遺物を確認した。崎田遺跡、種前遺跡の遺構について、それぞれの時期をまとめると以下の通りとなる（第47図）。

さて、今回の調査を行った遺跡が所在する丘陵は、『出雲国風土記』において「飫宇の入海」とも称される中海の沿岸部に位置する。当丘陵の西側には古代出雲の中心地たる意宇平野が広がっていることからも分かるように、当丘陵周辺には各時代における重要な遺跡が多く知られている。以下では、こうした状況を踏まえて、当丘陵の利用状況について時代ごとに様相を整理したい。

第1節 遺構と遺物の様相

（1）弥生時代後葉から古墳時代前期中葉

当丘陵において人の活動痕跡が認められ始めるのは弥生時代後葉である。遺構は確認されていないものの、丘陵裾部の種前遺跡において包含層や加工段に伴う溝から当該期の土器が一定量出土している。周辺では渋山池遺跡、原ノ前遺跡（島根県 1997）、勝負遺跡（島根県 1998）などで集落が形成されているほか、大木権現山古墳群において四隅突出型墳丘墓の可能性がある墳墓が築造されるなど、非常に活発な人的活動が行われていたようである。当丘陵もこうした人々の活動範囲内に含まれていたと考えられるが、そこまで顕著な活動が行われていたわけではなかったようである。古墳時代に入っても前期中葉にいたるまで遺構は確認されていない。種前遺跡において前期前葉の遺物が少量出土するのみであり、弥生時代後葉の様相がそのまま続いているものと考えられる。

		弥生時代	古墳時代			古代	中世	近世
			前期	中期	後期			
崎田遺跡	SI01			■				
	SB03				■			
	SB04				■			
	五輪塔					■■■		
種前遺跡	SI01		■					
	加工段1					■■■■■		
	加工段2・3					■■■■■		
	加工段4	■■■■						
	SX04					■■■■■		
	SB04		■■■					
	SB05					■■■		
	SD21					■■■■■		
	碧玉		■					
	土錐			■■■■■				

第47図 遺構変遷図

(2) 古墳時代前期後葉から中期前葉

この状況に変化が認められるのが古墳時代前期後葉である。種前遺跡の標高4m地点では竪穴建物(SI01)がつくられ、壁際溝からは小谷4式から大東2式までの遺物が出土している。ただし、これ以外の遺構・遺物はそれほど多くなく、丘陵裾部でのみ確認されている。

(3) 古墳時代中期中葉から後期初頭

古墳時代中期中葉の遺物として、種前遺跡包含層から出土した玉作関連資料がある。この時期、周辺地域では勝負遺跡や原ノ前遺跡、四ツ廻II遺跡(島根県 1996)などで玉作工房が検出されており、それらの分析から丘陵ごとの小集落内において小規模かつ短期間で玉作が行われていたと考えられている。種前遺跡もこうした周辺遺跡の様相と矛盾するものではなく、古墳時代中期中葉頃は丘陵裾部において小規模な玉生産を行う集団による生活が営まれていたと考えられる。古墳時代中期中葉から後期初頭にかけての遺構は検出されておらず、遺物も玉類のほかは僅少である。玉作工房が衰退した後の当丘陵での人的活動は極めて希薄であったといえよう。後期前半になると遺物量がやや増加する傾向にあるが、依然として遺構は検出されていない。周辺遺跡においても原ノ前遺跡や四ツ廻II遺跡、渋山池遺跡においてこの時期に遺構が激減することが指摘されており、当丘陵だけでなく周辺一帯で人的活動が低調となっていたようである。

(4) 古墳時代後期中葉から終末期

後期中葉から終末期になると再び遺物量が増加し、崎田遺跡において丘陵尾根上に竪穴建物(SI01)が出現する。この建物は狭隘な尾根上鞍部に1基のみ築造されており、内部には炉をもたない。住居とは別の施設として使用された可能性も否定できないが、いずれにしてもその性格については明らかでない。明確にこの時期に位置づけられる遺構はこの竪穴建物以外には検出されていないが、遺物の出土量はこの時期が最も多く、丘陵全体から出土している。周辺遺跡の様相をみてみると、この時期には勝負遺跡や渋山池遺跡などで集落が再び機能し始め、やや遅れて横穴墓の築造も始まることが知られている。当丘陵では横穴墓のような墓域や明確な居住域は確認されていないものの、周辺一帯と同様に人的活動が非常に活発化した時期であったと評価できよう。

(5) 古代

古代には崎田遺跡の丘陵上部斜面に掘立柱建物が建てられる。調査区西側で3棟、調査区中央で2棟の掘立柱建物跡を検出しており、それぞれで建て替えが行われた様子が確認できる。丘陵全体でみるとこの時期の遺物はさほど多くないものの、国府編年第2型式と第4型式の遺物が出土しており、8世紀の丘陵上部にも人的活動が認められた。ここでは墨書き器が出土していることから識字者の存在がうかがえる。崎田遺跡から南側約1kmの地点を正西道の推定ルートが通ることから、交通の要衝として栄えたことが想定できよう。古代山陰道の一部とされる道路遺構が見つかっている遺跡は出雲市の杉沢遺跡(出雲市 2016)、松江市の楷松遺跡(松江市 2006)、鳥取県の青谷横木遺跡(鳥取県 2018)などがあげられる。また、出雲国府跡には正西道と枉北道が交差する十字街の推定地が存在し、これらの遺跡の間をつないで正西道が推定されている。松江市域内では正西道推定地として川原宮III遺跡(松江市 2019)、小無田遺跡(島根県 1984)などがあげられる。特に川原宮III遺跡から

は出雲国府第2型式と第3型式の須恵器が出土しており、8世紀中葉には道路として機能していたとされている（是田 2022）。崎田遺跡における活動時期はこれに近い時期を示す。

（6）中近世

中近世になると丘陵上部には頂部に土壙墓があるのみで、生活遺構は確認できなくなる。これとは対照的に、丘陵下部には加工段と掘立柱建物がつくられるようになる。種前遺跡調査区西端では整地や建て替えが複数回行われたようで、幅の狭い3つの加工段に多数の柱穴を検出している。加工段上には8棟の掘立柱建物跡を検出した。ただし、掘立柱建物跡とした柱穴列については柱穴の幅や深さ、底面の標高が揃わないものもあるため、可能性の範疇に留めておきたい。この他、加工段1と竪穴建物跡の上層にて土坑を2基検出しているが、これらの性格については不明である。この時期の遺物として、中国青磁や東播系の鉢のほか、近世の土師器皿が出土した。また、土錘も多く出土しており、当地では漁撈が行われていたことが分かる。

第2節 生業に関する遺物について

（1）玉作関連遺物

種前遺跡出土玉作関連資料の特徴を改めてあげると次のようになろう。

- ①原石は自然面を多く残しており、礫状の転石を利用している。
- ②勾玉の製作過程について、調整剥離によってC字形に成形した後で研磨を施している。
- ③管玉未成品では角柱状剥片分割後の断面台形をなす残片が出土している。

こうした特徴は同時期の花仙山周辺に位置する玉作遺跡では確認されておらず、東出雲町勝負遺跡や原ノ前遺跡、安来市大原遺跡など東出雲地域から安来地域にかけて多く認められる。種前遺跡出土例も当該地域の地域色をほぼ完全に備えた資料として評価できよう。また、この時期の出雲東部では玉作関連遺跡の分布が花仙山周辺のみならず東出雲地域や大東地域、安来地域にまで広がるが、そのほとんどが短期間で衰退することが指摘されている（米田 2002）。当丘陵においても中期中葉以降の遺物は極めて僅少であり、TK208型式併行期の須恵器高坏が1点出土したに過ぎない。これにつづくTK23、47型式併行期の遺物も出土しておらず、当遺跡における玉作りもごく短期間で衰退・廃絶したようである。

（2）土錘

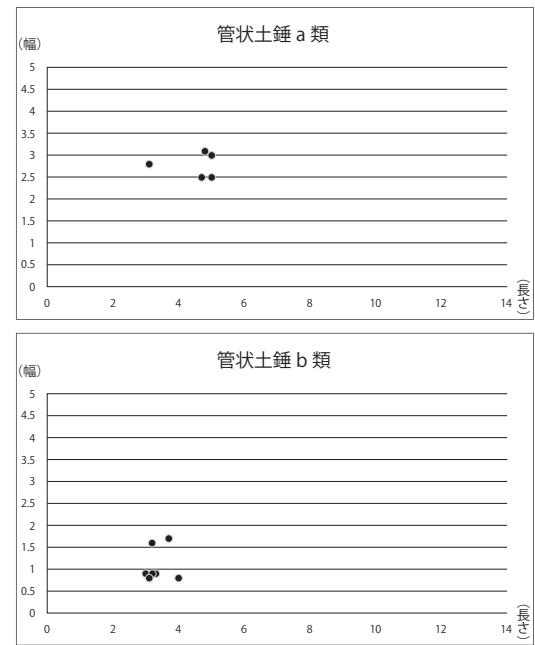
種前遺跡で出土した土錘は総出土数16点のうち15点が管状土錘であった。管状土錘は形態により次の5つに分類されている（和田 1982）。

- a類…縦断面が隅丸長方形ないし橢円形を呈し、横幅が長さの三分の一以上のもの。
- b類…a類を縦長にした形で、長さに対して横幅が三分の一未満のもの。
- c類…縦断面が長方形をなす端正な形を呈するもの。
- d類…縦断面がほとんど正方形に近いもの。
- e類…断面が円形に近い、いわゆる「球形土錘」とよばれるもの。

このうち、種前遺跡において出土したのはa・b類である。長さと幅の関係について、散布図を用

いて宍道湖・中海周辺で見られる類例との比較を行ったところ、a類は上長浜遺跡、b類は宍道町歴史民俗資料館所蔵資料の管状土錘と近い分布を示した（第48図）。このことから、種前遺跡出土の管状土錘は古代以降のものに位置づけられる。

a-6 グリッドからは、中央に浅い溝を有し、溝を挟んで両側に円孔を穿つ扁平状の土錘が出土した。同型の土錘が兵庫県神戸市の兵庫津遺跡で出土している（神戸市 2010）。種前遺跡出土の土錘が有する中央の凹線は浅くへこむ程度であるのに対して、兵庫津遺跡出土の土錘は溝状に刻まれているという違いが見られるものの、円孔の数と穿つ位置が類似する点から、これらを同型の土錘であると判断した。兵庫津遺跡では近世の遺構面から出土したことから、近世の種前遺跡においても漁撈が行われていたことが言えよう。



第48図 土錘の長さ・幅分布図(単位cm)

第3節 結語

2遺跡の調査結果をまとめると、崎田・種前遺跡が位置する丘陵は弥生時代の後期後葉から近世に至るまで、断続的に利用されてきたことが明らかとなった。古墳時代中期には玉作に関わり、古墳時代後期には最盛期を迎え、古代には交通の要衝を担うなどして、近世まで人的活動の舞台となったといえる。今後、当丘陵での発掘調査を重ねれば、丘陵利用の端緒や玉作との関りなど丘陵利用の全体像がつかめるようになるだろう。

【註】

[1] 内田律夫氏の著書『ものが語る歴史17』『古代日本海の漁撈民』2009年にて、古代以降の管状土錘についての分析がなされている。古代の資料として才ノ崎遺跡、古代から中世の資料として上長浜遺跡、近現代の資料として宍道町歴史民俗資料館所蔵の土錘を扱い、分散表を用いて長さと幅の関係分布の比較を行っている。

【参考文献】

- 出雲市市民文化部文化財課 2016『杉沢遺跡・杉沢II遺跡・杉沢横穴墓群』
 内田律夫 2009『古代日本海の漁撈民』『ものが語る歴史17』
 大賀克彦 2008『古墳時代後期における玉作の拡散』『古代文化研究 第十六号』
 神戸市教育委員会 2010『兵庫津遺跡発掘調査報告書—第14・20・21次調査—』
 是田敦 2022『出雲国の地域計画』『山陰における古代交通の研究』島根県古代文化研究センター
 島根県教育委員会 1984『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ：小無田遺跡』
 島根県教育委員会 1994『白コクリ遺跡・大原遺跡』

- 島根県教育委員会 1996 『四ツ廻II遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡』
- 島根県教育委員会 1997 『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』
- 島根県教育委員会 1998 『勝負遺跡・堂床古墳』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2018 『青谷横木遺跡』
- 東出雲町誌編さん委員会 1978 『東出雲町誌』
- 松江市教育委員会 2006 『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 2019 『松江市埋蔵文化財年報』
- 柳浦俊一 2019 「出雲における古墳時代中・後期の玉作遺跡とその特徴」『古墳時代の玉類の研究』
- 米田克己 2002 「島根県安来市大原遺跡における玉生産」『古代文化研究 第十号』
- 和田晴吾 2015 「古墳時代の生産と流通」『ものが語る歴史 17』

写 真 図 版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例: 9-1 は第 9 図 -1 を示す。)



調査地遠景（手前：種前遺跡、奥：崎田遺跡）（南西から）



崎田遺跡A区調査前近景（北西から）

図版2 崎田遺跡B区・種前遺跡



崎田遺跡B区調査前近景（北西から）



種前遺跡調査前近景（北東から）



崎田遺跡 B 区完掘状況（北西から）



崎田遺跡 B 区 SI01 完掘状況（南東から）

図版4 崎田遺跡B区



崎田遺跡B区 SI01 a-a' 土層断面（北から）



崎田遺跡B区 SI01 P3 土層断面（南東から）



崎田遺跡B区 SI01 遺物出土状況（東から）



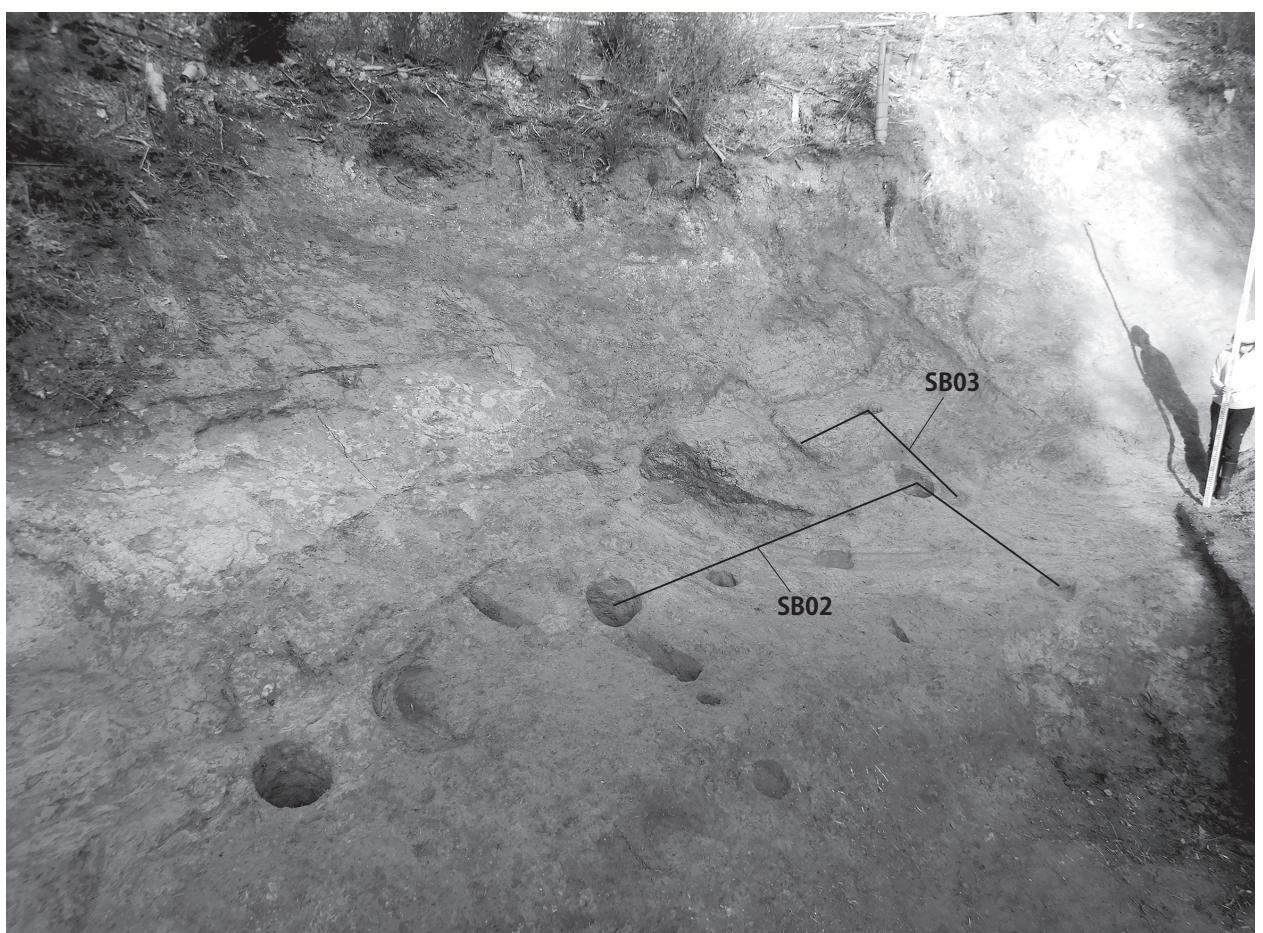
崎田遺跡B区 SI01 遺物出土状況（東から）



崎田遺跡B区 SI01 f-f' 土層断面（南西から）



崎田遺跡 C 区完掘状況（南東から）



崎田遺跡 C 区 SB02、SB03 完掘状況（南西から）

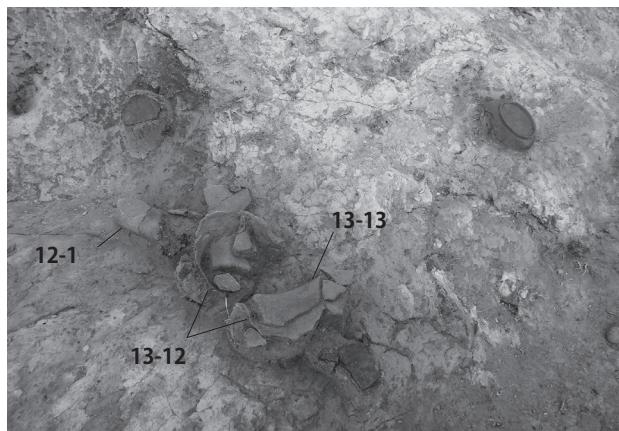
図版6 崎田遺跡C区



崎田遺跡 C 区 SB04、SB05、SB06 完掘状況（北から）



崎田遺跡 C 区 SB02、SB03 a-a' 土層断面（西から）



崎田遺跡 C 区 SB05 遺物出土状況（南西から）



崎田遺跡 C 区 遺物出土状況（西から）



崎田遺跡 A 区五輪塔石材散布状況（南東から）



崎田遺跡 A 区完掘状況（東から）

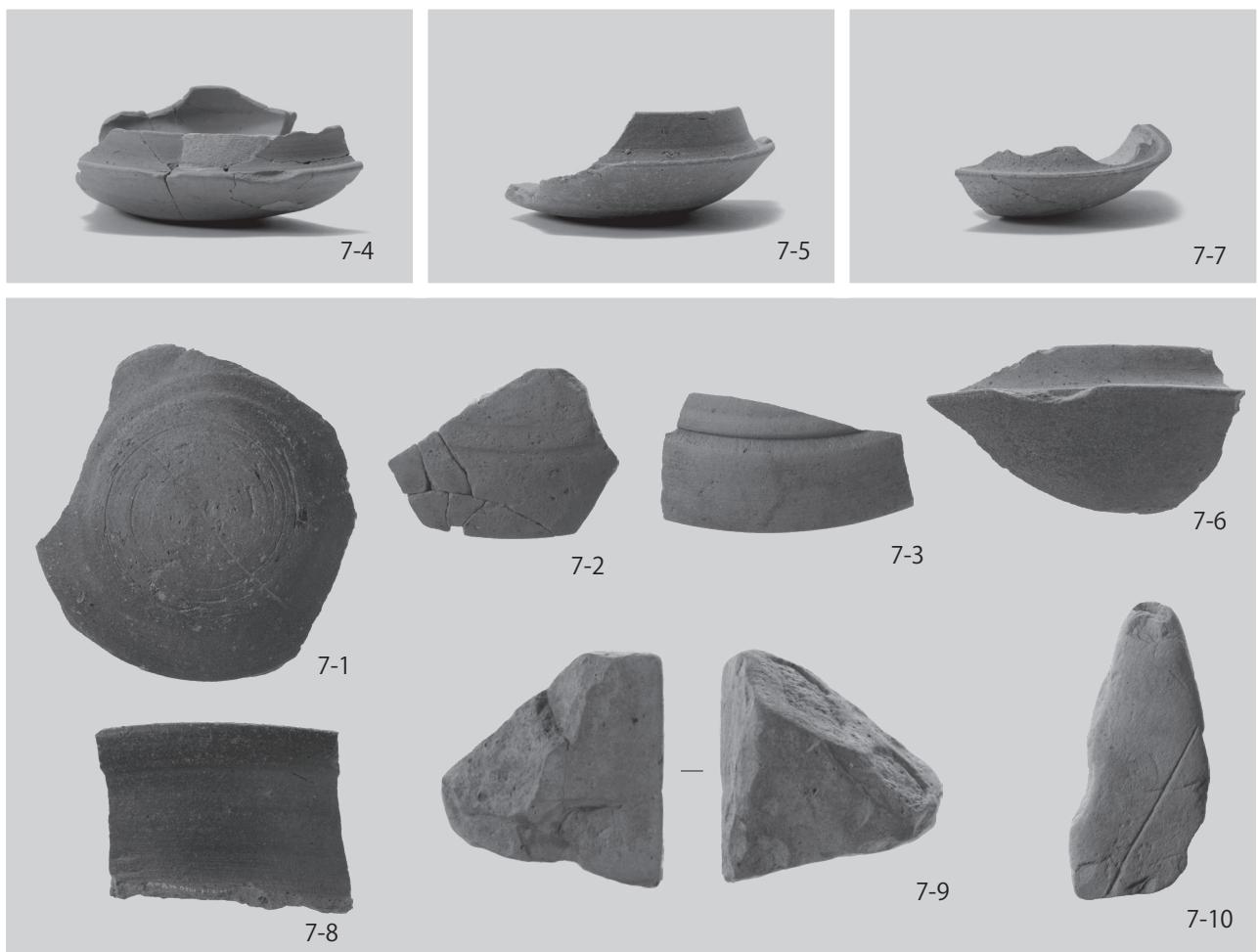
図版8 崎田遺跡A区



崎田遺跡 A 区 SK29 完掘状況（東から）



崎田遺跡 A 区 SK27、SK28 完掘状況（東から）



崎田遺跡 SI01 出土遺物



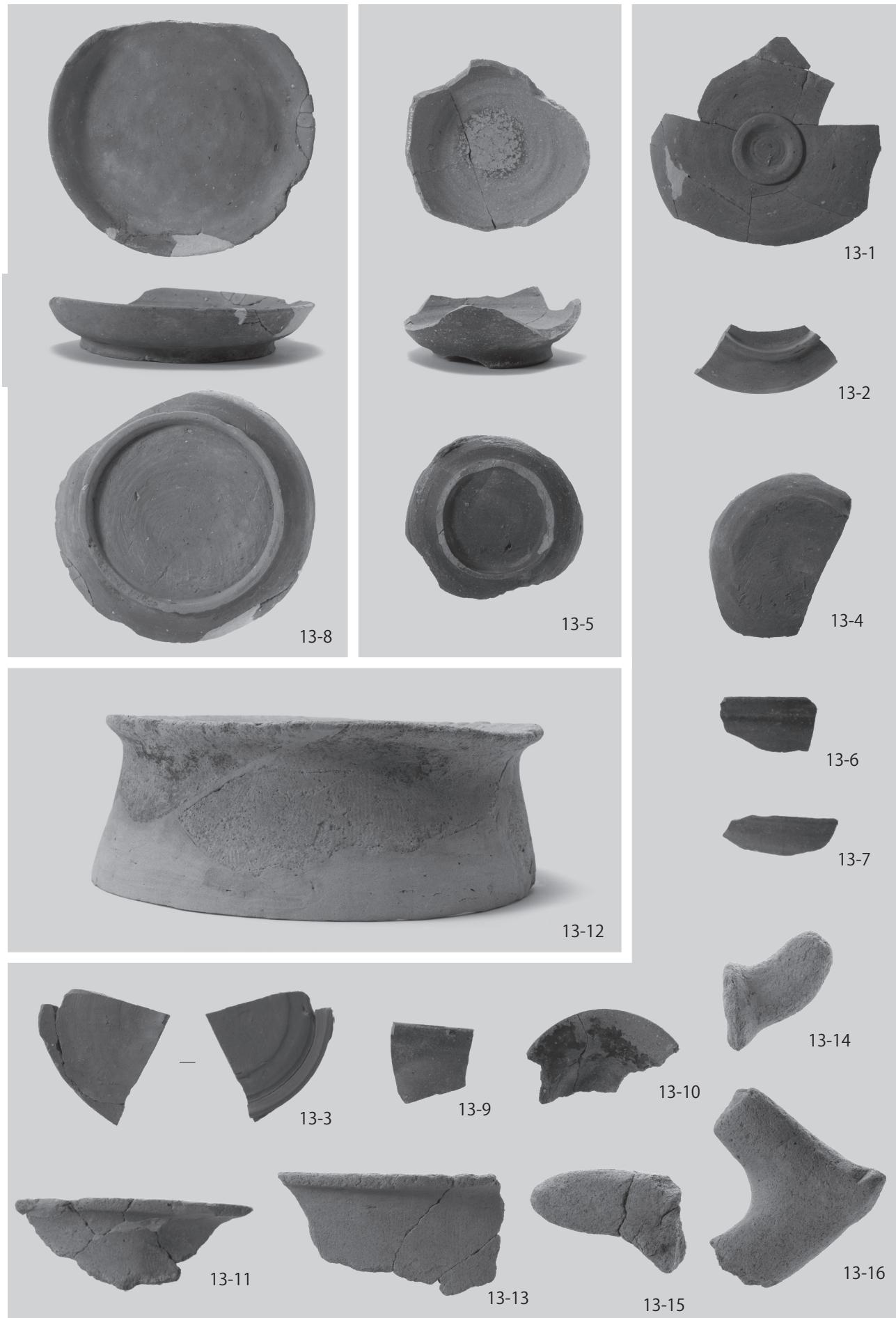
崎田遺跡 SB03 出土遺物



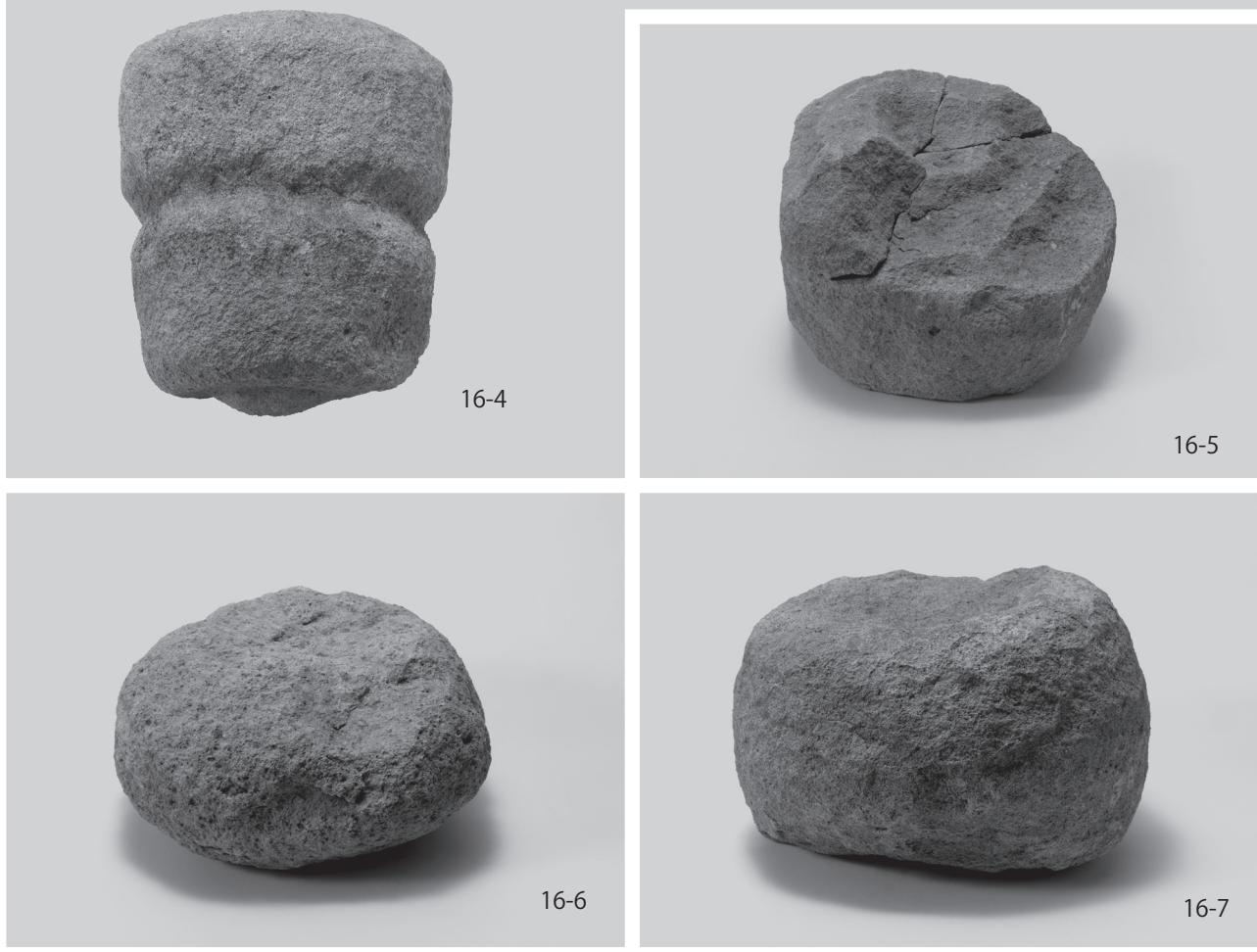
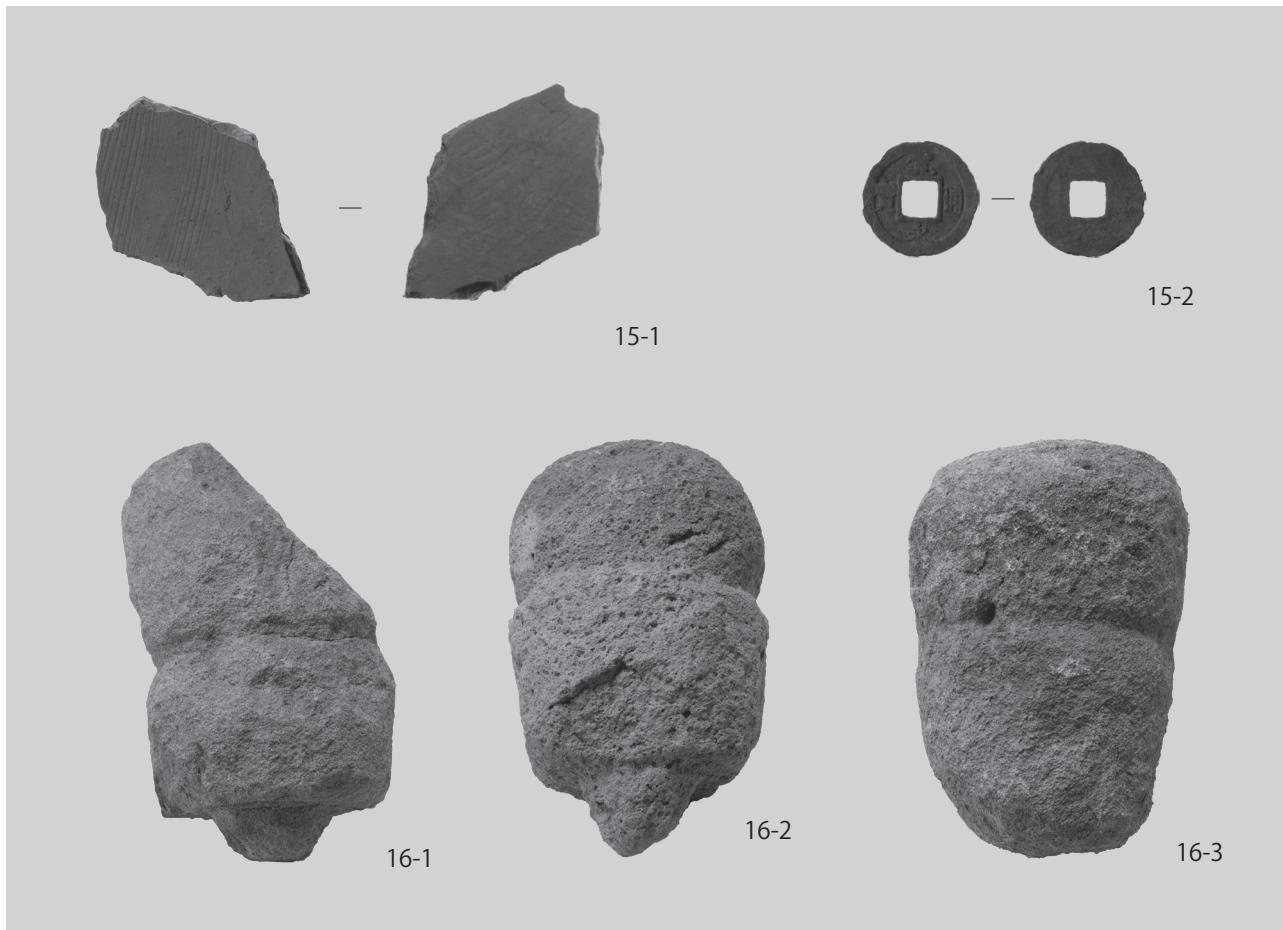
崎田遺跡 SB04 出土遺物

崎田遺跡 SB05 出土遺物

図版10 崎田遺跡出土遺物



崎田遺跡C区遺構外出土遺物



崎田遺跡 A 区・試掘 T-2 出土遺物

図版12 種前遺跡



種前遺跡完掘後全景（南西から）



種前遺跡完掘状況（北東から）



種前遺跡 A-A' 土層断面（北西から）

図版14 種前遺跡



種前遺跡 A-A' 土層断面東側（北西から）



種前遺跡 SI01 完掘状況（南から）



種前遺跡 SI01 a-a' 土層断面（南東から）



種前遺跡 SI01 西側柱穴土層断面（南東から）



種前遺跡 SI01 壁際溝西端土層断面（南東から）



種前遺跡 SI01 遺物出土状況（南から）



種前遺跡 SI01 遺物出土状況（北から）

図版16 種前遺跡



種前遺跡加工段1 (SB02他) 完掘状況 (北西から)



種前遺跡 SX13 検出状況 (西から)



種前遺跡 SX14 検出状況 (西から)



種前遺跡 P9 土層断面 (北西から)



種前遺跡 SK15 検出状況 (北西から)



種前遺跡加工段 2 (SB04 他) 完掘状況 (北西から)



種前遺跡 左から SD19、SD20、SD22 土層断面 (北西から)



種前遺跡 P16 土層断面 (北西から)



種前遺跡 SD22 完掘状況 (南西から)



種前遺跡 SD22 遺物出土状況 (南西から)

図版18 種前遺跡



種前遺跡加工段3 (SB05他) 完掘状況 (北西から)



種前遺跡 SK29 土層断面 (北西から)



種前遺跡 SK32、P28 完掘状況 (北から)



種前遺跡 SK27 完掘状況 (北から)



種前遺跡 P28 柱材出土状況 (北から)



種前遺跡加工段4 完掘状況①（西から）



種前遺跡加工段4 完掘状況②（北西から）

図版20 種前遺跡



種前遺跡中央部完掘状況① (北西から)



種前遺跡中央部完掘状況② (西から)



種前遺跡 SK10 一部完掘状況（北から）



種前遺跡 SK10 周辺 a-a' 土層断面（南西から）

図版22 種前遺跡



種前遺跡 NR11 完掘状況（北西から）



種前遺跡 NR11 a-a' 土層断面（西から）



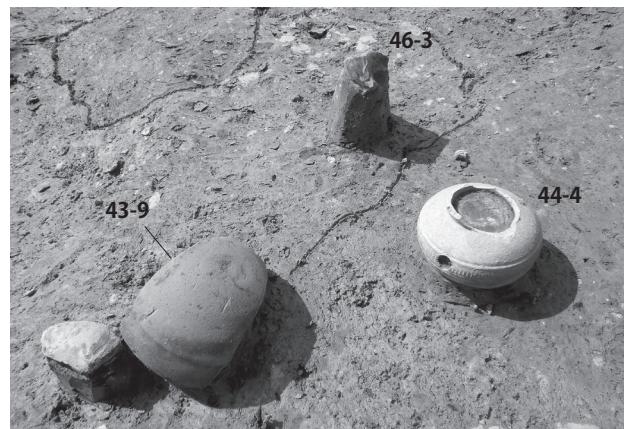
種前遺跡 NR11 古銭出土状況（西から）



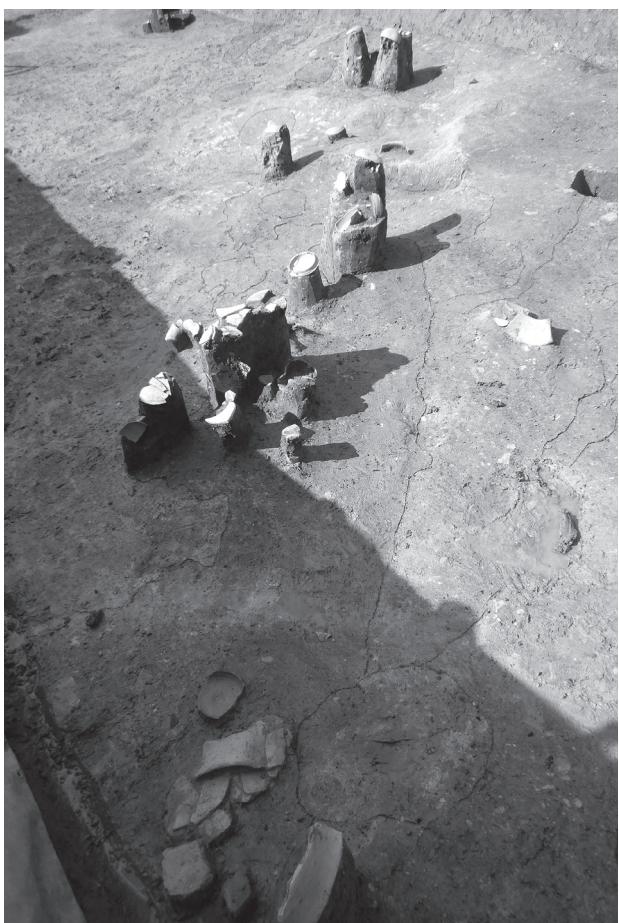
種前遺跡遺構外遺物出土状況（南西から）



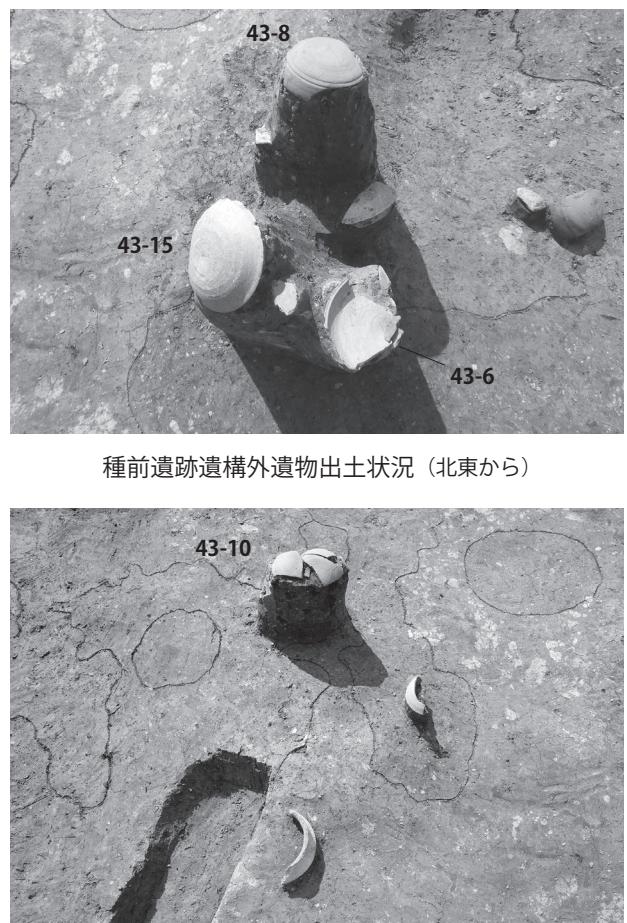
種前遺跡遺構外遺物出土状況（南から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から）

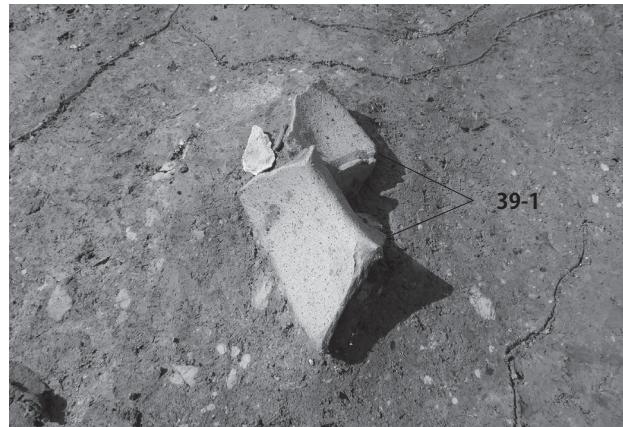


種前遺跡遺構外遺物出土状況（南東から）

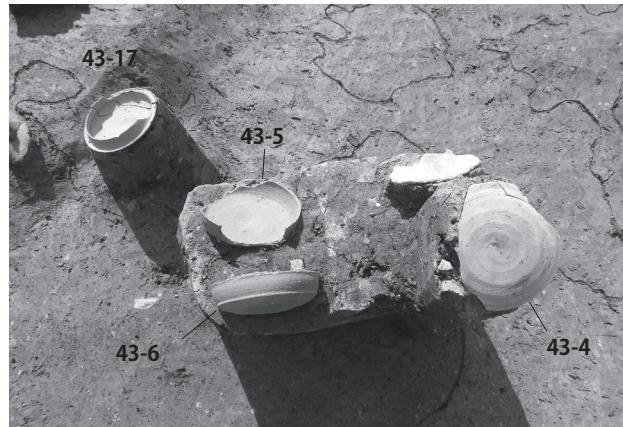


種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から）

図版24 種前遺跡



種前遺跡遺構外遺物出土状況（北から）



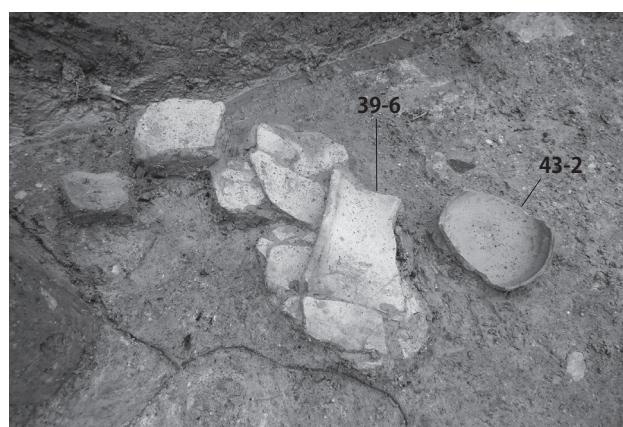
種前遺跡遺構外遺物出土状況（北東から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（北西から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（南東から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（北から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（南から）



種前遺跡遺構外遺物出土状況（南西から）



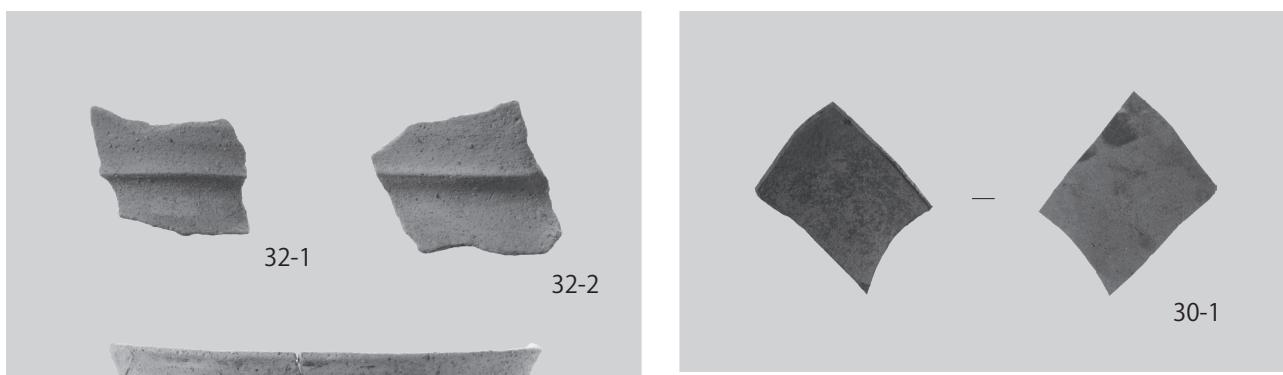
種前遺跡遺構外遺物出土状況（北西から）



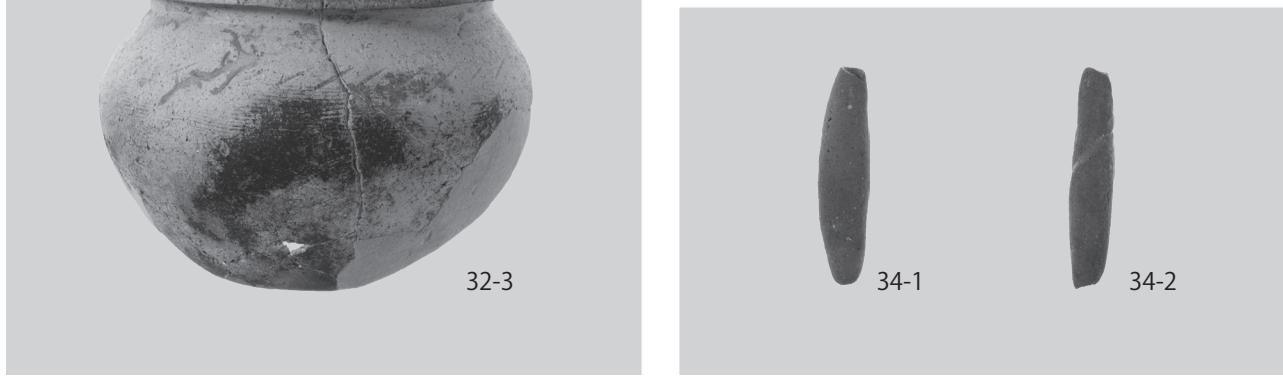
種前遺跡 SI01 出土遺物



種前遺跡加工段 2 遺構内出土遺物



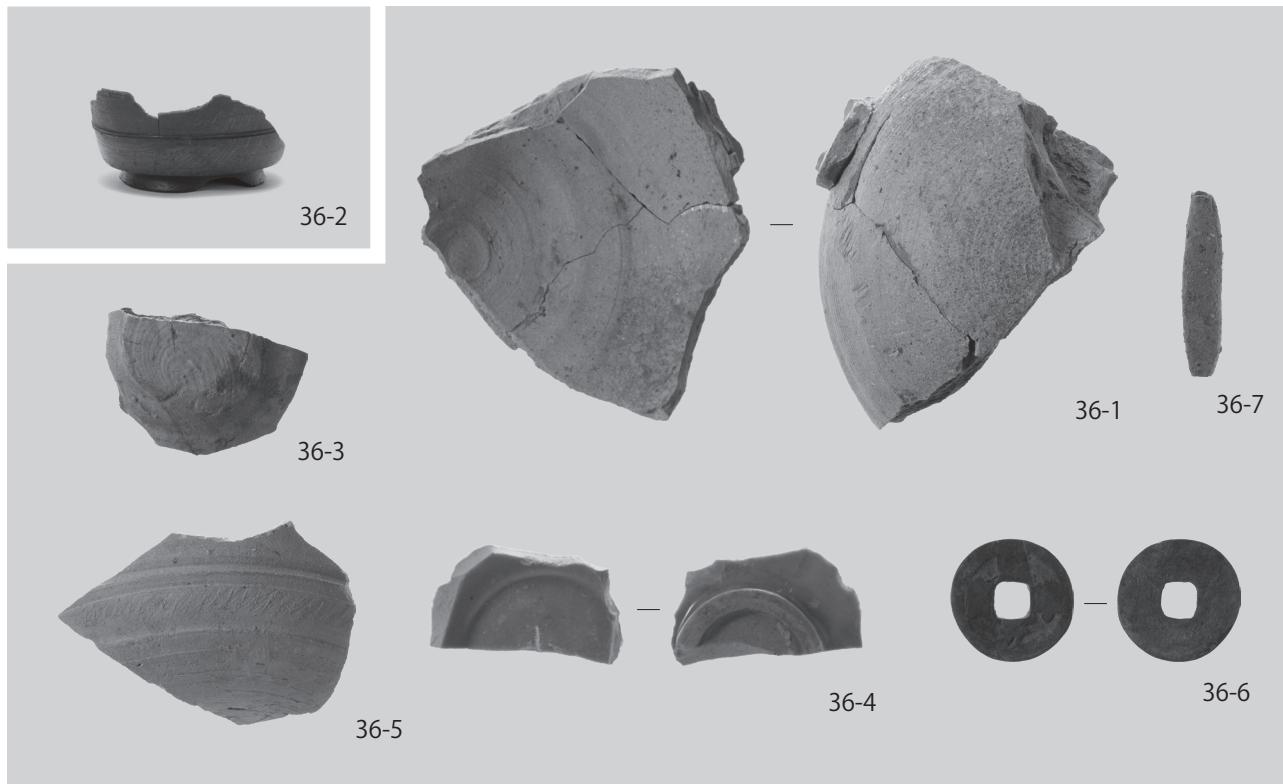
種前遺跡加工段 3 遺構内出土遺物



種前遺跡 SK10 出土遺物

種前遺跡加工段 4 遺構内出土遺物

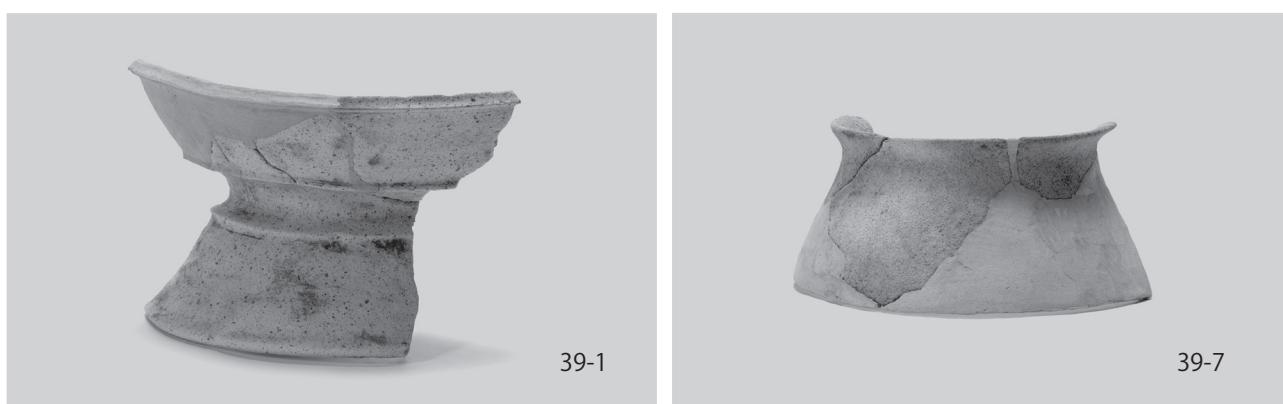
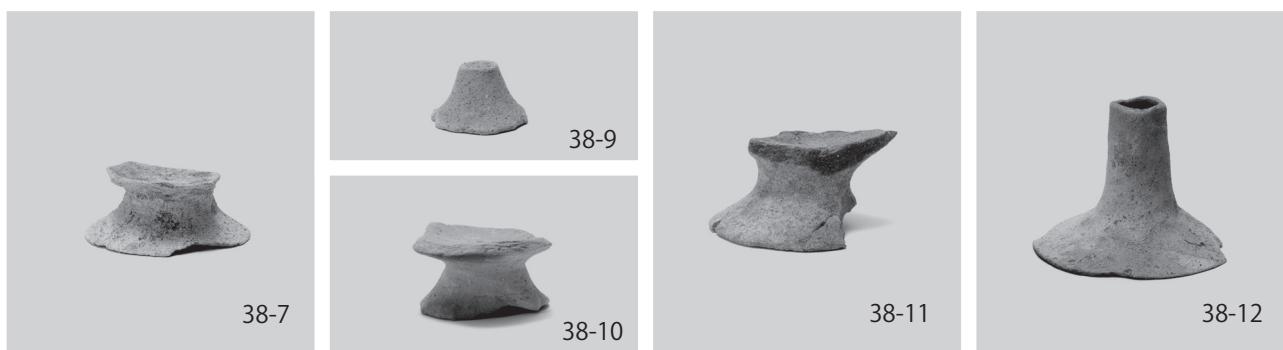
図版26 種前遺跡出土遺物



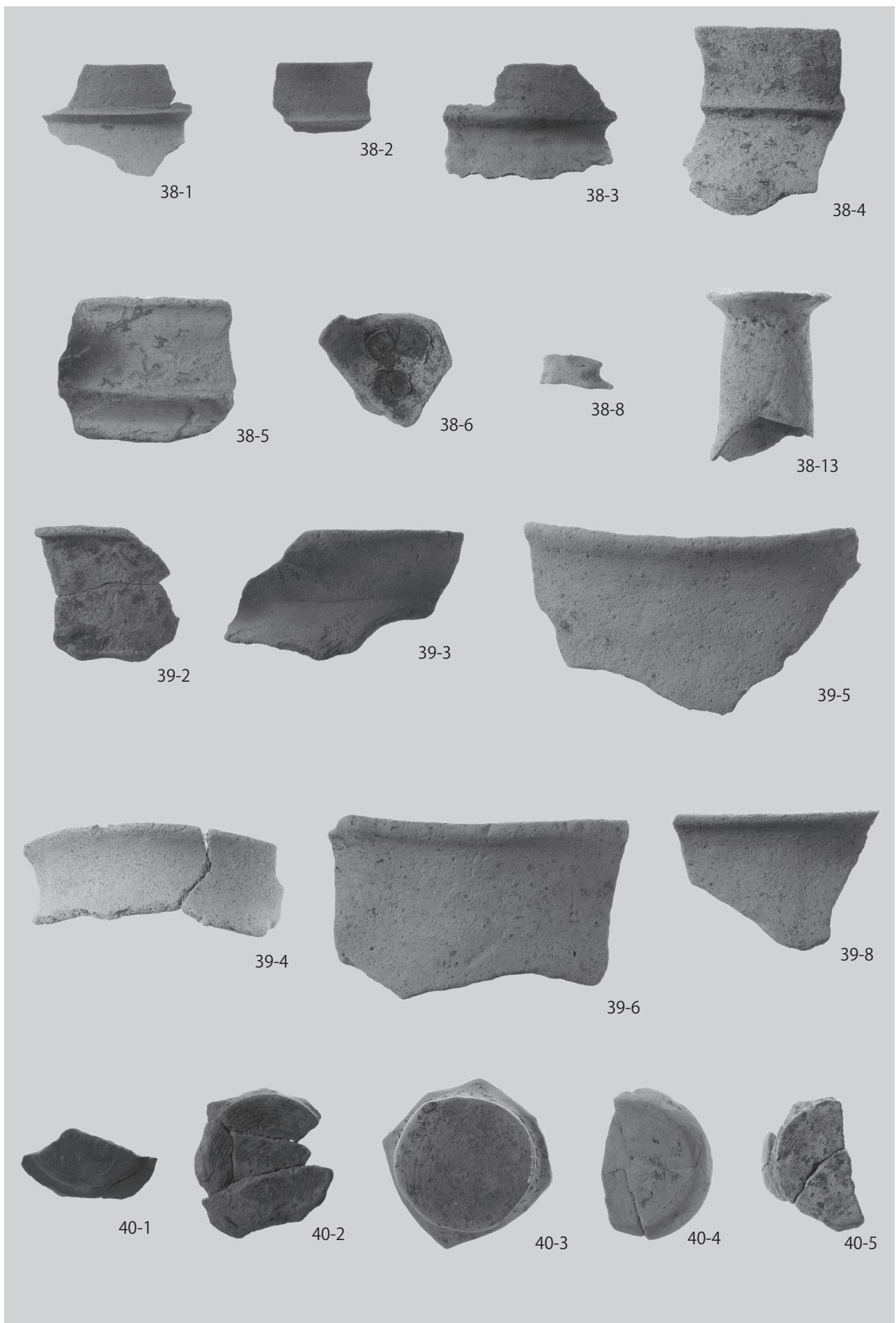
種前遺跡 NR11 出土遺物



種前遺跡遺構外出土遺物 (弥生土器)

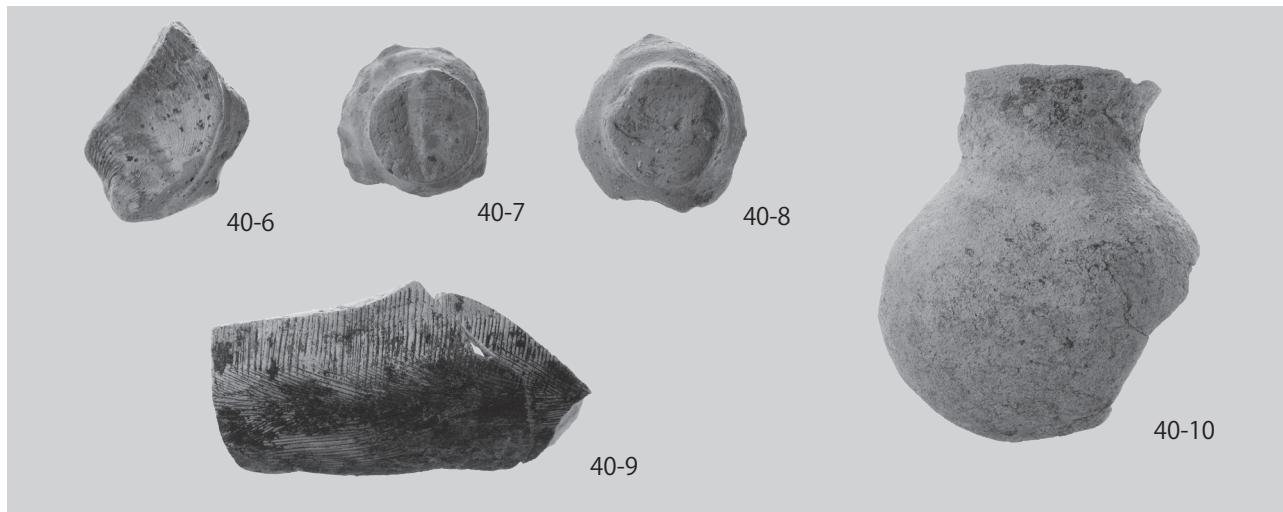


種前遺跡遺構外出土遺物 (土師器) (1)

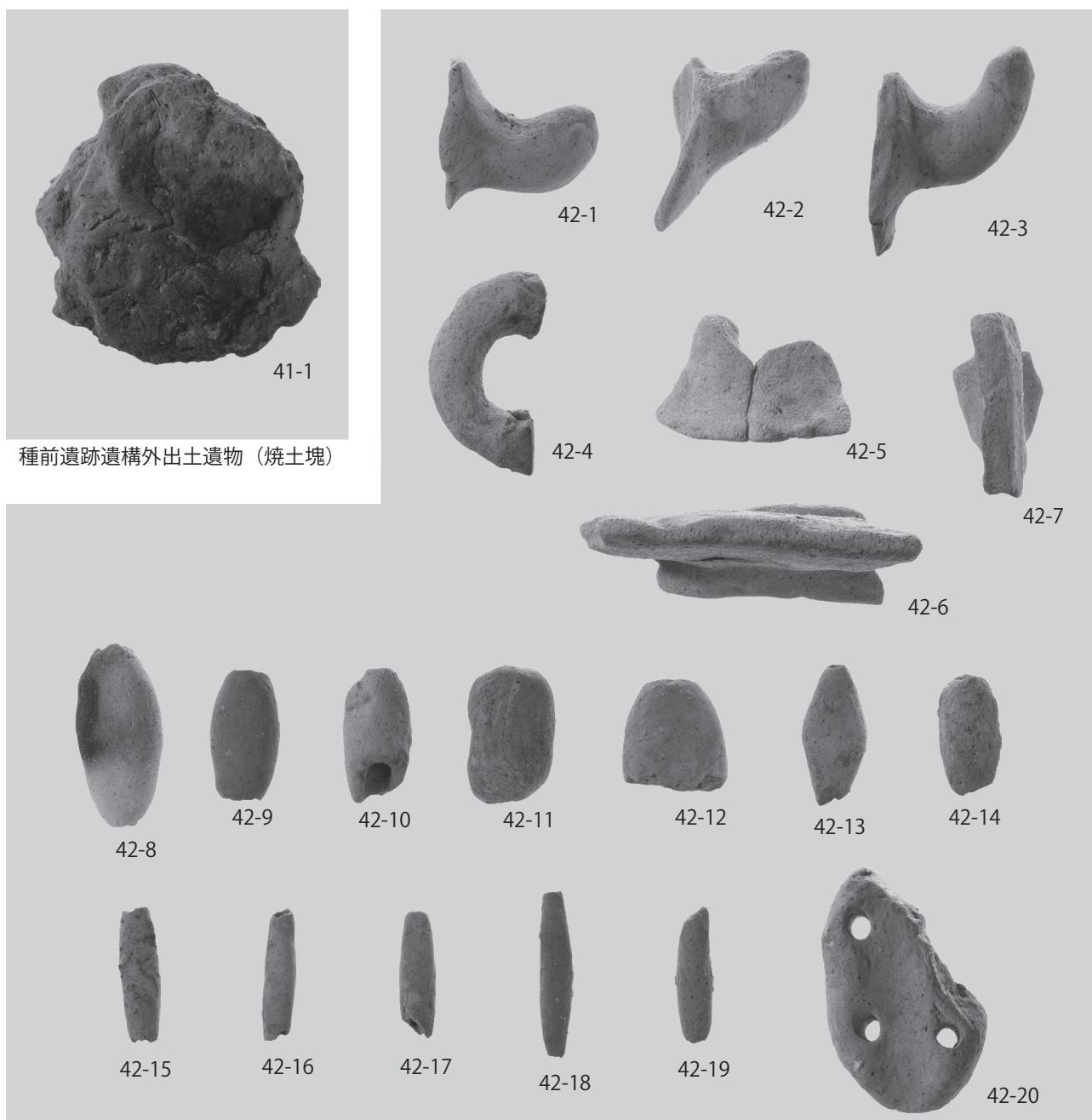


種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）(2)

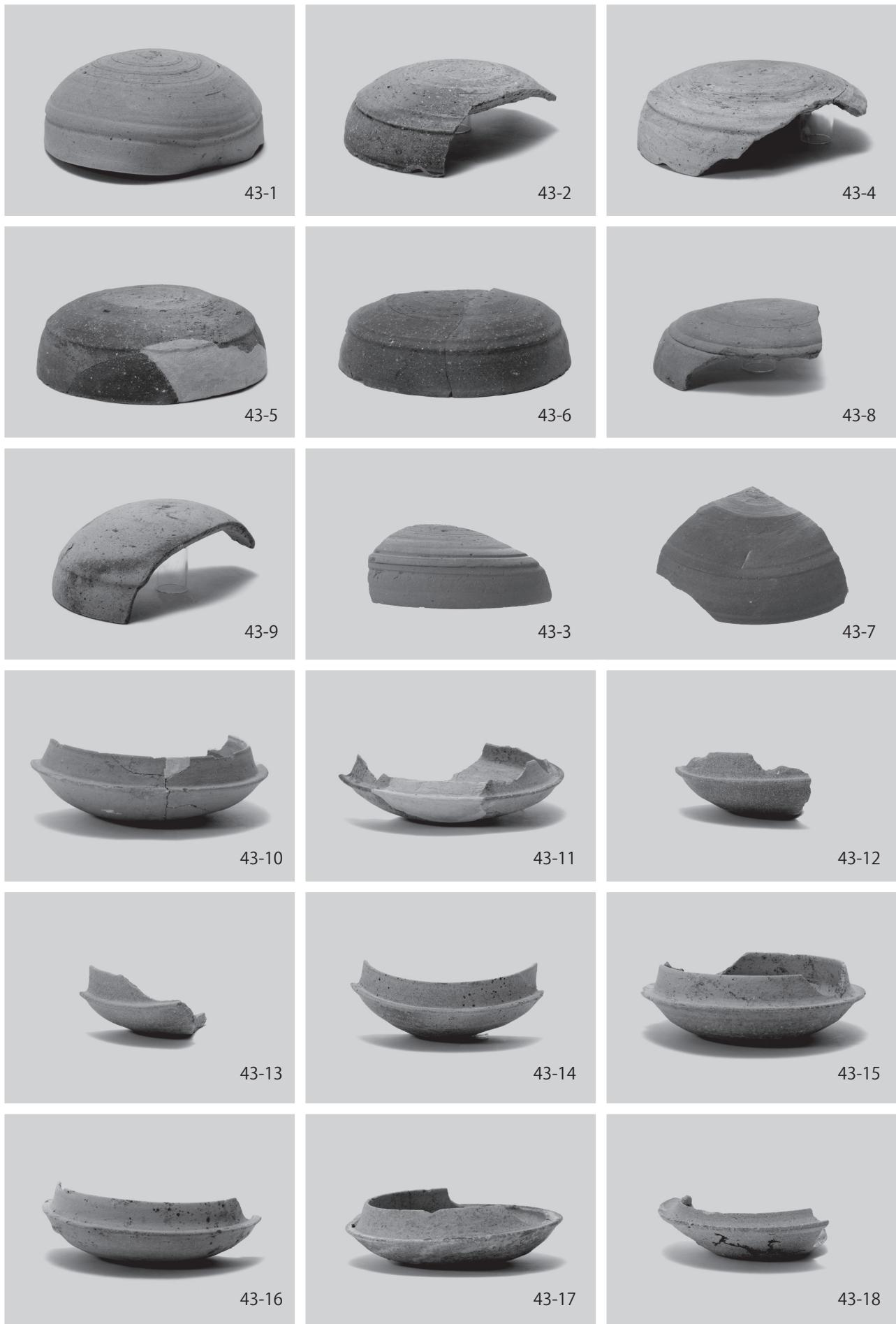
図版28 種前遺跡出土遺物



種前遺跡遺構外出土遺物（土師器）(3)

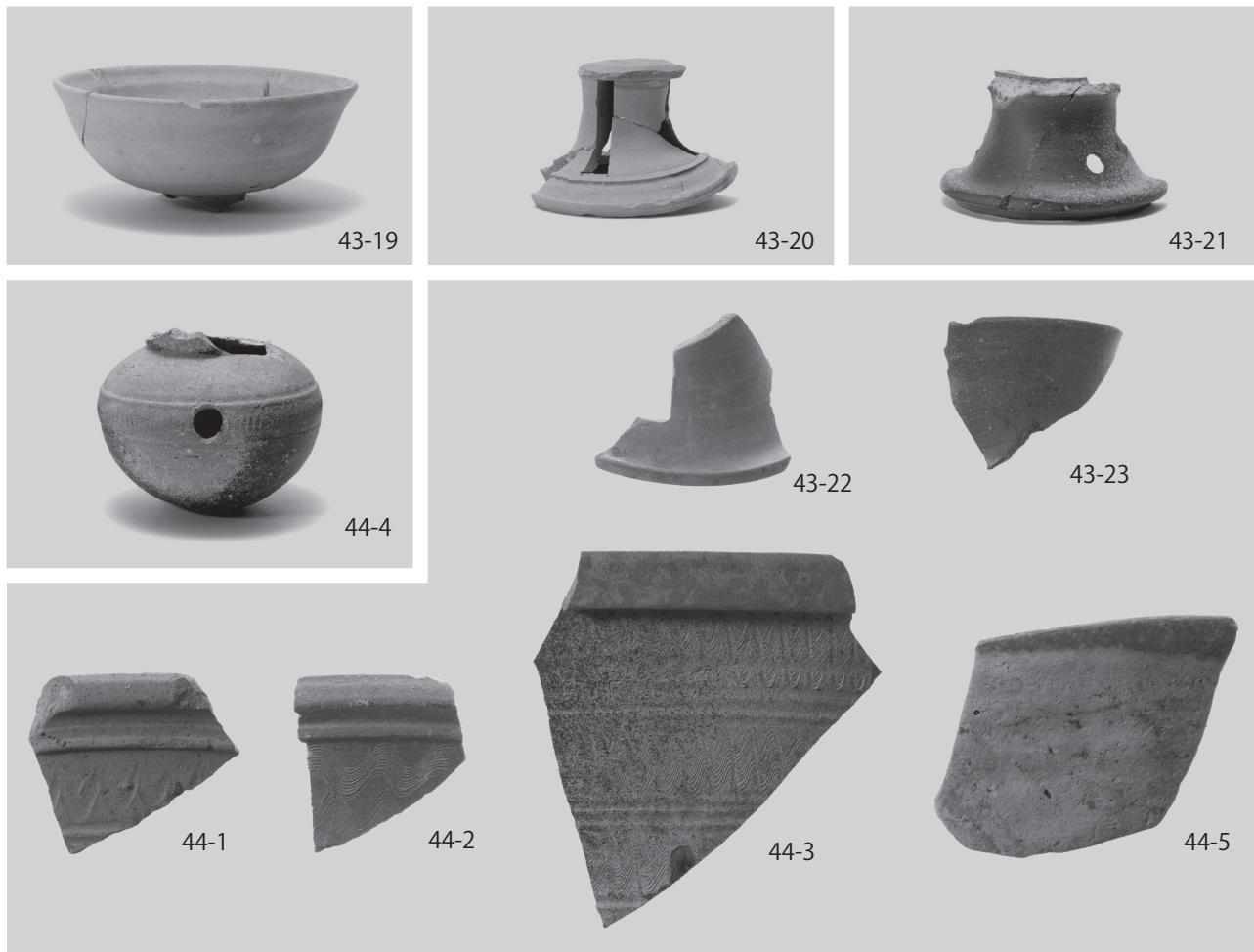


種前遺跡遺構外出土遺物（土製品）



種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）（1）

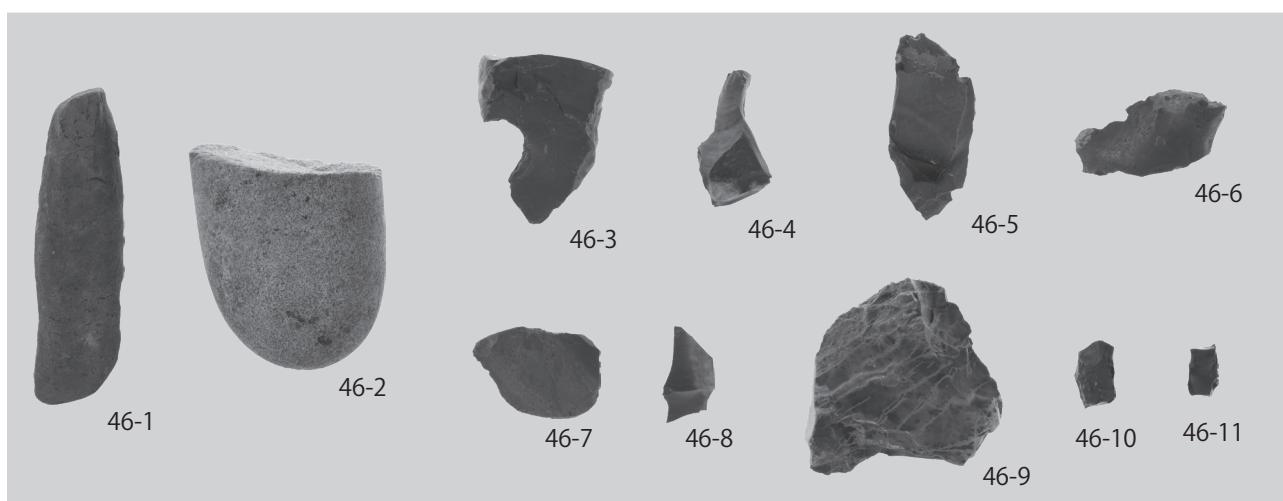
図版30 種前遺跡出土遺物



種前遺跡遺構外出土遺物（須恵器）(2)



種前遺跡遺構外出土遺物（陶磁器）



種前遺跡遺構外出土遺物（石製品）

報告書抄録

ふりがな	さきだいせき・たねまえいせき						
書名	崎田遺跡・種前遺跡						
副書名	都市計画道路揖屋馬潟線整備事業予定地内発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第217集						
編著者名	森山優花						
編集機関	松江市 (松江市文化スポーツ部 埋蔵文化財調査課)						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
発行年月日	令和6(2024)年3月29日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
さきだいせき 崎田遺跡	しまねけんまつえいせき 島根県松江市 ひがいすもちょういや 東出雲町揖屋 3419-5、3422-15	32201	E-72	35° 26' 00" 133° 9' 36"	20210801 ～ 20220110	395.16m ² 270.15m ²	道路の新設工事
たねまえいせき 種前遺跡	しまねけんまつえいせき 島根県松江市 ひがいすもちょういや 東出雲町揖屋 2536、2538-1	32201	E-154	35° 25' 59" 133° 9' 33"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
崎田遺跡 種前遺跡	集落遺跡	古墳時代 古代 中近世	豎穴建物跡 掘立柱建物跡 加工段 土壙墓	土師器 須恵器 磁器 柱根	崎田遺跡では豎穴建物跡1棟、掘立柱建物跡5棟、古墓3基を検出した。遺物は古墳時代後期から古代の須恵器が出土したほか、中近世の組合せ式五輪塔の部材を表探した。 種前遺跡では豎穴建物跡1棟、加工段4基に掘立柱建物跡8棟を検出した。遺物は古墳時代前期末から後期の須恵器と中近世の土師器・陶磁器が出土したほか、碧玉製玉類の未製品と中近世の土錐が出土している。		

松江市文化財調査報告書 第217集

揖屋馬潟線整備事業予定地内発掘調査報告書

崎田遺跡・種前遺跡

令和6（2024）年 3月

編集・発行 島根県松江市

印 刷 有限会社 古浦印刷
島根県松江市中原町 91

